我等W団

シロマティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我等Ｗ団

【Ｎコード】
Ｎ１９７７Ｊ

【作者名】
シロマティ

【あらすじ】
ある事をきっかけに組織を設立した悪の組織ミスターＷなにをきっかけに設立したのか、そして、彼の目指す世界征服は　成功するのか影の薄い正義の見方と戦い、仲間を集める、Ｗ団は今日も行く、そんな心優しい悪の視点のお話

W

「我等は世界征服をする！」
この一言から私達の世界征服は始まった。
その後月日が流れ
「では現状の報告を」
いつもの朝の朝礼から始まる、この組織は礼儀正しくが基本である。
「いつもどうり、世界は平和です」エンクラス。
この組織の副総統エンクラス。なにかと、この組織の世話を見てとても重宝されている。
「よし！それはよかった」この組織の総統ミスターWこの組織を設立した中心人物である。
「しかしそんなことを言ってしまうと我等、念願の世界征服をいつ実行するのですか」
「大丈夫！ちゃんと実行してるから」
そうすると後ろから小さな女の子を出してきた。
「総統誰なんですか？その可愛い女の子は」この組織唯一の殺られキャラ雑魚兵アライドと言ってもまだ１４歳だつまり世界征服を夢にしている少年
「そうこれこそよくある・・・人質と言うやつだ！」
「人質！」一同全員
「そうそうこの子はサリィちゃん、みんな仲良くしてね。ホラ、サリィちゃんも」
「こ、これからよろしくお、願いし、します」
サリィ、お話しどうり人質だ。
「これで正義の見方を誘いだし倒すのだ」
正義の見方（このお話しのヒーロー）
こうしてこのお話しが始まる。
そうこれは正義の見方が人質サリィを助け出すまでの話し。

「ではまずこの組織が設立したわけをお話しよう」
「誰か聞いてくれる優しい人いますかね？」
「そんな悲しいこと言わないで聞いてよアライドくん」
「私は聞くつもりでいるが」エンクラスはすでに自分のイスで飲食の用意をすませ座っていた。
「私も聞きたい」
「よかった話しを聞いてくれる人がいて、待っててサリィちゃん今飲み物出してくるから」
「話しはいつ始まるの」
それはまた次のお話。

W団設立のきっかけ（前書き）

いきなり総統の回想に入ってしまったがそれはまだ会社員だったころのお話しまだ若かった総統は何を思い組織を設立したのだろうか

W団設立のきっかけ

この組織が設立した訳は総統がまだ社会人だった頃から始まる
その日は丁度シャトルの打ち上げの日だった。
「ワタシハ、ニホンカラキタ、モノデ、ニモツヲワタシニキマシタ」
この片言英語こそまだ社会人だった頃の総統なのだ。
今、総統はエアコンを海外の宇宙センターに運ぶ仕事をしていた。
「ワタシハ、ニホンカラキタモノデ、エアコンヲ、トドケニキマシタ、ＯＫ？」
しかし宇宙センターのいかにも強そうな黒人の門番は何も言ってくれなかった。
「まったく日本人をバカにしているのかそりゃあ片言の英語だけど何か喋ってくれないかな」
総統はもう一度会話を試みた。
「ワタシハニホンカラキタモノデ、エアコンヲトドケニキマシタ」
……やはり無視だった。しかし、相手がやっと喋ってくれた
「¥＆@％＆ａｍｐ；ｃｅｎｔ；§※〒¥」
「え！？何て言ったの」
総統はどうしようと悩んだしかし、それは総統だけではなかった。
「…無口なんだ…俺…めんどくさいな…仮の警備員だし…誰でもいいから通しちゃおっかな…でも何回言っても…進んでくれない」
そして門番は総統に喋りかけた。
「¥％@＆」
「何て喋ってるか分からないどうしよう」
かれこれ1時間はこれの繰り返しをしていた。
その頃シャトルの打ち上げをする司令塔が悩んでいた。
「おい！まだ荷物は届かないのか」
「それが、荷物受け入れじゃなく直接渡しに来たとかで、すでに一週間前から到着しています」

「ならなんで届いてないの？」
「そこが重要なんです、どうやら根本的な間違いで、機材を間違えて入荷させたとかで」
そうまだ機材が届いてなかったのだ。
「いったい何時になったら届くのだ！」
相当時間をおしているので早くしないと打ち上げが中止になってしまう状況だった。
「司令ついに見つかりました。どうやら門番と会話が通じなかったようで、直射日光の中数時間に渡り討論していたようです。それと積み込む荷物はエアコンに似ているのですか？」
「そうだ！だから早くシャトルに積み込め」
「ハイ、分かりました」
その頃総統はやっと中に入れてホッとしていた。でも、ちょっと頭がグラグラしている。
「アー、中に入れたのはいいが何処に届ければ良いのかな」
そう考えながら何となく道を歩いていたら。
「お！ココにいたぞ」
「早くこっちにくるんだ」
「何だそんなにエアコンを早く付けたいのか？暑かったからね」
誘導よりも護送に近い感じで無事エアコンをシャトルに積み込む事が出来た。
「凄いなココがシャトルの中」
その時、入ってきた扉が閉まった。
「ん！？あ、開かない」
「はーいちゃっちゃとやっちゃって、時間のしてるよ～」
「了解です」
シャトルの打ち上げが始まった皆息を飲んで成功を祈っている。
そして…
「司令！シャトルの打ち上げ成功しました！」
「よーし、みんな打ち上げに行くぞ～、打ち上げだけに」

「司令、全然面白くないです」
「そうかぁ、まあいいや、とにかく皆よくやってくれた。これでの国に大気圏から人工衛星で攻撃し我が領土を広げる事が出来るぞ」
そうこのシャトルの打ち上げ事態、国を大気圏から攻撃するために作られた兵器だった。
その頃、宇宙にいる総統。
「ふわふわ浮かんでる…体がふわふわ……どうしよう」
どうやって地球に帰ろうか考えていた。
そんな状況下でも、とにかく気を落ち着かせようと外を見てみるた。
「あれが地球か……地球は青かった、どうでもいいか」
ようやく我に返ってきた総統だったが、ふっとある事に気づく。
「もしかして私ココにいたらまずいんじゃ、もしかして帰れずにここで死んでしまうんじゃ、イヤそれよりも見つかって殺されるんじゃ」
そうなったらもうパニック状態、無重力の宇宙でフワフワ浮かびながら神様に祈り出した。
「どうか、どうか私を誰か助け出して」
でもここにいても仕方ないので
総統は薄暗いシャトルの中を泳ぐように移動して行ったそうすると
「何だ？これが宇宙服と言うやつか本物を見るのは始めてだ」
そこはシャトルから宇宙に出るために作られた場所の一歩手前だった
「そろそろ人工衛星を切り離すか」
「そうだな、見ていろきつい一発を打ち込んでやる」
声が聞こえて驚く総統とにかくそこにあった予備の宇宙服を身につけてロッカー？の中に逃げ込んだ
「失敗は許されない点検をしておこうか」
「そうだないちよう調べておこうか」
総統は見つからないことをまた神様に祈りだした
「どうか見つかりませんようにもし見つかっても優しく、そう優しく…誰か助けて…誰も助けてくれないか」

なんてネガティブな祈りをしているのだろうか
「良し、もう良いだろう切り離しに移るぞ」
どうやら見つからなかったらしい。しかし、安心は出来ないとにかくこのロッカー？の中で少しの間隠れることに総統は決めて数分経った後、シャトルのデッキでは遂に人工衛星の切り離す作業が行われていた。
「司令室、シャトルと人工衛星の切り離す作業をするオバー」
「……連絡が聞こえないけど時間だ！切り離すぞ」
その時総統は
「ウゥー私は何時までココにいなければならないのだろうか」
そんなことを考えていたらロッカー？の後ろが開いて宇宙に放り出されてしまいそうになった。
「危ない！危ないまさか開くなんて聞いてないよ」
総統はそんなことを言っているがさっきまでの言葉を忘れてしまいそうなぐらいの景色がそこに広がっていた。それは青い地球と神々しい太陽の光だったそのあまりの美しい景色を見て総統はこう思った
「宇宙から見たら私達人はカビみたいに小さく儚い生物だ。地球も太陽に比べたらあまりに小さな存在だ。しかし、我々人類はこの地球を惨めに争って、奪い合っている世界が一つになり格差を無くせばだれもが幸せに暮らせるのに」
もう一度今の自分が見ている景色を確認して今まさに切り離されようとしている人工衛星を見て総統は決意した。
「私…いや我が世界を一つにするのだそう…世界征服！我が世界を征服して世界を一つにまとめ格差のない皆が平等に暮らせる世界を創るのだ！そう決めたからにはまずどうやって帰ろう」
そうすると総統は衛星のパーツを外し始めた。
「こんな恐ろしい兵器を美しい地球の空の上に浮かばせて置いてはいけない」
総統は切り離される直前まで部品を外し、シャトルの中え再度逃げ込んだ。

「その後、衛星を切り離したがすぐに分解して無事に地球に戻って来れたんだ」
「その時代はどっちの国も手を出せなかったから衛星で攻撃しようとしたんだろう」
「さすがエンクラスさん物知り」
総統の組織設立の理由を全部聞いたサリィは泣きながら
「総統さんに、そんなに深い理由があったんですね」
「あぁ、だ、大丈夫誰かハンカチ！ハンカチ持ってきて」
そしてサリィがやっと泣きやんだら
「総統さん！私頑張る、頑張って正義を誘いだして総統さんの願い叶える！」
「うん、頑張って正義を倒そうねそのためにもまず団員を増やさないとね」
「えっ僕とエンクラスさんがいるじゃないですか」
「アライド君さすがに二人だけじゃあ無理があるよまずは団員を増やさないとでも宛てがないんだよね」
そうするとここぞと言うようにエンクラスが
「総統宛てならあります」
「さすがエンクラスさん総統よりあてになる」
「ひどいよそれは」
とにかく団員集めのあてが出来たので総統引き入るW団は心を引き締め
「良し！では我々W団、団員集めに出撃！」
「我々W団！」一同全員

元の姿を取り戻せ（前書き）

新たな団員を集めるためエンクラスが仕入れた情報である山奥の池にいるらしいしかしその池は見るも無惨な光景だった

元の姿を取り戻せ

総統、アライド、エンクラスは新たな団員を集めるため近所にある山の山頂に来ている。
「で、いったいどんな人なの？」
新しく団員が増えるのがとても嬉しいのかいつもよりはしゃいでいる。
「人ではなくモンスターと言うのが妥当です」
「スゲー新しい団員ってモンスターなんですか」
エンクラスの新しい団員の情報を聞いてアライドが目をキラキラさせながらある場所に総統を追い抜かし走り出した。
「えっモンスターなの」
総統は少し悩んだ。
「モンスターか怖いな襲って来ないかなもし仲間にしても大きかったらどうしようとても家では飼えないよ食費とかどうしよう」
どんどん悪い想像が出てきてどうしようか悩んだ結果。
「まぁ食費はなんとかなるでしょう」
生活が苦しいのかいったいどんなことを考えたら食費のことが出てくるのだろうか。
「到着しました」
そこは山奥にある池だった。「こんな近くに池があったんだ知らなかった」
「僕は知ってましたよここ夏になるとホタルが池いっぱいになって綺麗だったなー」
「そうなんだ見てみたかったな」
しかし、今の蛍池は見るも無惨な姿だった。
池の周りにはお菓子の袋、空き缶、廃棄処分された冷蔵庫、クーラー、車、そして雑誌が散乱
「こんなにゴミがあるから蛍池がドロドロの沼地と化している」

「ひどいですねこの状態」
その時、沼地と化した蛍池の中央から泡が吹き出しその泡は徐々に大きくなり山のような形をし赤い目が出てきてして総統達を睨んできた。
「何あれ？あれが新しい団員？」
「多分そうだと思います。私も実物を見るのは始めてで」
総統とアライドは驚いていた
「こ、これじゃあ…大きすぎて家じゃ飼えないよ」
「スッゲー本物の怪獣だー」
そんな事を考えていたらドロドロとした物体が喋りかけてきた
「マタァ、コノウツクシイ、イケニゴミヲステニキタノカーーーー」
そのドロドロとした物体は重々しい声で喋りかけてきた。突然の出来事に驚きを隠せない二人しかし冷静なエンクラスは見たこともない物体に喋りかけた。

「私達は貴方を悪の組織我々W団に勧誘するために来ました」

さすがエンクラス後の二人とは出来が違う。
しかし…
「キエウセロ、ワレハコノチヲマモル、ワレハコノチヲ、モトドオリニスルー、ダカラキエウセロ」
そしたら山の形をした物体はまた沼地の中に帰ろうとした。
「待って下さいまだ話は終わってませんどうか話を」
物体の目が沼地に消えた瞬間におそらく沼の底にあったのだろうおびただしい数のゴミが沼の中から上空に放り投げられ総統達めがけて落ちてきた。
「うわぁーー」
一同全員森の中に逃げたが無傷の者はいなかった。
「どうするんですか総統これじゃ勧誘どころか近ずくことさえ出来ませんよ」

総統は自分にかかったゴミの臭いを気にしながら。
「とにかく早い話あそこにあるゴミを全部とりまた蛍が住める池にしたらこっちの話を聞いてくれるかもよ」
見事ゴミのダイレクトアタックを食らったエンクラスもその意見に同意しアライドも参加するようだ。
「よーし、我々W団は蛍池の復活そして蛍池の主の勧誘をするためゴミ拾いをするのじゃー」

こうして蛍池の復活そしてその主の勧誘をするためゴミ拾いをする事になった。
「総統これは不燃ゴミですか可燃ゴミですか？」
「それは可燃ゴミ、あと瓶や空き缶は色で分けてね後で質屋に持って行くから」
その時…
「そ、そ、総統ーー」
アライドの叫び声が聞こえた。

「なんじゃ、なんじゃ、コラ、アライド君なんでエロ本読んで遊んでいるんだ」
「でもコレ鑑賞用ですよ」
「鑑賞用でも実用用でもどっちでもいいすぐに縛って捨てなさい」
「え～持って帰ったら駄目なんですか」
「私からもお願いします」
総統の後ろからいきなりエンクラスが出てきて頼んできた。
「……まぁいいじゃろうサリィちゃんにはバレないように」「ヤッター」
総統達はまた作業を再開した。
「アりがトウ」
それから月日は流れ…
我々W団のおかげで蛍池は徐々に元の姿に変化していきこの運動が

周りの人々の耳に届き蛍池復活を手伝ってくれる人が増えていった。
「総統さんコレは何処に運ぶんですか？」
「サリィちゃんそれは重いからコレをアッチに持って行ってちょうだい」
町の人達の協力のおかげで蛍池は元の姿を取り戻した
「ありがとウ」
しかし、ゴミを捨てる人は減らなかった。
「悔しいですよ総統池は元の姿を取り戻しましたが僕らがゴミを拾っていることを良いことに捨てる人がいるんですよ」
四人は池の近くでその捨てる人の対策を練っていた時
「私にまかせて」
と突然池の方から透き通った声が聞こえた
「ん？その声は」
四人は辺りを見渡した誰もいなかった。
しかし、確かに聞こえた、「私にまかせて」と
そして総統とアライドはその夜泊まり込みで犯人を探す事にしたが雨が降ってきてしまい毎日のゴミ拾いで疲労が溜まり眠ってしまっていた。
「バカな奴らだこんないい捨て場を見逃すかよ」
「さあ早く捨てろ基地で出たゴミをすてついでにここの主を弱らせ捕まえるのだ」
そうするとタンカーを使って池の中にゴミを流しこんでいったが
「なんだ！なんで池の中にゴミが入らず水面に浮かんでいるんだ」
そうすると何処からか声が聞こえた。
「もう許さない！もうこの池は私だけの物じゃないあの三人の物でもあるのよ」
そうすると水面にあったゴミは空中を舞いながらタンカーの中に押し込まれていった。
「もうこの地に来ないで！」
その声と共に池の周りに住み着き始めた虫達が犯人めがけて襲い始

めた。
「に、逃げろー」
「馬鹿やろうどもこうなったら」
その場のリーダーらしき人物がタンカーごと池の中に突っ込んで行ったがタンカーは急停止した。
「どうして止まった、こ、これは」
タンカーの動きを止めたのは水で作られた犬だったしかも一匹じゃなく数匹も。
「昔の私にはここまでの力はなかったでもこの子たちは我々W団が作り出した力だからこそ次は私があの人達を助ける番」
水犬はタンカーを少しずつ押して行った、山の上にこの池はあるそのためここまで来るのに急斜面を登る事になるつまり
「や、やめろーーー」
リーダーを乗せたタンカーは登ってきた斜面を猛スピードで転がるように落ちて行った
「もう大丈夫ですよ」
その声の主は総統達が眠っている方向を向いて喋ったそうすると。
「感謝するのはこっちじゃワシらは何も出来なかった」
そこには目の覚めた総統がたっていた。
「私が言った通りこの子達は貴方が作りだした力だからお願いしますどうか新しい団員としてこの子達を連れてって下さい」
総統はこっちに歩みよってきた一匹の水の犬を選んだ。
「ありがとうこの子を我々W団の新しい仲間として大切に扱おう。後は貴方のことを何と呼んだらいいのかな」
始めて総統が見たこの地の主は微笑みながら。
「この地に住むものは蛍姫と」
「それでは蛍姫またあう日まで」
総統は雨の降る中、アライドを背に乗っけて帰って行った。
「忘れないで下さいこの地は貴方の物、忘れないで下さいその美しい心、諦めないで下さい貴方の夢」

蛍姫はまた池の中に入って総統達のこの場所を守り始めた守ってくれるのは自分だけじゃない水犬と言う新たな仲間と共に
……
「と言うわけで新たな仲間水犬くんが仲間になりましたのでお祝いだー」
そうここはあのドロドロだった沼地から見事復活をとげた蛍池
「もう来たんですか」
蛍姫は少々呆れながら総統に向けて喋った。
「いいじゃないですか祝いごとは沢山いたほうが楽しいじゃないですか、ほら水犬だって楽しそう」
アライドはどうやら水犬を気に入ったらしく水犬と一緒に遊んでいる。
「それにここはなかなか美しい花が咲き酒が進む」
エンクラスは一人酒を飲みながら楽しんでいる。
「そうですよ皆で楽しくしましょう」
サリィも水犬を気に入りお花の冠を作って頭に乗っけている。

「ねっ、皆もそう言ってる事だし」
「そうですね水犬達も楽しそう」
蛍姫の微笑みに釣られW団一同笑い出した。

屋敷に集う者達（前書き）

新しい団員水犬を仲間にしたが組織内で争いが始まった、そして別の組織が動き出す

屋敷に集う者達

今まさに基地の中でサリィとアライドが争っていた。
「私はこれがいいの」
サリィは手を引こうとはしない
「こっちの方が絶対良いよ」
アライドも手を引こうとはしなかったその二人が争っている種は。
「水犬ちゃんの名前はコレよ」
「水犬の名前はコレだ」
クゥーン、二人の争いの種が自分であることを理解しているのか悲しい声で鳴いている。
「なんでスイって名前なんだよそのまま過ぎるだろ」
「そのままのこの子の名前を付けただけよ、それより何でダイなのよ」
「水犬が大きくなるようにダイにするんだ」
サリィは水犬のそのままの姿で名前を決めアライドは水犬が大きくなって欲しいと願いを込めてこの名前にしたいらしい。
その時総統が自分の部屋から出てきた二人もこんな争いは長引かせたくわないだから総統がこの争いに終止符を下してくれると信じて総統を見たが大きな紙に字を書いて出てきた。
「まあまあ名前はコレでいいじゃない」
その紙には大きな字で水代と書いてあった
やはり前回のお話し同様に生活が厳しいのか
「・・・・・・・」サリィ
「・・・・・・・」アライド
「・・・・・・・」水犬
「ウッ、もう知らない！」
皆の沈黙が辛かったのか自分の部屋に猛スピードで入って行った。
「総統新たな団員の情報を仕入れました。アライド、総統は？」

「自分の部屋の中です」
エンクラスはすぐに察した。
「とにかく名前は後にして、総統新たな団員の情報を仕入れました。」
総統の耳には聞こえているだろうがドア越しのエンクラスの耳には泣き声が聞こえていた。
「この失態はどうするつもりだ」
今、まさに一人の男がとある失態の審議が行なわれている
「私はゴミを人が来ない場所に密かに捨てろと言ったはずだ、何故蛍池に捨てた」
まだ傷が癒えていないタキシード姿の男は骨折した右手を押さえながら話した。
「それは組織に蛍池に住む主を捕まえて献上するのがためにした行為でして謙二(けんじ)さんのポイントを上げるために」
鈍い音と共に謙二と言う男は骨折している右手を容赦なく踏みつけたそして、顔を近ずけ耳元で小さな声で喋った。
「勝手な行動をするな、謙二さんのためにやった?俺はそんな命令は出していないじゃあなんで坂を転がり落ちたタンカーの中にいた自分を助けたか?証拠を残さないためだ、そして…」
男の顔から血が抜かれたように引いていった激痛の中他の声は聴こえなかったが謙二が最後に言った言葉だけが鮮明に頭の中でこだまする。
「お前はもう必要じゃない」
「待って下さい謙二さん話を」
「連れて行け!」
二人のボディーガードが自分を持ち上げ謙二から離していく話しなどもう聴いてくれない、でも、少しでも良い少しの望みを持ちながら叫んだがその声はもうドア越しからは聴こえなかった。
「アイツの処分はどうします?」
カップ酒を片手に謙二は処分を下した

「殺すのは簡単だ、しかし、勿体無いな、最近噂になっている屋敷の中に捨てこい殺さずにだ」
そして、男を乗せた車は屋敷を目指して走り出した。
数日後……
「やっと着いたの、意外に遠かったね」
いろんな手段を使って到着したので財布の中を確認しながら総統は今夜テントをはる場所を探しながら一番後ろを歩いていた
「今回の新しい団員はどんなの？またモンスター？」
「いえ、違います」
一番前を歩いているエンクラスは全員に聞こえるように話した
「正確には……幽霊ですね」
「スッゲー、モンスターの次は幽霊ですか」
アライドはいつものように目をキラキラさせながら森の中を進んで行った。
「幽霊！見てみたい！」
水筒の中に水犬を入れてピクニック気分のサリィもアライドのような状態、水犬は水筒の中で吠えている幽霊が怖いのかその前に水筒から犬の声が聞こえるほうが怖いと思うが。
「到着しました。最近この屋敷から夜な夜な男の叫び声が聞こえたり屋敷の中を女の子が走り回っているようです」
総統達の目の前には古びた和風の屋敷が異様な空気を放ちながら中に一歩も総統達を
一同全員「お邪魔しまーす！」
総統以外は物凄いスピードで屋敷に入ってしまった
「み、皆ちょっと待って何でそんなにすんなり入って行っちゃうの」
「だって結局ここで一晩すごさないと行けないんですよそれに日が落ちますよ」
アライドの言った通りもう夕方だ今から引き返しても町に帰った時はもう夜中だ暗い森の中を灯りなしで歩いて行くのは危ないそう考えると総統も渋々、屋敷の中に入った。

しかし、既に到着していた一人の男は古びた屋敷の地下柱に繋がれ、逃げる事の出来ない状態で数日が経過しようとしていた。

幽霊屋敷探索（前書き）

ついに幽霊屋敷の探索が始まった新しい仲間を探しにきた総統達は
無事に探索出来るのか総統の精神と恐怖パラメーターはもつのか

幽霊屋敷探索

屋敷の地下、柱に縛られた男の目は死んでいた、自分の生涯を賭けて忠実に従って生きていた組織に捨てられ生きる気力を無くしたのだ、もう丸々3日ここに縛られている

「どうしてこんなことに」

確かに命令されなかった行動をして迷惑をかけたそれは認めるしかし、ここまで酷いことになるなんて。

「もうどうでもいいかこのままでも」

そう思って天井を見上げたら天井に群がる黒い塊地下だから周りが暗いがそれでも分かる異様な塊。男は手に持っていた拳銃を握り締め最後に組織から言われた命令を思い出した。

「ここには面白い噂があるもし貴様がその正体を突き止め証拠となる物を何でも良い持ってこい、そうだコレを置いて行こう苦しくなったら、言わなくても分かるよな」

そう言い残しその場を去って行った一発の玉と拳銃を残し。

「俺が死んだら食うつもりか安心しろ後もうちょっとでご馳走にありつける」

もう覚悟している最近俺は天国に行くのか地獄に行くのか考えているそしてもう一つ考えていることがある

「まだ生きてる」

小さな声が聴こえた。

この声だ！この声の正体を知りたい

「まだ生きてるよ～」

この声の正体が噂のやつなのか？たぶんそうだろうだがいっつも返答がないもうすぐ日が暮れる明日俺は生きているのか……日は完全に暮れ森の中にある屋敷は異様な空気を放ちながら中に一歩も総統達を

一同全員「お邪魔しまーす！」

総統以外は物凄いスピードで屋敷に入ってから数分後総統達は中庭に立っていた玄関からすぐ目の前にあった扉から中庭に入りある木を中心に斜めに四方に花壇があったスッカリ荒れ果てているがちゃんと花が咲いていた。
「こんな所に花が咲いてますよ不思議ですね」
「気をつけて皆、何が出てきてもおかしくない気配だから」
サリィは気にせず花を見ているが総統は周りが凄く気になって首が痛くなりそうな早さで周囲を警戒している。
「大きな木ですね」
「しかしツタが絡みついて木を覆い尽くしている」
アライドは木を見ているがエンクラスは木の側にある別の物、石碑を見逃さなかった。
「皆とにかくこの屋敷の探索するよ何かあったらすぐに逃げてねそれじゃあ割り当てするよ」その結果一班、総統・サリィ・水犬
二班エンクラス・アライド
「それじゃあ玄関から左右に別れて二階があるようだから階段があったら登って私たちは右、アライド君は左に行ってね」
「総統！しかしこういうホラーな展開は何かと単独行動をするのが筋ですけどそれはしないんですか？」
「アライド君そんな展開は私は求めていない」
心の中ではそのホラーでよくある単独行動がちらついて今一番恐れている。
「アライド君、単独行動はしないことそこんところ覚えておいて、それじゃあ探索開始」
と言うことで屋敷の探索を開始した外見は古い屋敷でボロボロだか内側は総統の感覚では意外に綺麗だったまるで誰かが住んでいるような故に総統の恐怖パラメーターは爆発寸前、精神ハートポイント０寸前そんな総統の目の前に現れた階段しかも二階に行く階段ならまだしも地下室に行く階段を見つけてしまった。
「まさか地下があるなんて・でも行かないと…ダメだよねサリィち

ゃん」
そんな事を考えていたら既に先に進んでいるサリィ
「早く〜総統さん」
「サリィちゃん先に行かないで」
地下に行く階段はどうやら自然に出来た空洞らしく下りて行くにつれじめじめした空気が漂ってきてどんどん幽霊が出て来そうな雰囲気になってきてしまった。そうして地下室についたそこには誰もいなかったがそのかわりいろんな種類の保存食が沢山あった。
「凄い、凄いぞコレまだ食べれるなんて凄い保存食だ」
屋敷の探索を忘れて組織の食費が浮きそうでテンションアップしている総統。
「でも大丈夫なのかなお腹痛くならないかな」
そう考えながら高い所にあるビンを取ろうとしたら。
棚がサリィめがけて倒れてきた
「サリィちゃん危ない」
総統は素早くサリィの手を引き棚が倒れる前に救い出した。
「危ないよサリィちゃん、ちゃんと気をつけないと、ん？あれは」
倒れた棚の奥に扉があった。
「総統さんもしかするとこの先に幽霊がいるかもそしてホラーでありがちなメンバーの一人が消えたり柱に縛られた骸があるのかも」
「サリィちゃん、アライド君みたいな事言わないで」
しかし総統はこの先は何か危険な物があると感じた。
「サリィちゃんはここで待っててワシだけで行ってくる」
「総統さん気を付けて」
サリィは扉の先に行った総統を見ながら思った…結局……単独行動してるじゃん！
……どうやら更に降りないみたいだ扉の先を歩いて行き、また扉があり開いたそこには部屋があり少し段差があるみたいだ目の前に階段があり右手の方向にはこの屋敷の柱があったそこに縛られた男の姿が、固まっている総統にかすれた声で話しかけてきた。

「オレを食いに来たのか？残念だなまだだそのかわりオレはとても飢えている……」
そして大きな二つの声が部屋の中に響いた
「貴様を食ってやろうかーーーー」
「イヤーーーーーー！」
「なんなのよさっきの大声は、でも丁度よかったあとはあのサリィと言う子をどうやってあの奇妙な声がする筒から引き離すか」
その時サリィはさっきの大声にびっくりしたのか倒れた棚の中に隠れていた。
「さっきの大声もしかして総統さん？総統さんの身に何かあったのかも早く水筒からスイを出さないと」
そうして肩にかけていた水筒を外した
「今だ！」
そうするとサリィの持っていた水筒が下りてきた階段に飛んで行ってしまった。
サリィは急いで取りに行ったら階段に黒い影がそしてサリィを連れて去っていった
「総統さーーーーん」
そのころ、アライドとエンクラスは二階に上がっていた
「エンクラスさんさっきの声はなんだったんでしょうか総統の声だったような気がしますが、エンクラスさん？」
エンクラスは左手の通路にある角の部屋を見ている。
「アライド、君も一人の戦闘員だったらここは別れて行動しよう」
アライドは察してエンクラスの考えに乗り別れて行動することにした。
「それでいい、さあ出てこい」
扉の隙間から見える黒い塊赤い眼。
総統達は生きてこの屋敷から出れるのかそして結局総統の言うこと聞いてないよ

それぞれの行動（前書き）

真夜中の屋敷の地下からの総統の叫び声。
水犬を残し連れ去られてしまったサリィ。
謎の物体に対抗しようとするエンクランス。
無事この屋敷から逃げ出す事が出来るのだろうか？
あと忘れてしまいそうになるがこれは仲間集めのはなしです。

それぞれの行動

真夜中の屋敷の地下からの総統の叫び声。
水犬を残し連れ去られてしまったサリィ。
謎の物体に対抗しようとするエンクランス。
まずは総統の話から。
気絶しかけの総統を何とか正気にさせることに成功した柱の男
「おい！気絶するな頼む心優しい人なら助けてくれ」
「なんでこんなとこに人が縛られてるの。まさかおたのしみ中？」
「そんなことはないから早く食べ・物、水・・を」
そう言い残すと男の眼はゆっくりと閉じて深い眠りに…総統は漠然とした。
「そんなもっと早くに見つけておけばこんなことには。とにかくお供え物の用意を」
「頼む早くしてくれ」
数分後…
さっきの食糧庫から何個かバックに入れてた食べ物を男に食べさせ、なんとか男の山は越えたようで息を吹きかえした。
「よかった。なんとかなって、近くに食糧庫があったから助かったんだよ。でもなんでこんな所でお楽しみ・・」
「おい！だからそれ違う。おれは・・・」
その時忘れかけていた絶望が甦る組織からの排除、切り捨て、もう男には帰る場所がなくなっていたのだ。
「なんか事情がありそうだね無理に話さなくてもいいよとりあえずここから出よ」
男は総統の言いなり道理動くことにした。そして食糧庫に着いた時総統は大切な資金を入れた財布を無くしいた時の感覚に襲われた。
そこにはサリィちゃんの姿はなく水筒が転がっているだけ。
「サ、サリィちゃあーーーん」

総統は絶望したこれではさっきした班分けの意味がない、このまま
サリィが見つからなかったらエンクランスやアライドに怒られる。
そんな総統を見ながらとても気になっている物があった、この奇妙
な音がする水筒だ。
「なんだこれ」
男は転がっていた水筒を手に取り中身を確認しようとした。
水筒の封印が解かれた。ようやく外に出られた水犬は意気よいよく
飛び出してきた。
その姿はあの事件をもたらし組織からは捨てられ自分をこんな見た
こともない所に縛られてしまった。
その事件の邪魔ものが今、目の前に。
「こいつのせいで俺は」
その時パニックっていた総統が正気に戻り水犬に気がついた
「水代！よかった君がいたらサリィちゃんを探せる。水代、サリィ
ちゃんを捜すのじゃー」
男は戸惑ったまさかこの化け物が命の恩人のペットだなんてこの男
何者なんだ。
とにかく今はあの時の仕返しはしなくていい、もしかするとこの屋
敷の噂の、あの声の主体を見つけられるのではないか。
そう思い今は黙ってつ
いて行く事にした。
エンクランス、ストーリー
アライドと話して一人で行動するように仕向けたエンクランス、見
ている先には謎の物体？きっと生き物だろう仕入れた情報ならその
物体の推測は出来ている。
しかし、何の武器も持っていない、こんな状況で戦闘になってしま
ったら明らかこちらが不利、だがエンクランスには唯一の武器があ
るそれは・・・
意地だ。
総統と水犬とで屋敷の前で約束した。

「何が起こってもおかしくないだからこそ私達でアライドやサリィを守るのだ」
そのためにも・・・。
ここで二人の危険になるものを自分自身で確かめるのだ。
エンクランスは扉を開け部屋の中に入り誰も入らないようにした。
これで逃げられないし逃げ出す事も出来ない完全孤立だ。
どうやら相手側も理解したようでついにその姿を現した。
褐色に近く、全身にまだら模様があり８本の足、赤い４つの目にそしてそれがまるで軍隊蟻のように壁や天井に張り付いている。
ところどころに巣がありいろんな獲物が掛かっていた。蝶やカマキリの昆虫類やハ虫類、大きいもので小鹿が糸に絡みついていた、たぶんもう中身は空っぽだろう。
そう蜘蛛だ、手のひらサイズの蜘蛛が無数にエンクランスを威嚇していた。
「やはりそうか虫よけスプレーじゃ駄目だなこれは」
これでは打つ手がないそう思っていたら何やら蜘蛛達の動きが鈍い。
何か上からの指示的なものを待っている様子。このチャンスを生かさなくては。
そう思いエンクランスは深く深呼吸した。
今考えたらこの作戦失敗したら結構大変なことになるんじゃないのか？しかし、そんなことは考えてられない。
エンクランスは蜘蛛達の威嚇に対し威嚇で反撃した。
「全員静まれーーー！」
部屋の中が凄い勢いで振動する。
ようやくエンクランスの喝が小さくなり、今の状況を確認したら、さっきまでの威嚇は無くなり後ろに引いている。
どうやら予想どうりだ、この蜘蛛達、そうとう誰かに飼い慣らされている。
いったいこの蜘蛛達の飼い主はどんな奴なんだ。
しかし、二つ分かった事はそいつは人に近いものだという事。

人じゃなくもっと大きい蜘蛛とかだったらさっきの喝の効き目は低いだろう。
しかし、効果は抜群、人であるエンクランスの言葉も理解しているようだ。じゃなかったら今頃Ｒ－１８指定になってタグにグロ注意をつけなくてはならない。
そんなことは出来るだけしたくはない。
まあこれで脅威となるものは少なくなっただろう、無くなったとは言い切れない。
まあとにもかくにも深呼吸して。
もう一つ、その飼い主に不満を持っている事、じゃなかったら喜んでこの命令は聞かなかっただろう。
「いいか！今からこの屋敷内に来たものすべてに威嚇、攻撃してはならない、分かったか――！」
この後すぐさま扉を壊し。
「ならば、私が呼ぶまで散れーー！」
扉が壊れたので蜘蛛達はすぐさま外に逃げるかのように去って行った。
エンクランスも蜘蛛達が全員去ったことを確認した後に出て行った。
廊下に出るとアライドがその一部始終を見ていた。
「やっぱりエンクランスさんは凄いですねあんな蜘蛛相手に冷静に対処するなんて、総統じゃあ出来ない行動ですよ」
「アライド、そんなこと言ってはいけないぞ総統は総統でまた私とは別の力を持っている」
そう、だからこそ私は総統についている、だからこそ私は総統の力になるためにいる。
だから
「君にもそれが何なのか分かる日が来る、わかったかい？」
「はい！わかりました」
そして、アライドは急にしんみりとなったエンクランスに二階の部屋で面白い場所があったことを報告し向かうことにした。

話は総統に戻り。
「で、どうなの？」
サリィ捜索時間5分。
まだ総統達は地下にいて今、階段を上がっている。
「でも、こんな犬まがいの物で捜索出来るんですか？」
そろそろ自己紹介しておこう、じゃないとずっと名前のない雑魚キャラになってしまう。
松木紘（まつきひろ）２８歳男＝あのタンカーを運転していた男、しかし水犬のおかげで蛍池を守れたがその失敗の罪で組織から追放された。
「水犬の鼻はすごいのじゃ。なんでも見つけてくれて、この前なんて無くしてた百円玉見つけてくれてとても助かった時もあったぐらい役に立つ」
何か例えがものすごくしょぼいような気がするがサリィの捜索は続いている。
そして一階の廊下に出るとサリィ捜索はすぐに終わった。
なぜなら。
向こうから元気よく走って戻ってきたからだ。
「サリィちゃんよかっ・た・・・」
総統は固まってしまった。走ってきたのがサリィ一人ならまだしも、二人いたのだ。
しかもそれがエンクランスに聞いた話の幽霊とそっくりだった。
「総統、みんな聞いて下さい、この屋敷には噂があり小さい着物を着た女の子が廊下を走り回ってると言う噂がある」
そしてここが大切
「そして，これは森の中で遊んでいたこの周りに住んでいる地元の子供たちの証言だ」
そして、そっと思い出しながら見ていった
総統の見ている物；背はサリィと同じぐらいまだ7～１０歳ぐらい紫色の衣動きやすいように短くなっている髪の色は黒、長さは腰のあたりまである

子供からの証言録；僕たちと同世代、背はそんなに高くなくって幼女体系、髪は黒できれいだった。紫色の花柄の着物を着ていた。
そんな子供がサリィちゃんに手を引かれながらこっちに走ってきている。
こうなっていたら総統がする行動は限られている、というよりあれしかない。
「水代くん・・・松木さん・・あとは頼みました」
そう言い残し膝から倒れていった。
「総統さーん、スイーー、あれなんで総統さん倒れてるんですか？」
まあ無事にサリィが見つかった。
「あれ総統？何かあったみたいですよエンクランスさん早く来て下さい！」
二階の探索を終えて一階に下りてきたアライドが倒れている総統を見つけすぐにエンクランスをよんでいる。
「サリィちゃん総統はもともとお化け系統は弱いから驚かしてはだめだよ」
エンクランスの到着。
「もしかしてこの子があの声の主そしてターゲットなのか？」
松木は今後の行動を考えているしかし、一番困っているのはその主、本人だろう。
「なんでこんなことに」
まさか手を引っ張られて今までの幽霊キャラが崩壊してしまっているこの子が一番悩んでいるだろう。
「う～～ん」
総統はまだ伸びている。
「とにかく総統が起きる前にこの状況を整理しときましょうこのままでは先に進めません」
アライドの意見で全員大広間に移動することになった。

幽霊の正体（前書き）

遂に幽霊の正体を暴きとらえることに成功したサリィ。
そしてサリィは誇らしげに回想を話し始めた。
さあこの幽霊の正体は何なのかそしてこの屋敷はいったい何であろうか。

幽霊の正体

屋敷を探索してから数時間経っている、そして、遂に幽霊の正体をあばいた。
総統が目覚めるまで今までの出来事をみんなで情報交換をした。
サリィストーリー
護身用の水筒つまりスイを弾き飛ばされて、連れて行かれた、というよりサリィはあえてついて行った。
「みんな頑張ってるんだもん、私だって一人で」
ということでついて行った。そして一階の一室に連れ込まれた。
そこには天井に糸で作られたハンモックがありそこに同じ年齢とおもしき紫の着物を着た女の子が寝ころんでいた。
正直、始めは怖かったがなんかこうホラーとは縁遠い登場の仕方でそんなに怖くはなかった。
「あたしに何の用なの？まさか変な呪をかけて召し使いにするとか」
「……」
返事がない……こうなったら。
「すいませーん！なんか返事してー！」
「ちょっと待って！」
へ・・・返事があった、でもなんか最後の力を振り絞って出した声で相当体調が悪そうな返答だった。
「うー頭が痛い」
頭を押さえながらハンモックからゆっくりと起き上がり歩み寄ってきた。
「だ・・・大丈夫？」
なんで連れ去られた側から応援されてるんだろうこの幽霊。
「あのーなんで私をこんなとこに連れて来たの？」
ようやく頭痛が和らいだようで頑張って話そうとしているが、かすれた声でそして堂々とした態度で。

「ちょっとあなたに興味がわいてつれさったのよ」
そう言いつつやはりふらついている。
「なんで、そんなにふらついてるの？」
やっぱり気になってしまう。
「そ……それは」
ついには起き上がってきたハンモックに戻ってしまった。
「あなた達が大声を出したからよ」
「えっ！私達のせい」
まさかの自分たちにのせい、しかも半分は総統さんの声というなんか変な怒り方をされた。
「ここ、森の奥にある屋敷で普段静かなのそれであの大声、屋敷が壊れるかと思ったよ」
「つまり慣れない大きな音で瀕死の状態ってこと？」
どうやらそうらしい、幽霊は頷いたのち静かにこう言った。
「あなたたちはなんでこんなとこに来たの？」
「私達は悪の組織で新たな団員を募集中なの、それでこの屋敷に住む噂の幽霊を仲間にしようという事で来たの」
「悪の・・・組織？」
いきなり勧誘の話をしたから警戒されてしまったがこのまま引き下がるわけにはいかない。
「でも、嫌だったらいいんだよ無理にとは言わないし」
「うん、嫌」
まさかの即答、でもない、しかし始めての勧誘が失敗して少しショックのサリィ・・・・・・でも
（しかたないよね、でもこのままほっとけないよね私達のせいで具合悪くしちゃったし・・・・・・そうだ）
そうするよハンモックに寝っ転がっている幽霊を引きずりおとし、手を握り総統のところに引っ張って見せに行こうとした。
「ちょっと！何処に連れて行こうとしてるの！？」
「その頭痛を総統さんに治してもらうの、だからつれて行くの、凄

いんだよ総統さん常に救急箱持参してるんだから」
ただでさえ瀕死の状態なので抵抗できずに引っ張られていった。
「あっそうだ」
そして急停止
「名前なんていうの」
「え！な…名前・・・・・・アラネ・・・四門（しもん）アラネ」
「わかった、私はサリィそれじゃあ行こう」
急発進
「なんでこうなるのーー」
これでは連れ去ったのに連れ去られてしまっている。
過去録終了
「というわけなんですよ」
というわけでサリィの回想は終了した。
「今回の手柄はサリィちゃんだね」
「まさか。サリィに抜かれるなんて」
今、総統以外は大広間で総統の保存食オンリー家庭料理を待っている。総統はサリィちゃんの話の途中で目が覚めすぐにご飯を作ると言い残し郷里場に走って行ったのだ。
「さてアラネちゃん君はなんでここに住んでいる事を隠して幽霊の噂を流していたんだい？」
アラネは壁の端っこのほうに逃げていた、というより追い込まれてしまった三回ぐらいは逃げようとしたが。
一回目、部屋に入った瞬間逃げようとしたがサリィに手を握られ逃走失敗。
二回目、サリィが離れたすきに物置の襖を開けて天井裏に逃げようとしたがエンクランスが事前にふすまの前に立っていた。
三回目、再度入ってきたとこから逃げようとしたがアライドと松木がそれぞれ出口を塞いでいた。その前になんで今日出会ったはずの松木さんを手なずけてるの。
ということで逃げる事は出来ないと理解したので仕方なく隅にいる

ことにした。でも総統ののおかげで頭痛のほうは和らいでいた。
「わかったわよ、なんでそんな噂を流したかというと……」
昔、ここはおおきな屋敷で先祖代々続いてきた蜘蛛を使う暗殺家族だった、そしてその代を継ぐ絶対条件は女であること、しかしある事件を境に没落してしまった。
その最後の継承者が四門アラネと言う事らしい、その時の事件をもう二度と起こしたくなくて誰も寄り付かない噂を流したらしい。
それを確かめようにも何十年も前で記録されていない、というよりか記録していない、アラネは文字が読めなくて書けない。
故に先代から蜘蛛の扱い方を習っていない、この屋敷に住む蜘蛛は先祖代々飼い慣らされているが何十年も命令が出されていなく完璧な無法地帯になってしまった。
だからこそ久しぶりの命令に反応してしまいエンクラスの命令を聞いてしまったらしい。それでもエンクランスが来る前は屋敷は蜘蛛達の巣だらけになっていたが、
しかし唯一、二階にある記録室、通称女王蜘蛛の巣には蜘蛛達は入ろうとはしないらしい。
「ということなの理解した？」
少し長い話になってしまったからさすがのW団、団員に疲れが見え始めた、もう夜中で全員寝ててもおかしくない時間だ。
チャンス！、今なら楽々で逃げれる、すぐさま寝てしまっているアライドのほうに近ずいてチャンスを窺った、いっつも手を掴んでいたサリィも糸で作ったハンモックで寝ている。
時は実ったアライドが遂に畳に寝そべったのだ。
（行ける！）
そう思い畳を足で意気よいよく蹴りスタートダッシュを決めたこれは成功、後の問題はどうやって襖を開けるか、
そう考えると襖が開いた、良しこれで逃げ・・・れ・・・る？、あれなんで勝手に開いたの？
サリィはハンモックで寝ていて、アライドは眠気に負け倒れている、

松木は慌てて阻止しようとしている、エンクランスは動こうとしてない・・・。
なんで動こうとしてないか目の前の襖からいろんな料理を持ってきた黒い影の存在をすっかり忘れていた。
そう今まで料理をしていた総統が部屋に入ろうとしていた。しかし踏み込んでしまった体は急には止まらない。
（危ない！ぶつかる）
「アライドくん！」
「はい！」
そうすると総統は手に持っていた料理を手放して足元にいるアライドに渡した、そしてアラネに怪我させないように身を挺してぶつかってきたアラネを受け止めた。
総統はアラネの反動で壁に激突したが怪我はしなかった。アラネは総統の体によって被っていたので怪我はもちろん衝撃さえもなかった。
「あ！ごめんなさい」
「いいよ、いいよ、そんなに気にしないで、ちょっと料理に時間がかかりすぎたから」
「でも……」
こう何度も失敗しているが一番したくなかった事をやってしまった。だれも怪我をさせたくなかった。
「大丈夫、だから・・・ね、みんなでご飯食べよ、こう言うと変な感じするけどお鍋、食べた事ないでしょ」
「……うん」
「それじゃあ、みんなーほら起きて、遅くなったけど晩御飯だよ」
総統は気にしていないがアラネは気にしている、それにこんなにたくさんの人たちと食事するのも何十年ぶりだろう。
見た事のない食事が出てきてとまどったが。
「このシイタケ……おいしい！」
「そう、よかった」

「アラネちゃん凄いなんで食べれるの？それじゃあ・・・あたしのも・・・」
そういって鍋から取ったシイタケを渡そうとしたが総統にそしされてしまった。
「駄目だよ、好き嫌いは」
「はーい」
結局自分で食べることになってしまったサリィ。
「駄目だなサリィはちゃんと食べないと」
そう言いつつ華麗に嫌いな物は除けて取っていたがエンクランスによって皿に盛られてしまった。
「君もね」
「エンクランスさんどうか見逃してください」
「駄目」
さすがエンクランス、アライドも仕方なく従った。
「・・・こういうの・・・・・・良いな」
そして数分だったが楽しかった食事の時間は終了したのだ。

巣の記録（前書き）

楽しい食事の時間は終わった。総統はアライドを連れて誰も寄り付かない女王蜘蛛の巣にむかった。

巣の記録

楽しかった食事は終わり、サリィは総統の持ってきたテントで寝るつもりだったがアラネのハンモックが気に入り、アラネ特製蜘蛛糸ハンモックで寝ることに。
だかこの状況を知らない人が見ると、本格的に捕らえられている人質に見えて、なんか参考にしようかな？と思ってしまうほどである。
総統とアライドは話に出ていた女王蜘蛛の巣に行く事にした。エンクランスは総統にサリィを一人にしてはいけないという事で大広間に待機する事に。
しかし、それ以降、松木がどこに行ったか誰も知らなかった。でも総統が。
「きっと一人で考え事してるんじゃろう、なんせ地下でお楽しみしていた程だからのう、きっと大変な目に会ったんだろう」
「お楽しみって何なんですか？」
「それはね、大人の事情で説明できないけど・・・まあいつか分かるよ」
「分かりたくないです」
という事で気にせず二階に上がり巣に向かった。それを確認したアラネは個人的にエンクランスと話がしたいと持ちかけ中庭で話す事にした。
時刻は真夜中、日は変わってしまい森の奥にあるこの屋敷にジメジメとした湿気が屋敷を包みこんでいた。
遠くから見れば多少古びている。しかし、生き物を引き寄せる魅力を持っているが、静かな屋敷の中には大量の蜘蛛が住んでいるとは思えないほどの静けさだ。
屋敷の中庭に大きな木を中心に四色の花がが咲いている、そこには二つの影が立っていた。もちろんエンクランスとアラネちゃんだ。
だが呼び出されてからなかなか話そうとしないしびれを切らしたエ

ンクランスは。
「何のようだい？出来れば早く戻りたいんだが」
大広間で寝ているサリィをそのまま置いてきたからエンクランスは早く戻ろうとしていた。
「待ちなさい」
呼び出しておいて何も話さない、しかも一言目が待ちなさいだ、少し教育をしないと駄目だと思ったが内容は教育みたいなものだった。
「なんで・・・なんであの凶暴な蜘蛛を操る事が出来たの？」
「ん？・・・なんで君がそんな事を聞くんだい」
「そ・・・それは」
なるほど、そういう事かなんとなくだが察していた。この子は蜘蛛達を操れないのか。
「ならば聞こうなんで君は私にそんな事を聞こうとしてるのかな？」
そうするとアラネは木の枝に飛び乗り、葉に隠れながらエンクランスを見ている。
「それはあなたが命令してから蜘蛛達は隠れながらあなたの次の指令を今か今かと待ってて、うるさいのよ・・・実際に今でも窓越しにあなたの事見てるんだから」
最後は小声だったから聞こえずらかったが、何となくだが分かっていた、あの命令以降なんか謎の視線があって痛かったとこだったんだ。
「分かった・・・・・・教えてあげよう」
「えっ・・・いいのそんなに簡単に教えても」
エンクラスは木の枝に隠れているアラネに向かって一つの言葉を言い放った。
「命令をする側、受ける側、どちらも信用してなければ最善の行動は出来ない、ビクつき、脅え、何もしない奴は自分の居場所、部下の居場所を無くすことになる」
そして、サリィが寝ている大広間の方に脚を動かし。
「そう考えたら・・・まだこの地に居座っている蜘蛛達は、君のこ

とを女王として見ているのだろう」
大広間に通じる通路のふすまを開けて。
「それとも先代の女王蜘蛛が蜘蛛達にある願いを頼んだか、もしくは君に似ているだけなのかもしれない」
そう言い残しふすまは小さな音をたてて閉められた。
ただ・・・一人・・・いつものように・・・母が眠っている墓石の近くに育った木の枝でハンモックを作って寝る。
もう周りにざわめいていた蜘蛛の気配はエンクラスと共に消えてしまった。
誰もいない・・・・・・誰も話してくれない・・・・・・屋敷に住むのは人ではない私と蜘蛛だけ。
「女王・・・・・・私はあなたの子ではなかったのにどうして・・・」
今日もまた一人静かに眠りにつく。

「ゴホゴホ」
「大丈夫かいアライドくん」
女王蜘蛛の巣を探索していた総統達、しかし、誰も入らなかった部屋故にホコリだらけ、総統達は一度マスクを取りに戻って探索を続行している最中、総統は何かこの屋敷の記録はないか調べていた。
「この屋敷はある事件がきっかけで滅んだ、記録があるかどうかは分からないが、アラネちゃんのためになる記録が残されているかもしれない」
総統は黙々と昔の言葉で書かれて古くなった本を見つめている。
しかし、アライドは読めない代わりに棚にしまっている本を持ってきたり、また、棚に戻したりしていた、おかげでホコリまみれだ。
「ゴホゴホ、鼻と喉が痛くなってきた」
そんな事を考えていたら本と本に挟まれてあったのか、鈴が落ちてきた。

それは手首に巻き付けるのか、腕を通す場所があり、色の違う四色の鈴が四方に一個づつ付いていた。
その鈴をアライドが手に取ると四つの鈴から、今まで聞いた事がないほど、清らかな音が部屋の中を包んだ。
「総統、これ何か普通の鈴とは思えない物が落ちて来ました」
「それはきっと」
そうすると鈴を挟んでいた二つの本を拾ってアライドに見せつけ。
「この本が教えてくれるはずじゃ」
そうして総統は本を読み始めた、しかし保存が悪かったらしく、いたる所が破けたり、総統も読めない字があったらしい。
と言うことで総統訳、屋敷の記録。

×月△日
ついに私の子が産まれた、蜘蛛達を引っ張ってくれる強い女の子になってほしい、我が四門家に伝わり住み着いている――蜘蛛を。
□月○日
悲しい事がおきてしまった。あの子は産まれてから体が弱く寝たきりの状態だ、上からはあの子を切り捨てろと言われたが、そんなことは出来ない、なにがおきてもこの子は守ってみせる。
△月□日
あれから何年も経った、けれど、あの子の病は治らない、でもあの子には才能があった・・・蜘蛛達を操っていける才能が。
×月△日
あの子も遂に―歳だ、今思ったらよく生きた方だと言われた、あの子とよく一緒にいる蜘蛛も元気そうだ。最近あの子と蜘蛛がこのまま幸せに生活出来たらどれ程いいことだろうか。そんな事を考えてしまうようになってしまった。
△月×日
恐れた事が――た、病―が悪化し――だ。あの子を――せたく―い・・・絶対―。何―手――はず、あの子を死――いて―絶対に・・

・。

―月―日

つ―に、――けた、け―ど―、これ―つか―てしま―た―、――――に――――――――。

これ以上は書かれているというより、誰にも読めない字で書いてあった。

「総統・・・・・・これは」

総統は静かに本を閉じた。

「もしかするとアラネちゃんは・・・」

そして、もう一つの本を開く表紙にはこう書かれてあった。

［四門開書］

「総統！」

突然、アライドが呼んでくれたおかげで正気を取り戻した。

「あ・・・ありがとう、アライドくん」

「大丈夫ですか？」

「あぁ、大丈夫だとも」

この本に何が書かれているか気になる、だが、これ以上この屋敷について深入りしない方が無難だと感じ、適当に本棚へ返した、そうするとアライドが面白そうに、手に持っている本を見せてきた。

「総統！面白い本見つけました」

「何じゃそれは」

その本は他の本より薄く言うならゲームの取り扱い書しかも、そんなに丁寧に書いてくれてないぐらいの薄さで表紙には。

［四門家蜘蛛取り扱い説明書・入門編］

「入門編！？、蜘蛛にそんな扱いが出来るの、ねぇアライドくん」

「知りませんよ、でもこれを読んだら・・・、僕らでもエンクラスさんみたいに操れるかもしれませんよ、そうなったら・・・」

「世界征服の夢に一歩近ずく」
総統はアライドと喜びながら蜘蛛を使った世界征服以外の妄想をしていたが、それは隅っこの方においといて。
「それじゃあ、早く読んで下さい」
「よし、読んで世界征服の道をまた一歩、歩んで行こうじゃないか」
そうして、総統は本を読み始めた。

「自分は弱い人間だ」
松木は悩んでいた、今まで尽くしてきた組織に戻れるチャンスが今、木の枝で寝ているのだ。
「これで自分は戻れるんだ」
食事中ずっと考えていた、待っている時も、食後にこっそりと部屋を抜け自分が縛られた地下で考えた。
「これでまた元に戻れるんだ」
何度も頭に響く黒服の言葉、戻れる・・・戻れると何度も繰り返し口にしてしまう自分。
「アラネちゃん・・・ちょっと降りて来てくれないかい」
そして、決めた・・・今の自分が何をしたいか、そして、何をしようとしているのか。
「何なの？もう夜行性の蜘蛛も巣に戻ってる時間なのになんのよう？」
見た目は可愛い小さな女の子、しかし、その力は計り知れない、アラネが木から降りてきた、もう一度アラネに聞こえないぐらい小さな声で自分に問掛けよう。
「本当に・・・良いのか・・・」
アラネが自分を見ている、何も喋らない、何もしようとしない自分を見ている、「本当に・・・戻りたいのか・・・」
ゆっくり・・・ゆっくりと腰のベルトにしまっておいた銃を取り出す。

「本当に・・・これは自分が望んでいることなのか・・・」
ゆっくり銃口をアラネに向ける、動揺して動けないのかその場から一歩も動かない。
「本当に・・・これでいいのか・・・」
銃には一発の弾が入っている、避けてくれるんならそれでいい・・・
そして、当たらなかったらそれでもいい。
「いいんだ・・・これで・・・」
狙いを定める、出来たら傷が残らないように、指先に力を入れ、最後に問いかけた。
「これが・・・自分が這上がるための・・・悲しい自分なりの答えなんだ」
今夜、静かな屋敷に響いたことのない音が、中庭から屋敷に響き渡り、暗い森の中に吸い込まれるように消え、また、いつもの静けさが屋敷に戻った、赤い光を辺りに残して。

四門の守神（前書き）

ついに行動にでた松木、しかし、そのせいで・・・。
それにしても頑張り屋の総統いつねるのだろう。
いったいどうなるのか四門編の続編。

四門の守神

松木の銃声が鳴り響く数分前、蜘蛛入門書を一字一句、丁寧に読んでいる総統、だが、そろそろ疲れが見え始めてきた、朝早くからアパートを出て電車、徒歩そして探索の後に暗い中で懐中電灯を頼りに本を読んでいる。

「ふ?、なんでこんなに薄いのに小さい文字できっちりと書いてあるの、これ何行?」

総統は縦に書かれている行を数えて愕然として数えるのをやめた。

「どうしようか……よし、次のページを読んだら寝よう、そう考えたら楽しくなってきた、ハハハ」

何か変な物が見え始めた総統は、畳に寝っ転がり笑いながら読み始めた。

「総統、その笑いやめてくれませんか、寝れないんで」

本読みは総統に任せて寝ようとしているアライド、しかし、よく総統を見てみたら。

「寝てるのかよ・・・寝ながら笑うのやめて下さい・・・叩き起こしますよ」

アライドはため息をつき近くにあった木の棒を手に取り、総統をつついたら起きてしまい急いで、狸寝入りをした、起きた総統は再度閉じてしまった本を開いて、あくびをしながら読んでいると。

「アライド君、この解説書始めての絵があるよ、しかもキャラクター紹介と書いてある」

アライドはすぐさま起きて懐中電灯を二つ持ち、総統の背中に乗っかり、本に光を当てた、と同時にドラマや映画で聞く銃声が。

「総統?こんなときにメールの受信音、切っといて下さいよ」

「アライド君、こう言うのわなんだか悲しいが、我らW団のメンバーで携帯電話を持っているのは誰もいないんじゃ」

「それじゃあ、さっきのは・・・」

総統とアライドは銃声が聞こえた、中庭を見に行こうと走りだした。

松木は倒れているアラネに近づき外傷がないか調べたが擦り傷すらしていなかった。

「そんなに銃、撃つの下手なのか・・・なんか悲しいな」

そう呟きながらアラネを肩にかついで、黒服にアラネを渡しに行き、自分のいた場所へ戻るため、外へ歩みだした。

「松木ー！」

そしたら二階から、アライドの怒鳴り声と総統の驚いた顔が見えた。

「松木！いったい何を、しているんだ」

どうやらもうバレてしまったようだ、さすがに大きな銃声が聞こえたら、なんだろう？と思い見に来るだろう、そして今、アラネをかついでいる・・・誘拐しようとしている。

「見た通りだよ、俺はこいつを手土産にもう一度、組織に戻る」

そして、もう二度とあんなヘマはしない。

「それじゃあなW団、いつかまた会う時は敵どうしだ」

「松木待て、松木ー！」

何を言っても俺は止まらない、そう、あの時のように邪魔が入らなければ。

すると、屋敷の出口にはおびただしい数の蜘蛛達が今にも、赤く光らせた目を松木に向け襲いかかろうとしていた。

「またかよ…、こうもうまくいかないと、やになってくるな・・・」

俺は手に持っていた、弾が入っていない銃を構え。

「道を開けなこの虫が、こんな少しでかい蜘蛛なんか、踏んでいけば簡単に抜けれるんだ」

そのまま、俺は歩き出したが、今まで見ていた蜘蛛よりも、一回り・・・いや、二回りも違う蜘蛛がふすまの死角から現れた。

「なんなんだよ…なんで俺はここまで運が悪いんだよ」

思わずトリガーを引くが弾は出ない、投げやりになり思わず銃を、地面に叩きつけた、銃は松木の手から離れ冷たい地面に倒れた。
すると、松木から離れた武器を確認した蜘蛛達は、容赦なく松木に襲いかかろうとした。
「くそ、結局こうなるのかよ…こうなったら」
急いで背にしていた木に登った、蜘蛛達に追いつかれる前に上った。
「総統どうします?、松木だいぶ大変なことになってますよ……総統?」
総統は松木ではなく今まで暗かった廊下を見ていた、暗く真っ暗な廊下が火が付いたかのように、赤い蜘蛛達の眼があった。
「そ・・・総統・・・こ・・・これは」
「アライド君、ゆっくりと記録室に戻るのじゃ」
2人はゆっくりと戻ろうとしたが、蜘蛛達は入られる前に捕まえようと物凄い速さで近寄ってきた。
「アライド君、飛び込め」
アライドは記録室に飛び込み、総統は入ったら瞬時に扉を閉め体で押えたが。
「あれ?」
蜘蛛が扉に体当たりをして、壊してくると思ったが、何もしてこなかった。
「総統、なんで蜘蛛達は襲って来ないんでしょう?」
「どうやら、ここわそれほど神聖な場所なんじゃろう、しかし、こうなってしまったらエンクランスとサリィ、水代は大丈夫なんじゃろうか?」
「エンクランスさんがいれば大丈夫でしょう、それより」
アライドは総統に解説書を渡した。
「あの蜘蛛達を鎮める方法を見つけましょう」
総統はアライドの持っていた本を手に取り、銃声でちゃんと読んでいなかった、キャラクター紹介をちゃんと読もうとした。
「そうじゃな、こうなったら後には引けないな」

（エンクランス、サリィ、水代、アラネ、松木は自業自得だけど見捨てることは出来ない）
「やるぞアライド、我等W団の力でこの蜘蛛達を鎮めるんじゃ」
「はい」
2人だけで「我等W団！」

「エンクランスさん」
「大丈夫・・・大丈夫だからねサリィ、私と水犬で守ってみせる」
床下から突如襲ってくる事はないが、廊下、そして天井裏から次々と数が増えている。
「このままでは急いで作った壁が壊されてしまう」
エンクランスは蜘蛛達が襲ってきた時、瞬時に近くにあった机を壊し、室内だが火をつけ近寄らないようにした。
「エンクランスさん、もう燃やす物がないよ」
このまま大広間にいても仕方がない、屋敷の出口はここから反対側にある、どうやっても両側の廊下から、水犬と守りながらサリィと一緒には進めない。
だとしたら、アラネと話をしていた中庭を突っ切るしかない、どちらにせよどうやってここから中庭まで走ろうか・・・。
蜘蛛は今にも消えかけている壁をいつ壊してくるか分からない、早急に対処しないと餌になってしまう。
「水犬、少しだけ無茶をするけどついて来てくれ」
水犬は何時でも行けるように、蜘蛛にも負けないぐらい唸り声を上げエンクランスに答えた。
「よし、サリィ肩に乗ってくれ」
「はい」
エンクランスは燃えている木の棒を拾い上げ、数本を中庭に向けて投げた。

「水犬！さっき投げた木の棒をたどって、周りにいる蜘蛛をなぎ払え」
水犬は言われたとうりに、消えてしまった壁を意気よいよく壊して蜘蛛を振り払って、中庭えの道が出来た。
うまくいけばこのまま中庭に行ける。
「水犬！よくやった、サリィ、しっかり掴まって」
水犬が作ってくれた道を走った、通り過ぎた木の棒は黒い蜘蛛達が覆いかぶさり火は消え、変わりに怒りの赤い目が襲いかかってきた。
こうなってしまったら総統達が心配だが、私は総統からの命令に従う事にした。
サリィを守り通すこと、しかし、今まで襲わなかった蜘蛛がこれほどなぜ心変わりしたのか…、それは、中庭に到着した瞬間理解できた。
「水犬！、中庭に飛び込めーー」
私達はふすまを蹴り飛ばし中庭に到着した、そこにはアラネを抱えた木のてっぺんに立っている松木、その木を囲むように蜘蛛が登っていた。
それだけならよかった・・・それだけなら・・・。
「エンクランスさん・・・」
サリィがそれを見てしまって、私の肩に力を入れたのを感じた、水犬はそれに負けじと威嚇しているが、声に力が込められないようだ。
「な・・・なんなんだこれは」
こういうときは冷静になって、考えるんだ、なんで・・・なんで・・・。
「こんなにでかい蜘蛛が四匹も・・・どこにいたんだ」
いままで見ていた蜘蛛が子供のように見える、例えるなら大人・・・いや、巨人だ、高さだけで三メートルある、体長になるとどれほどになるのだろう。
「どちらにせよどこに潜んでいたんだ…、こ・・・これは」
そこには花がきれいに咲いていた場所が、見るも無残に荒れ果てて

いた、四か所全部。
「まさか、こいつら土の中に住んでいたのか」
松木には悪いが四匹はこちらにきずいていない、いまは・・・
「総統さん・・・」
サリィは小声で総統を呼んだ、総統に聞こえなくても祈った。
「総統・・・私はどうしたらいいのでしょう・・・」

「総統！総統！早くなにか打開策見つけて下さいよ」
「そんなに焦らさないで」
四門蜘蛛入門書
『ここまでよく読んだね、ここではこの四門に住む蜘蛛達を、紹介するよ。』
「なんだろうこの乗りは、どちらにしよなにかヒントはないか」
『普段この地に住んでいる蜘蛛は簡単に言うと、小と中だよ、小はオスで中はメス、メス蜘蛛の方が体が大きいよ。
しかし、あくまで繁殖するのは大蜘蛛、これは普段、屋敷の外で繁殖して呼ばれない限り近ずいてこない、この蜘蛛の大きさは小と中をたした大きさだよ。
そして・・・ここからが本番。』
「本番？」
その時、中庭にいたその一匹がエンクランスに気が付いてしまった。
それはゆっくりとエンクランスに近ずいて来た。
『そうそれは・・・四門家最大の蜘蛛・・・いや、そんな生易しいものではない、そうそれは。』
「総統・・・・・私はどうしたら・・・」
『まさに四門家の守り神』
それは少し近ずいたら動きを止め、大きな口を開けて大声を上げた。
『四季蜘蛛』

作戦開始（前書き）

アラネは夢をみていた・・・、何年前・・・いや、何百年も前に死んだ先代の美しき後ろ姿。
紫の衣を着て、朝日をその長い黒髪で浴びながら、腕に通した鈴で四季蜘蛛を配下にしていた。
そして、天にかざした片腕を振り下ろし、もう忘れてしまった音を鳴らしていた、いつの日か私も・・・・あの人のように・・・。

作戦開始

アラネは夢をみていた・・・、何年前・・・いや、何百年も前に死んだ先代の美しき後ろ姿。
紫の衣を着て、朝日をその長い黒髪で浴びながら、腕に通した鈴で四季蜘蛛を配下にしていた。
そして、天にかざした片腕を振り下ろし、もう忘れてしまった音を鳴らしていた、いつの日か私も・・・あの人のように・・・。

『四季蜘蛛は何百年と、この山周辺にすんでいる守神、それを封印、そして飼い慣らしたのが四門家、しかし、四季蜘蛛は今か今かと刃向かう瞬間を、四色の花壇の土の中から狙っている』
総統は今まで見てきた蜘蛛の他にさらに、強大な力を持った生物がいるのか!、と思ったが、本自体もうボロボロだ、さすがにもう成仏しているだれろう。
そう思い次のページを開こうとしたら、アライドがふすまで、なにやら遊んでいた。
「皆さんごらん下さい、いつもは静かで、お先真っ暗だった屋敷がなんと、今は蜘蛛の赤い目により明るくライトアップされ、奇妙な演出効果をだしています。
さらに、うなり声が四方八方から聞こえてます・・・そう、奇妙な演出の二重演出です。
そして人の気配・・・ではなく、蜘蛛の気配が少なかった廊下にご覧のとうり、ネズミ一匹通さない蜘蛛の糸バリケードが張られています。」
アライドは廊下のふすまを少し開き、今の廊下と屋敷の情報をＢＡ風に教えてくれた。

「アライド君、そのＢＡ風、何なのか分かる人、少数だと思うよ」
「でも総統、そのままビホアフだと言ってしまうと、何を言われるか分かりませんよ」
「それもそうなんじゃが・・・、それよりアライド君、どちらかというと今は危機的状況じゃ、故に懐中電灯を持ってきとくれ」
アライドはすぐさま２つ持って来て本に光を当てた。
『よくここまで読んだね、遂に対処法を教えるよ、一度蜘蛛達を怒らしたら対処法は一つ、現女王の命令もしくは四鈴の音でしか止まらない』
「・・・・・・えっ、それだけ？」
総統は次のページをめくろうとしたが、そこにはこの屋敷の玄関だろうか、そこから光が差し込み、一人の鈴を付けた片腕を上げている人と長く伸びる影、そして、
無数の蜘蛛と四季蜘蛛であろう大きな四匹の蜘蛛が裏表紙に書かれていた。
「総統、鈴ならここにあります」
アライドは解決策が見つかって、嬉しいのか事実満々であの鈴を見せにきたが。
「しかしアライド君、この鈴を鳴らしても蜘蛛が止まるだけで、問題は解消されないよ」
この一言で笑顔が無表情になってしまった。
「じゃが解決策は見つかった、その鈴をアラネちゃんに渡し、現女王の命令と鈴の力で問題解決…」
と、いくはずだったが、総統達が見たのは気絶？していたアラネだった。
「大丈夫ですよ総統、もしかしたら起きてるかもしれませんよ」
総統は手渡された鈴を手に取り握り締めた。
「そうじゃな、考えていても、動いて確かめる方が正確じゃ、アライド・・・この部屋から出て中庭に行くぞ」
「でも総統、どうやって蜘蛛とバリケードを抜けます？」

アライドは心配そうに聞いてきたが、対処法は総統の手元にある。
「バリケードは厳しいがコレを使えば・・・」

水犬、サリィ、エンクランス、松木、絶体絶命の状況、カギであり唯一止める事が出来るアラネは気を失っている。
廊下には数えきれないほどの蜘蛛、中庭では松木を捕らえようとしている四季蜘蛛三匹、エンクランス達に近ずきつつある一匹。
エンクランスは肩に背負っているサリィをどう逃がすか考えているが・・・。
どうしようもない、後ろに下がりすぎるといつ窓から蜘蛛達が降ってくるかは分からない、しかし、前に進めば化け物の餌になってしまう。
時間と距離、絶望が迫ってきている。
「どうしてこんなにうまくいかないんだ」
中庭に育っている立派な木にしがみついているが、常に揺れ動いている、いつ手を離してしまうか分からない。
「何か・・・別の物に・・・」
しかし、周囲を見ても何もない、二階の窓には距離がある、飛び移れたとしても蜘蛛に助け、もとい快く引き込まれるだろう。
だが、下を見てみるとさっきアラネが使っていたハンモックが。
「すこし危険だが・・・ちょうどいい」
そう思い降りようとした瞬間、一匹の四季蜘蛛が飛び上がり木にぶつかってきた。
想定外の相手の行動、片手はアラネを抱え込んでいて使えない。
「しまった！」
松木は木を掴んでいた片手を離してしまった、このままではアラネと一緒に落ちてしまう。
このままでは2人とも・・・。

松木は自分が落ちる前にアラネをハンモックのある方に投げた。
そして、木の枝に当たりながら落ちていった。
「松木ーー！」
木の枝の反動で、落ちた時の衝撃は少なかったが体はボロボロだ。
「……ん、まだ生きてるのか」
そう思い体を起こそうとしたら、蜘蛛の前足が松木を逃がさないため足を踏みつけてた。
相手はもちろん手加減はしてくれなかった、これで何度目だろうかと思いながら。
「くっ…またかよ…」
あまりの激痛に叫びそうになったが、目の前の圧倒的な死の予感に叫ぶことが出来なかった。
「松さーーん」
W団のメンバーが呼びかけてくれるが、もう駄目だ
「ここで・・・もう・・・」
その時、急に蜘蛛達の動きが止まった。
「どうしたんだ？なぜ動きが止まったんだ」
耳をすましてみると、かすかに鈴のねが聞こえる、二階から。
「待たせたな」
ゆっくりと二階の窓に黒い人影が浮かびあがった。
「その声は」
「総統さん！」
そこには体中に蜘蛛の糸が付いた総統とアライドが立っていた。
「総統・・・なんかカッコよく登場しようとしましたが、失敗してますね」
「アライドくんこれはどうしようもないんだよ」
総統は手に持っていた鈴をアラネがいると思われる方に向けて、大声でアラネを呼んだ。
「アラネちゃん！起きるんだ！」
「うう…、あ・・・頭が・・・」

ようやく目が覚めたようだ。
「アラネちゃん、よく聞いてくれ、今、蜘蛛達の大半はアラネちゃんを守ろうとして、私達を捕らえようとしている」
総統は鈴を定期的に振りながら話を続けている。
「しかし、そこにいる四季蜘蛛は君を捕らえようとしている」
「総統さん、その鈴は・・・」
それは忘れさられていた四門家の家宝で、先代が使っていたものだった。
忘れてしまった音が屋敷に響いている、忘れていた音が頭の中で響いている。
「アラネちゃん、この蜘蛛達を止める事が出来るのは君だけだ」
総統はエンクランスに向かって話しかけた。
「エンクランス、ここからではアラネが見えない、しかしそこからならアラネが見えるはずじゃ」
エンクランスの方向からアラネは確かに見える、エンクランスは返事をした。
「今からこの鈴をそっちに投げる、そしたらまた蜘蛛が襲いかかってくるだろう、これは賭けなのじゃ」
周りの蜘蛛がそろそろ痺れを切らしてきた、もう猶予はない。
「我等W団が力を合してこの鈴をアラネちゃんに必ず渡すのじゃ、アラネちゃん！」
総統は呼吸を整えて、最後になるかもしれない、これが失敗すればどうなるか想像がつく、しかし！
「我等W団は必ず鈴をアラネちゃんに渡してみせる！、皆やるぞ」
それぞれが不安を持っていたが、そんなものは総統の掛け声とともに消えていった。
各々軽くうなずき作戦開始のように全員で。
W団全員「我等W団！」

作戦開始（後書き）

ついにここまで来ました。次でこの話がおわる予定です。
まだまだやめるつもりはありません、どうか今後も読んで下さい
次の投稿は約二週間後の予定

四門アラネ（前書き）

四季蜘蛛は悩んでいた、見知らぬ男が我らを束縛するあの忌まわしき鈴を持っているのだ。
そして、その男が女王の眠りを鈴と共に起こしてしまった。
男が女王と話をしている間、我らの同胞は期待に満ち溢れていた。
我ら四季蜘蛛もそれに従えばよいのか…。
否！そんなはずがない！我らは死との者とは違い何百年と土の中で封印されて、先代からの遺言どうりに従ってきた。
そして、我ら四季蜘蛛は遺言どうり封印から解放された。
つまり…、自由になったのだ、だが先代の娘であるアラネは生きている。
忌まわしきあの鈴もあの男がもっている。
このままでは本当の自由は得られない、ならば、することは変わらない…。
鈴を守ろうとする者と先代の娘を亡き者にすること！。

四門アラネ

総統の掛け声と共に作戦は開始した。
「エンクランス、受け取れ」
と、総統が声を出したら。
「総統！逃げろー」
総統に危険が迫っていると松木が叫んだ。
しかし、松木の声はさっきまで足を踏んでいた四季蜘蛛によりさえぎられ、総統に向かって残りの二匹が総統がいた二階の窓に飛び込んできた。
長い間経っていた屋敷だけに脆く、二匹の四季蜘蛛の体当たりで、総統のいた廊下はあっけなく壊れ、埃が舞い上がり、あっというまに見えなくなってしまった。
「総統ー」
「アライドー」
エンクランスとサリィはそれぞれの名前を叫んだが、四季蜘蛛が総統と、ついでにいたアライドを探している最中にだしている屋敷が壊れていく音が大きかった。
「鈴はまだ総統が持っている、このままでは…」
アラネに鈴をわたせない、総統の話からすると。
あの蜘蛛は松木からアラネを守ろうとしていたんじゃない、むしろ捕らえようとしていたんだ。
しかし、鈴の登場によりアラネは眼中にない、それほど鈴が四季蜘蛛にとって恐ろしい物なのだろう。
だが、今は総統の安否が気になる、そう思いながら総統がいた今は無き二階を見ていたら、埃が舞い上がり出来た煙の中からエンクランスに向かって鈴が飛んできた。
しかし、四季蜘蛛に襲われながら投げられた鈴はエンクランスにはとても届きそうにない。

さらに目の前には四季蜘蛛が道を塞いでいる、鈴が落ちるであろう着地点にサリィを背負っては走って抜けることは不可能だろう。
しかし、鈴が落ちる着地点に走って蜘蛛より早くとれる唯一の団員がいる。
「水犬！蜘蛛にとられる前に鈴を…」
と言い終える前に水犬はすでに行動を開始していた。
目の前の四季蜘蛛がそれを阻止しようと前脚で水犬に攻撃してくる。
水犬はその攻撃を上回る速さで蜘蛛の真下をくぐって抜けることに成功した。
「水犬、そのまま鈴をとるんだ」
エンクランスの声に反応して、水犬は真上に飛び上がり口で鈴をとることが出来たが。
「水の化け物、こっちに鈴を早く投げるんだ」
すると、さっきまで松木の足を踏んでいた蜘蛛が水犬に向かって飛び込んできたのだ。
水犬は首を振り、蜘蛛に当たらないように山なりに投げたが、四季蜘蛛の体当たりが水犬に命中、そのまま水犬は窓を突き破り、総統達と同じように煙の中に吸い込まれた。
水犬の投げた鈴は山なりに松木の近くに落ちた。
松木はすぐさま取りに行こうとしたが、這いずりながら取りに行くには少し遠く、折れた片足を引きずりながら必死に鈴に近ずいていく。
「松木、お前も死にたくなかったら鈴を早く」
「分かってる、だから少し待ってろ」
松木はボロボロの体で落ちた鈴に徐々に近ずいている、もう少しで届く距離に近づいた時、廊下から四季蜘蛛に比べたら小さい蜘蛛が松木に近ずいてきた。
エンクランスや総統はアラネを助けようとしている人、だから鈴を鳴らした後は襲っては来なかったが、松木はアラネに危害を加えた張本人、松木はすぐさま鈴を手に入れ、エンクランスに投げようと

試みたが、両足に糸が絡みついてきた。
「またかよ」
必死に抵抗しているが、抵抗する毎に足だけでなく体のあちこちに絡まっていく、投げなければならない手も動けないほどにくっつき引っ張られている、その糸をたどっていくと、一カ所だけ赤い光が灯った窓に伸びていた、松木はそこに引きずり込まれそうになっている。
「この態勢を崩したら投げてもエンクランスまで鈴が届かない…しかし、これ以上は…」
そんな諦め出した時
「このダメ男、誰のせいでこうなったか分かってるの！、そんな所であきらめたらあんたは死んでもダメ男として、私達蜘蛛の餌になってもいいの？」
「…そん…な…のは…」
松木は最後の力を振り絞って、腕に絡まっていた糸を振り払い、エンクランスに向かって投げた。
「絶対になりたくねー」
その後の必死の抵抗もむなしく松木は窓から廊下に引きずり込まれた。
しかし、鈴は無事エンクランスの手元にきた。
「松木…、生きてることを願っている、今からそっちに投げるからアラネ受け取れ」
エンクランスは鈴を投げたがそれを目の前にいた四季蜘蛛が妨げようとした。
「しまった、こんな所でミスを」
「この距離なら」
アラネは指先から出した糸を鈴に絡みつけ、間一髪、四季蜘蛛にとられる前に回収した。
ついにこの時がきた、この鈴を私が使えば本当に蜘蛛の動きは止まるのだろうか？

私はあの人の…本当の…娘では…ないのに、こんなことしてもいいのか？
しかし、総統達が命を賭けて届けてくれた鈴と希望を裏切ることは出来ない…でも…。
「アラネ！」
そんなアラネを見かねたエンクランスが、四季蜘蛛により壁に追い込まれながら。
「命令をする側、受ける側、どちらも信用してなければ最善の行動は出来ない、ビクつき、脅え、何もしない奴は自分の居場所、部下の居場所を無くすことになる」
これは、寝る前にエンクランスに聞いた言葉。
「しかし、その逆もある、命令をする側、受ける側、どちらも信用していれば、最善の行動がとれる、信頼し、勇気があれば自分の居場所をつくり、さらには迷っている者達に居場所をつくることが出来る」
エンクランスは喋りながら後ろに下がっていたが壁に邪魔され動けなくなってしまった。
「君はいま、先代の作り上げてきた最強の軍隊を相手にしている、しかし、今の蜘蛛達には居場所がない、この屋敷に住み込み、放浪し、まさに幽霊のように居場所を探している、ならばそれを上回る蜘蛛達の居場所を今！君が創ればいいんだ」
「エンクランスさん…」
その時、窓を突き破り肩に水犬を抱えた総統とアライドが出てきた。
「エンクランスの言うとうりじゃ、アラネちゃん、今から君の軍隊を創るのじゃ」
「総統さん…」
「そうだ！」
必死に蜘蛛に抵抗して、命を繋いでる松木が。
「だからこそ、鈴を鳴らすんだ」
松木は蜘蛛と一緒に糸を振り払っている。

「ダメ男…」
「ダメ男言うな」
エンクランス、総統、松木の言ったとうり、私が今から自分の居場所…女王としての居場所を創り、前の女王を上回る軍隊を創る、その第一歩に。
アラネは木の天辺に登り、鈴を身に着けた片腕を天にかざした、周りは静かとは言えないが、鈴の音が響き渡る事を祈りながら、総統達の声が聞こえた。
「アラネちゃん…」
総統が四季蜘蛛に追われながら、私の名前をよんでくれる。
「鈴を…」
エンクランスの背に乗りながらサリィの後に合わせてみんなが、合図をとってくれた。
「鳴らせー！」
鈴が鳴らされた数分間、屋敷が崩れる音、自分が吐く息、心臓の鼓動、それ以外の音はなかったかのように消えていた。
やがて、屋敷の崩れる音も消えた。
今、アラネの目に映っているのは頭を亡くしても、忠実に従えし兵士達、封印されし化け物、そして、家族でも身内でもないのに命を賭けて、私を助けようとしてくれた人達。
「母上…私は…」
もう恐れはしない、私はもう屋敷に住みついている幽霊ではない、蜘蛛達を操り、導く、四門の血をひいたもの。
「私は…私は…」
だからこそ、越えなくてはならないものがある。
「母上、私はあなたを越える蜘蛛の居場所を創り、いつの日か越えてみせます、そのためにも…まずは…」
アラネは鈴を軽く鳴らし、両手を広げ、屋敷全体に響き渡るように宣言をした。
「私は四門アラネ、先代の血をひき、鈴を受け継ぎし者、先代に従

えし兵士達よ、すぐに捕らえた者を解放し、私が呼ぶまで待機していろ、しかし、それ以外の者を傷つけてみろ、私が絶対に許さない」
松木の周りにいた蜘蛛は、松木を置いたまま天井、床下にひきあげていった、その時、松木が見たものは怒りの赤い光ではなく、優しく、そして、うれしそうな色をしていた。
「終わった……終わったんだ」
松木は体についていた糸を払いながら、大声で笑った。
「アラネ！やったんだ、俺達はやりとげたんだ」
しかし、中庭はいたって静かだった、笑いもなければ歓喜の声もなかった、そこには志と絶対的殺意が広がっていた。
「やっぱり、あなた達だけは、ダメみたいね」
そこには、今まで光っていなかった四季蜘蛛の眼に赤い光が灯っていた。
「ちょうど良いわ、これでハッキリさせましょ、どっちについた方が身のためか」
「アラネちゃん、我らも手をかそう」
総統がまた私を助けようとしている、でも。
「いいえ総統、これは四門家である私が決めたこと、だから手は出さないで」
「しかし…」
「大丈夫、一つだけ勝つ方法があるから」
四季蜘蛛が徐々にアラネが登っている木に囲むように近ずいている。
「総統、ここはアラネの言ったとうりにしましょう、だからアラネの邪魔にならないように」
アライドの言うとうり、満足に行動が出来るのはアラネだけだった。
「アラネちゃん…、危なくなったらすぐに逃げるんじゃぞ」
総統達はアラネの邪魔にならないように屋敷の中に入った。
「総統…ありがとう」
アラネは着ていた着物の膝までを破り、自分が動きやすいように調整した。

もし、四季蜘蛛の攻撃が当たれば、タダではすまない、私がするのは一つだけ、でもその前に。
「そろそろしゃべったらどうなの？声なしキャラで通ろうとしないで、しゃべったら？」
「小娘がいいきになるなー！」
「しゃべった！」
松木ふくめ総統達も驚いた。
「確かに鈴はそちの手に渡ってしまった、しかし、貴様を倒せば問題ない、我等四季蜘蛛は自由を手に入れるのだ」
「そんなことはさせない、あなた達が自由になれば大変な事になる、だからここで倒して私の下につきなさい」
「ならば、倒してみろ、唯一我等を倒した貴様の…先代の残した最強の兵士…四季蜘蛛を」
話が終わると同時に、総統達に襲いかかった二匹がアラネに向かって飛び込んできた。
アラネはそれを自分の糸と脚力で飛び越え二匹はそのまま屋敷の外に、その後、森の木が倒れる音がした。
「あんなもの、まともに当たればアラネちゃんは」
アラネはうまく屋根に着地したが、すぐに四季蜘蛛の糸が襲いかかってきた、自分の糸で防ごうとしたが、四匹目の蜘蛛が足場にしていた屋根を、脚で壊してきた。
アラネは崩れる屋根と一緒に落ちながら、すぐさま標的を中庭の木にかえて飛び移ろうとした、それを阻止しようと口を開けて飛び上がってきたが、すでにおそく三匹目の糸をかいくぐりがれきに当たりながら木の枝にとまった。
アラネは乱れた呼吸を整えようとしたが、屋敷の外に出てしまった二匹が戻ってきて、四匹目も着地、そして木を囲み振り出しにもどった。
「どうした小娘、もう息があがったのか？」
必死に呼吸を整えようとしているが、なかなか戻せない。

「ハァ…ハァ…、まだまだ…やれるわよ…」
「そうか…なら…続きといこうか」
四匹の糸がアラネに襲いかかる。
息が整っていない状態で、飛び上がったら糸に当たってしまう。
「…なら」
アラネは木から飛び降り、四季蜘蛛の足に糸を伸ばし、馬に乗るように背中に乗っかった。
「どうよ、これなら味方に攻撃しないと私に当てられないわよ」
残りの三匹は動かない、これなら…。
「…乗ったな」
直後、乗っていた四季蜘蛛が天に向かって飛び上がった。
「うっ…」
アラネはそのまま背中に貼りつけられるように、うつ伏せになった。
上昇がとまり落ちようとした時、あたりが若干明るくなっていることに気がついた。
「あと…もうちょっと…」
落ち始めた四季蜘蛛の背中から、アラネはふらつきながら、ある場所に行くように、屋根に飛び移ろうと走り、跳んだ。
だが、考えなしに跳んだ結果、地上にいた蜘蛛の糸が足に絡みついてしまった。
「しまった！」
「これで…終わりだ」
アラネは急いで糸を振り払おうとしたが、そのままアラネが飛び移ろうとした屋根に叩きつけられるように落とされた。
屋敷が崩れる音と一緒に鈴の音が鳴り響いた。
総統達は見ているしかなかった。
四季蜘蛛が飛び上がったのは罠だった、その周囲にアラネが糸をくっつける場所がなかった、避ける為に必要な物が下にしかなかった、そこを狙われた。
だが、その危険をわかっている上で、ある場所に行かなければなら

なかったのだろう。
その結果がこれだ。
四匹はアラネを落とした場所にゆっくりと近ずいていく。
「待て」
四季蜘蛛は足を止め振り返ると、総統とアライドが立っていた。
「それ以上、傷つけなくてもいいのではないか」
「小娘は言ったはずだ、どちらに身を置いた方が得かを教えると、ならば教えてやろうじゃないか…」
そして、一匹が総統に近ずいてきた、総統は一歩も引かずにその場に立ったまま、四季蜘蛛の話を聞いていた、そして。
「我ら先代が最強だということを」
認めるしかない、アラネちゃんが倒れた今、もう打つ手が…。
「まだ…終わって…ない」
そこには傷だらけの体で、鈴を鳴らしながら立ち上がったアラネがいた。
「小娘…その鈴を鳴らすなー！」
四匹がアラネに向かって動き出した、今までとは違い敵を倒すための速さだったが、急に動きが止まった。
「ありがとう…みんな、私の指示通りに動いてくれて」
それは、窓や廊下、床下、屋根に潜んでいたアラネの現女王軍についた蜘蛛が、四匹の四季蜘蛛の動きを止めていた、それは今までいた蜘蛛を圧倒する数だった。
「貴様ら…我ら四季蜘蛛に対抗するというのか、小娘がいいきになるな、こんな糸すぐに突き破って…」
その時、アラネの背後から眩い光が差し込んできた。
「あの…ひか…り…は…」
直後、四季蜘蛛から聞いたことのない声を出しながら、朝日から逃げようとしている。
「総統…これは」
「そうじゃ、あの本に書かれていた絵と全く同じじゃ、あれが四季

蜘蛛を倒す方法だったんじゃ」
アラネは鈴をつけた腕を使い四季蜘蛛を指差した。
「四季蜘蛛！認めなさい、あなたは私の軍に負けた、このまま負けを認めて私につくか、そのまま日に焼かれて倒れるか…選びなさい！」
「小娘が…あの時の女と同じことを…分かった、我らはそちら側につく…だから」
「分かってる」
アラネは頷き、鈴を鳴らし蜘蛛に合図を送り、糸はとかれ、四季蜘蛛は土の中に潜り込んでいった。
「…みんな…もういいよ……」
その後、何もいなかったかのように蜘蛛はどこかに帰ってしまった。
「アラネちゃん！」
「総統…みなさん…」
私は勝ったんだ、あの四季蜘蛛に、でもこれは一人の勝利ではない、総統、アライドが見つけてくれた鈴、水犬、エンクランス、松木がそれを届けてくれた。
そして、私についてきてくれる多くの蜘蛛達の助けがあったからこその勝利。
アラネの緊張の糸が千切れ、自分でも知らないうちに涙がこぼれ落ち、その量は増えていき、いつのまにか座り込んで、泣いてしまった。
それでも私は、止まらない涙をふき、震える声で泣きながら言った。
「みなさん…ほ…本当に…ありがとう」
こうして長かった夜が終わり、アラネは本当の女王としての朝を迎えた。

その日の昼過ぎ…
「もう帰るんですか？」

アライドと松木以外のメンバーは屋敷の門の前に立っていた。
「そうだよ、ここには一日滞在で考えてたから、それに仕事もあるし」
「そうなんだ…」
「大丈夫だよ、またいつの日か会いに行くから」
「総統ーー」
その時、屋敷からアライドが帰ってきた。
「どうだった？忘れ物はなかった？」
「はい、ありませんでした、でも、松木がどこにもいないんです」
「まったく、あのダメ男どこにいったのよ」
「松木なら先にどこかえいきました」
エンクランスは松木を最後に見たのはすでに屋敷の外だったらしい。
「どうせならみんなで帰ろうと思ったのに…」
総統達は門をくぐり屋敷のそとにでた。
「それじゃあねアラネちゃん」総統
「バイバーイ」サリィ
「アラネ、またいつか」エンクランス
「それじゃあ」アライド
「うん…お元気で」アラネ
アラネは見えなくなるまで見送るつもりだった、でも別れが悲しくなり屋敷の中に帰ろうとしたら。
総統達は屋敷から数歩歩いた時、体のむきを屋敷、アラネに向けた。
「アラネちゃん！」
「なんですか、総統さーん」
「我等W団に入らないか？」
「…考えておきます」
「そうか…それじゃあ」
その後、振り返ることなく総統達は帰っていった。
アラネは長年一人だった、今は違う、屋敷には部下の蜘蛛達がいる…でも。

アラネはひどい姿になった中庭の土の中にいる四季蜘蛛、周りの蜘蛛に話しかけた。
「みんな…私の話を聞いて…」

「総統、アラネは入ってくれるんでしょうか」
「それは…アラネちゃんしだいじゃ」
総統達は道なき道を歩きながら家に帰っていた。
「今回のは相当危なかったですね」
「これからこんなんばっかりなんですか総統？」
「それも、これからしだいじゃ」
周りの木は総統達の帰る方になびき、風も吹いていた。
その時、背後の木から何かが総統の背中に落ちて来た。
「うぎゃー」
総統は変な声を出して何かと一緒に倒れた。
「アラネちゃん！」
総統めがけて落ちて来たのはアラネだった。
「総統、私も一緒について行く…私…W団にはいる！」
アラネはW団に入るらしい、だが。
「屋敷は大丈夫なの？」
「蜘蛛たちに話はつけて、総統達を追って来たの」
「そうか…」
総統は立ちあがった。
「それじゃあいいかいアラネちゃん」
「うん」
アラネは頷いて総統を見ている。
「我等W団は正式に四門アラネをW団メンバーにいれよう、それでは一緒に」
総統はいつもの構えをとり屋敷に聞こえるように声を出した。
「我等W団！」

四門アラネ（後書き）

数日後…
総統の住んでいるアパートから少し離れた公園、そこに一人の住人がいた。
彼はベンチに座ってカップ酒、商品名あの子の涙を飲んでいた、とても苦い酒が口の中、頭の中に広がっている。
「俺は…」
折れた脚を見ながら男は考えていた。
俺は今までいろんな涙を見て来た、でも、その中でも今まで見た事のない涙だった。
単に悲しんでるわけでもなく嬉泣きでもない、いうなれば両方、それでとても神聖なものだった。
「おじちゃん？なんで朝からこんなとこにいるの？」
紫の着物を着ている女の子からの質問、無視はできない。
「おじちゃんはね今まで自分の事しか考えてなくて、いろんなことをしてきたんだ、でもね、何も考えず突っ走ったらこうなっちゃたんだでもある奴らに教えられ、あの涙を見ておじちゃんは前の自分とは比べ物にならないぐらい何もなくなったけど、何か大切な物を取り戻したと思うんだ」
「ふーーん、そうなんだ」
「だからねお譲ちゃん、見えない物だけどそれを大切に持って、なくすんじゃないよ」
女の子はベンチから降りて電柱を登って天辺に到着したあと、松木を見た。
「わかってるよ、あんたも元気でねダ・メ・男」
そのまま女の子は電柱の上を飛び、隣の電柱に飛びそのままどこかえいってしまった。
「それじゃあなアラネ…」

松木は飲み干した酒を捨てて自動販売機に買いに行ったら、総統達が重たそうな荷物を持って出て来た。
「おお、松木こんなとこにいたのか、どうじゃ今からあの場所に行くんじゃが一緒に来ないか」
「いいんですか？」
「もちろんじゃ、それじゃあまたあとで」
松木は販売機から先ほど買った酒、商品名、今亡き栄光始まる友好、を開けラッパ飲みで泣きながら飲んだ。
「これも苦いな…でも良い味してる…」

「母上…」
アラネは屋敷から出る時誓った。
「私…あの人たちについて行く、それで…もっと女王とは何かを教わってくる、それまでみんな待っててくれる？」
そしたら蜘蛛達が自分の足を擦りまるで拍手をしてくれてるかのように鳴り響いた。
場所は電柱の上
「待っててみんな…私、立派な女王になってみせる」
「おーーい、アラネちゃん」
「総統さん」
総統は重い荷物を持っている、今から向かうのは蛍池、水犬の生まれた土地らしい。
そこで花見をするようだ。
これからどんな事がおきるか分からないけど…。
「私…一生懸命世界征服します」
そして、アラネは総統の見よう見まねに構えた。
「我等W団！」

ここから本格的な話

前回ここはアンケートを取る場所だったんですが、なんもなかったので削除しようとしたのですが、ぜんぜんできませんでした、安易な考えとあんまり読んでる人少ないのにあんなことするんじゃなかった、ここ２００字書かないとだめなので次の話にちゃちゃっと飛んでください、迷惑をかけてすみません。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハト（前書き）

はい、ハトにきまりました。
この話もどうぞ楽しんでいってください。
ではどうぞ。

ハト

「ない！ない！どこにもない」
真夜中、少女は古い地図を見ながら右往左往していた。
「伝書によるとこのあたりなのに…」
どうやら目的地を見失っているらしい。
「ハァ、もう今日は疲れた、いや正確には昨日か……なんていってる場合じゃない、このままだと……」
電灯がなんとなく光っている道を歩く、丸々1日かけて探しているのにどこにもない、歩いて体を休める場所を探し始めたが。
「お…お腹が……」
手持ちの食料は食べ尽くして2日、道に落ちている物で飢えをしのいでいたが、もう限界の様子。
「ハァ、おにぎり食べたい…せめて豆か虫でもいたら……やっぱり豆落ちてな…いかな……」
身体の限界、少女は倒れた、必死に手を伸ばして進もうとしているが、せいぜいちょっと進むのがよく、進まない時もある。
「も…もう…虫でいい……虫よ来てくれ……」
その時、這いずる少女の伸ばした手が何か丸い物を掴んだ。
「こ…コレは……」
それは酒のおつまみに使われる枝豆だった。
「コレは…天の恵み…ん？」
更に向こうを見るとどこかのグリム童話みたいに豆の道が出来ていた。
「豆の神よりありがとう…いただきます！」
少女は理性を忘れて落ちている豆を拾い上げ、道なりに食べていく、途中からなんだかテンションが上がってきた。
ある程度、食べていくといつの間にかアパートのある部屋の前にきた。

「う～、おっ…これは」
それは大皿いっぱいに置かれたいろんな種類の豆があった。
「う～、いいね～、美味しいね～……もうらめ～……ん～……」
満腹になった少女は扉の前で寝てしまった。
その日の朝…
総統はみんなが起きる前にカーテンを開けて、食事の用意を６時頃から始める、しかし、寝ぼけ眼で作業していた総統は玄関の新聞紙を取るため、扉を開けたさいに何かに当たった事は気がついていない、しかも結構な強さで開けている、鉄製の扉なので膨張して開けにくい時が時折あるからだ、ついでに許可はとってある。
「今日はすんなり開いたね、新聞は……あった」
新聞を取り、朝食の用意をすました総統はコーヒーを飲みながら新聞とクーポンを読んだ。
「今日はピザのクーポンと割引セールが近くであるようだ、いいね」
7時になるとアライドが起きた後にサリィが朝食を食べる、後片付けはもちろん総統。
その後、水犬を水筒から出して、水道で水浴びをサリィがする、ついでに庭に植えてある木で総統が作ってみたハンモックで寝ているアラネが起きる。
アラネは移り住んだ町を夜に見て回っているようで、いつも起きるのが遅い、エンクランスは仕事で、大抵は家に帰ってこない。
「総統、新聞取りに行く時に、昨日の夜に仕掛けた罠に引っかかってた鳥いました？」
アライドが食器洗いしている最中の総統に話しかけてきた。
「そういえば昨日、罠みたいなの仕掛けていたね、見てきたらどう、ハッキリと見てないから」
「分かりました、見てきます」
アライドはすぐさま玄関に向かって走った。
「まぁ遊びで作った罠だから、何も引っかかってないと思うけど」
食器洗いをすまして、テーブルを拭き始めたら、アライドが急いで

戻ってきた。
「総統！総統！鳥捕獲しました」
「それはすごいね、それじゃあ見に行こうか」
そして、扉をゆっくり開け罠を設置した場所を見てみると……。
「う…うわーー、ひ…人がー倒れてるー」
「総統落ちついて下さい、とにかくどうします？」
「早く家の中に運ぶんじゃ」
総統が背中に担いだ時少女の寝言が聞こえた。
「…ふー…豆ー…いい豆ー…新鮮な豆ー…貴重な豆ー…豆の中の豆ー……ミラクル豆ー…つまみ豆ー……あれ？豆て何？豆て美味しいの？豆、豆いってたら分かんなくなってきた、分かんないから言っちゃいな、心の中から叫ぶんだ……まーめー……ふー…豆ー…」
こんな寝言をループしている。
「総統！もうこれ重症ですよ、どうするんですか」
「とにかく布団で寝かすんじゃ」
「どーしたんですか？」
サリィが玄関の騒がしさを察して来てくれた。
「サリィちゃん、今すぐお客様用の布団出して」
「黒ですか？白ですか？」
「白の方で」
「枕は羽毛？プラスチック？低反発枕？」
「サリィちゃん、うちにはプラスチックしかないよ」
少女を布団で寝かせて、一段落した総統はバイトの時間がきてしまい、アライドとサリィに起きたら作っておいた食事を出すように指示して、総統は資金調達に出かけた。
「まさかあんな罠に引っかかる人がいるなんて…」
「今度遊ぶ時は慎重に仕掛けないと」
アライドとサリィが考えていた事は原付バイクで移動中の総統と同じだった。
「朝から人の介護をするなんて想像もしなかった、今度からは慎重

に仕掛けるように帰ったら言おう、でもアライド達に任せて大丈夫かな……、まあ大丈夫でしょう、アラネと水犬がいるし、でもこうなるんだったら昨日の時点で止めていれば……」
昨日の出来事……
今日も無事、配達が終わった。
「ハハハ、あなたの仕事の良さはもう言い表せないねハハハ」
総統は資金調達の為に郵便局で配達の仕事をしている、総統は今、平和郵便局の店長、平鳥鳩和と話しをするため店長の部屋に呼び出されていた。
「ありがとうございます、これからも真剣にやらせてもらいます」
平鳥鳩和さん、いつも笑顔が絶えない人で、従業員からは頭の中と顔が春の人、そしていつも平和な毎日を送らせようと頑張っているので、平和さんと言われている。
「ハハハ、そんなに固くならなくていいよ」
平和さんの部屋にはいつも鳩をイメージしたポスターが貼られている、そのポスターは毎週変わり、変えられたらポスターは受け付けや窓口に貼られる、それが楽しみで来ている人がいるとか、総統もその一人、ついでに全て自作らしい。
「そろで……ご用は…」
「ハハハ、あなたは毎日出てきてくれている、だから明後日から休みをあげようと思って、ハハハ、ついでに有給で」
「良いんですか！？」
「ハハハ、もちろんさこれはみんなでもう決めた事なんだハハハ、かわいい子供達と遊べばいいハハハ」
子供達……サリィ、アライド、アラネ……、今考えたら団員の半分が子供！？
「は…はいありがとうございます」
「ハハハ、それじゃあ明日も頼むよ、ハハハ」
総統は平和さんにお礼をして、部屋を出ようとしたら、扉からノックが聞こえた、扉を開けるとそこには、背は総統と同じぐらいで、

何かのアスリートなのか引き締まった身体、鋭い目の気の強そうな女性が立っていた。
「ハハハ君だったか、話しはちょうど終わった所だ、それではまた明日、ハハハ」
総統は入れ替わるように部屋を出て、閉められる扉の向こうでは、あの女の目と春から寒い冬のような笑顔が消えた平和さんがチラッと見え、扉は閉じられた。
「気のせいだよね」
そうしてアパート前に総統が着く途中に、どこぞの童話のように豆がアパート前に到着するように置かれていた。
そうして、アライドとサリィがアパートの扉の前に、皿いっぱいの豆を置いている最中だった。
「何してるの？」
「総統、お帰りなさい、今まさに鳥捕獲作戦を実行中です」
「この豆で捕獲するの？網とかじゃなく」
サリィ説明鳥捕獲作戦。
「この前の花見で、残ったお酒をかき集めて、その中にいろんな種類の豆を入れます、数日つけた豆をこのアパート付近にまき、この扉の前にある皿に来るように誘導、そして鳥は大量のアルコール入り豆を食べる、で倒れている所で捕獲、と言うことです」
何か物凄く豆が勿体ない気がする…。
「大丈夫です、豆は近くの店で廃棄処分の豆を貰ってきました」
「この皿まで鳥がたどり着けるのか心配じゃ」
たどり着いても山盛りの豆を食べたらどうなるのか……。
「でも明日の朝にまいてきた豆を拾ってくるんじゃ」
「ハーイ」
こうして扉ギリギリに置き扉を閉めるとき総統は思った。
「まあ人が食べるわけじゃないし……、大丈夫でしょう」
大丈夫でしょう……
大丈夫でし……

大丈夫……
誤って人を捕獲した日の昼、総統の住んでいるアパートで総統は叫んだ。
「大丈夫でしょうと思った結果がこれだよ！」
「総統…なんで帰ってきてるんですか？」
そう普通なら総統はまだ仕事の途中のはず。
「この話しを平和さんに話したら配達五つで帰っていいと言われたんじゃ」
「平和さん……優しすぎです」
隣の部屋では少女がまだ寝ている、寝言はましになったが、豆の単語は時折聞こえる、なので総統は昼飯に豆のお雑煮を作っている。
今、アパートにいるメンバーは総統、アライド、サリィの三人、アラネと水犬は散歩に出かけている。
「それじゃあ、あの子が起きるまで全員待機で」
「ハーイ」
無事に少女が起きるまでそんなに時間はかからなかった。

ハト（前書き）

作者から一言。
小説には書きません良ければハトを聞いて、ハトがどんな旅をしたかを想像していただくと幸いです、では少しだけ変更して。
伝説の家宝を目指して三千里、古の伝書に記された、伝説の家宝を目指して三千里、古の伝書に記された、近くにいるハトを指差してハトー。

ハト

今朝、アパートの玄関に倒れていた少女、昼過ぎに起きた一言目がこれだ。
「ここ天国にしては貧相ですね」
だった……。
周りのカーテンは閉められ、裸電球の光が、狭い四畳半の部屋を照らしていた、その部屋には今朝倒れていた少女が入っていた。
「ご馳走になりました」
先ほど豆のお雑煮と白飯と飲み物にお茶を飲み干し、食器をふすまに近づけて布団の上で正座している。
「すみません、貧相とか言ってしまって」
ふすまが少し開き食器の変わりに柿ピーがだされ。
「どうぞ」
の一言。
「すみません、いただきます」
少女は出された柿ピーを食べながら。
「ほ…本当に何から何まですみません」
と震えながら今にも泣きそうな勢いで謝っている。
そのふすまの向こう側ではサリィがすでに泣いて、アライドと総統は焦っていた。
「あの子可哀想だよ総統さ～ん」
「そうですよ、どうするんですか総統」
「ま、待って、今考えてるから」
「ほ…本当にすみません」
とまた声が。
「ほら～あの子可哀想だよ総統さ～ん」
そして、暗い四畳半の部屋では。
「どうしよう、まさか警察に捕まるなんて……、いや警察のほうが

ましだった、狭い部屋、食事、裸電球、そして……白い布団」
震えながら怖い想像が頭を巡る、そして最悪の結論。
「襲われる！確実に襲われる！今にもカメラを持って入ってくる」
その時ふすまが開かれ誰かが入ってきた。
「もうおしまい！奪われる！」
その時、泣きながら入ってきたのは小さい女の子だった。
「もう大丈夫だよお姉ちゃん」
「えっ！子供！？」
「サリィちゃん、ちょっと待って」
総統がサリィを止めようと伸ばした手は少女から見て、子供を誘拐しようとしている犯人に見えてしまっている。
少女は総統より先にサリィの手を掴み、女の子を守るため腕と自分の翼を使い、サリィを包み込んだ。
「えっ！翼！？」
「お姉ちゃん！ちょっと待…」
相手は私の翼に驚いている、女の子の口を塞ぎ犯人に渾身の言葉。
「この獣！外道！誰でも発情する人間失格のロリコン変態！」
「ギャー」
直後、犯人の動きは止まった、と言うより……、今まで見たことのない絶望の表情で、そのまま前に倒れた。
「獣で…外道で…誰でも発情する…人間失格の…ロリコン変態て…」
「総統ー！」
奥からまた一人子供が出てきた。
「あなたもこの男に捕まった子？それなら早く逃げよう」
「総統さーん」
さっき助けた女の子が私を振り払って、犯人に近づいて犯人を揺さぶっている。
「お姉ちゃんひどいよ、総統さんはお姉ちゃんを助けようとしてたのに」
ということは、私はなにかもの凄い誤解をしていたのかもしれない、

それじゃあ起きた時、布団で寝てたのも、あの美味しい食事をだしたのも、大好きな柿ピーをだしたのも……、全部この人のおかげ。
そして、私の攻撃がそんなにきいたのか今も倒れている……、何か恩を仇でかいした罪悪感が……。
私は翼を服の中にしまい謝った。
「ごめんなさい…」
「お姉ちゃんはとにかく謝らないで！」
こんなぎくしゃくした状態が終わりを迎えたのは総統が起きて、双方向かい合わせに椅子に座り。
「すみません……まさか天使様とは思いませんでした」
「すみません……助けていただいた身でありながら言葉攻めしてしまって」
「総統、そろそろ戻ってきてください」
「お姉ちゃんも謝るのやめて」
という状況をアラネと水犬が目撃して。
「何やってるんですかみんな？」
「クゥーン（いつもどうりだ）」
と二人止めるのに加わり、ついに6時過ぎに総統が放った言葉により終結した。
「そろそろ遅いので、旅の御方なら夕飯はどうですか、昼に出した物と同じですが……」
「えっ！昼にでたあのお雑煮まだあるんですか、いただきます！」
「よかったですね総統、お雑煮が気に入られて」
「お雑煮ね…お雑煮…」
総統は六人分の食事を作っている間に二人で、朝起きた事、昼に起きてしまった出来事を説明して、食事前に話が付いた。
「う～まい、やっぱり美味しい、あんな暗い部屋で食べた時より美味しい」
「すみません…」
「総統もうやめて下さい」

全員からの攻めに総統ついに立ち上がる。
「それでは名前を教えてくれるかね」
少女は食事の手を止めお茶を飲んでから教えてくれた。
「ハト」
「カタカナでハト？」
「はい、ハトです」
「天使のミカエルとかじゃなくて」
「ハトです」
「ああ～その羽は？」
「自慢の白い羽でこれを使って旅をしています」
「玄関前で倒れていた理由は？」
「2日間何も食べずに夜中歩いていて、道に落ちていた豆を拾い食い、そのまま皿に盛られていた豆を食べた結果です」
「柿ピーは好き？」
「大好きです、特に豆が」
「なるほどよく分かりました」
「総統、最後の柿ピー、聞く必要あるんですか」
総統の質問攻めが終わり、短い間の後、総統が笑い出しそれに続きみんな釣られて笑い出した。
「深刻に悩んでそんした」
「なんであんな事になったんでしょうね」
「それは総統さんが寝やすいようにしたからですよ」
「でも良かったですね問題が解決して」
そしたら急にハトの手が止まった。
「どうしたんじゃ？」
「忘れてた！私行かなくちゃ」
「お姉ちゃんどこに行くの？」
ハトはポケットにしまっていた古びた巻物をテーブルに置いた。
「ここに私、行きたくても行けないんです」
全員で急いで皿をどけて、広げられた地図にはこの街の昔の地図ら

しき物にマークが一カ所されていた。
「それじゃあ回想でもどうぞ」
ハト４ヶ月の長い旅…。
私が旅をするのは母に渡された伝書から始まった。
「ハト…もうすぐ私にお迎えがくる、その前に我が家に続いている伝書を渡す、この地に行き、先祖代々伝えられている物をとってくるのだ」
「お母さん…」
世界を飛び回ったという伝説の情報配達人の母の翼は、もう羽ばたくことが出来ない程に衰えていた。
母に渡された古びた伝書は古い地図が書かれていたが、周辺の街の地図ではなく近くなのか遠くなのか、大まかな場所が分からなかった。
「お母さん…ここどこの県？場所が分からない…お母さん？」
母はそのまま天にめされた。
２００９年１２月３０日伝説の情報配達人コードネーム、ｂｌｕｅｂｉｒｄ他界
「お母さん…お母さん…」
沢山の親戚の鳥達が見ている中、母は埋められた。
私は葬式の後、埋葬された場所で小声で泣きながら。
「お母さん……場所…分からないよ…」
その日の夜、私はお母さんと住んでいた木に帰り、旅立つ身支度をした。
「場所が分からない以上、いつ帰ってこれるか分からない、それなら」
私は大切な物だけをリュックに詰め込み、柿ピーは多めに持ち木に別れを告げた。
「お母さん…私はあなたのように世界一のハトになります」
伝書をポケットにしまい、マッチに火をつけ、木を自分の家を燃やした。

火に包まれる家、厳しく優しかったお母さんと共に過ごした家、飛ぶ練習場の家が燃えていく、私はもう戻らない。
「お母さん…さよなら、ハトは旅立ちます」
数歩、歩いてから飛ぼうとした時、サイレンの音が近ずいてきた。
「やべ！山火事で訴えられる」
私は急いで飛びもう戻らない家に別れを告げ、終わらない旅が始まった。
旅は試練の連続だった、慣れない環境の差、毎日長距離移動、空から海、空から森、時には山の頂に、時には川の岸辺に、時には海の浜辺に。
四方八方飛び回り、同類に話を聞き道を尋ねる、一番の失敗は孤島を目指して飛んだ日、陸地がなく一日中飛びやっと着いた先で、変な歌を歌うオウムに会って、訳も分からず踊らされ、密猟者と言われ民族に追われ、結局もう一日中飛ぶと思いきや半日で戻れた時。
そして、ついに見つけたのがこの地だった、しかし、古いものは壊され新しい物が建つ、地図に書いてある街は確かにここ、しかし、街はもうすっかり変わってしまい、伝書は意味をなくしてしまった……。
私は呆然とした、でも諦めなかった、最後の食事を済ませ忘れ去られた場所を探すため飛んだ、たとえ私が忘れられた一羽のハトでも。
総統はタオルを持ち感動していた。
「大変だったんだね」
「それで最後の食事から2日目の夜に見つけた豆を拾い、現在に至ります」
長い話の間、最後まで聞いていたのは三人だけで、アラネは散歩に水犬は先程サリィによって、水筒の中にしまわれた。
「状況は理解した、この地の忘れられた場所に行き、家宝を見つければいいんじゃな」
「はい…でも…」
総統はあらかた拭いたあと椅子から立ち上がり、それにアライドと

サリィが総統の隣に立った。
「ハトさんよく分かりました」
「お姉ちゃん心配しないで、総統さんの心は決まったから」
部屋の電気が消え、総統達にスポットライトが灯された。
「それでは今度はこちらが説明しよう」
ハトの目の前にいる人は先程まで私の話で泣いていた、弱々しい総統ではなく、どこかの組織のトップの面構えをしていた……そう…どこかのトップ……。
「僕達は世界を良くしようと世界征服を企む悪の組織、その兵士」
「私は人質、あながち間違ってなかったんだよ」
「そして……」
ついさっき帰ってきたアラネと水筒のふたを外し出てくる水犬。
「四門一族のまつえいであり現蜘蛛の女王、四門アラネ」
「ワン（蛍池に住む水の化身、水犬）」

「そして……」
「この猛者を束ね世界征服を企む悪のW総統！」
ハトは驚き半分期待半分で尋ねた。
「その組織の名は……」
ここぞとばかりそれぞれポーズをとり総統のかけ声と共に気持ち小さめに叫んだ。
「その組織の名は…」
一人抜きで「我々W団！！」

伝書鳩（前書き）

困っている人、動物を見つけたらたすける、それが悪の組織W団。

ハトの話しを聞いて翌日……。
「それじゃあみんな朝食を食べ終わりしだい調査開始じゃ」
「お願いします…お雑煮残ってます？」
「ありますよ、どうぞ」
朝食をハト、総統、サリィ、アライド、水犬、アラネで皿を囲み夕飯の残りとパンを出して、今日の作戦は開始された。
ハトは空を飛び回り見落としがないかを見て回り、総統達と水犬、アラネと二組に分かれ捜索、伝書を郵便局のコピー機を使って複製、それぞれに渡したのち１０時ぐらいに作戦は開始された。
「作戦名、忘れられた家宝とハト捜索決行じゃ」
ハトはすぐさま飛びどこかえ消えるように飛んで行った。
「さすが４ヶ月世界を飛び回っただけのことはありますねハトさん」
「そうじゃな、しかしこちらはこの街に住んでいるんじゃ、だから負けられないぞ」
「でも私と水犬はいつも散歩してるから、この周辺の街を見てきます、いこう水犬」
アラネは水犬に糸を巻きつけ屋根にのったあと糸をとり、屋根を足場に走って行った。
「さすがアラネちゃん、私達に出来ないことしてますね」
サリィが話している時、総統はいつもの原付バイクではなくママチャリを出してきた。
「総統……なんでママチャリなんですか、原付でなく」
総統はそのまま奥に置いていた自転車を二つ取り出し、ヘルメットを二人に渡した。
「原付バイクの二人乗りはダメだよ、だから今日の朝に近所の人から、捨てられる自転車をもらってきたんじゃ」
「さすが総統さん、でも総統さん……ママチャリはちょっと……」

「なに言ってるの物は大切にしないとダメだよ」
「分かりました、でも総統…」
総統はすでに、ヘルメットをつけてすぐさま行きたがっていた。
「ヘルメットはやめて下さい」
総統は指でグッドサインをして。
「安全第一じゃ、二人行くよ」
こうして捜索が始まった、総統はまず公民館に行き昔の地図を見せてくれるか交渉……、しようと思ったが交渉するまでもなく従業員の人に。
「関心します、我が子に街の歴史を教えるなら協力しましょう、まったく自分の子にも教えてあげたいぐらいですよ」
と言うことで普通に見せてくれたが、出てきたのはやけに新しい綺麗な地図だった。
「これ…最近の地図ですか」
「いいや、正真正銘この街の地図だよ、古い物は保管されて見れないから、こうして一般に見れるように新しく複製したのがこれなんだ、さすがに物が物だけに、当時の本物そっくりには出来なかったらしいけど」
「そうですか…ちょっとお借りします」
「どうぞどうぞ」
総統達は席に座り、伝書と照らし合わせてみたが、なかなか合わない。
「駄目なのか」
総統達は諦めず次に向かおうと公民館に地図を返した。
「そうですか…何かお役にたてれば良かったんですが…」
アライドは礼をして、外に出ようとしたら、先程地図を見せてくれた人が走ってきた。
「待って下さい、私少しはこの街に詳しくて、お役にたてば良いのですが、この街昔っから公共施設の場所や神社とかは、変わってないんです、警察やお寺とか」

何かの役にたつのかは分からないが、聞いて損はなかったと思い、もう一度礼をして次に向かった。
アラネと水犬は屋根づたいに走っていた、水犬は自分の脚力だけで飛び移り、アラネは指から糸を出しながら、飛び移る時にはアシストに回していた。
「なんだか水犬と競争してるみたい」
そう、二人はいつの間にか捜索より、負けたくないと競争に力を入れていた。
「水犬、こうなったらこの先にある工場まで競争よ」
「ワン（負けないぞ）」
そして、いつの間にか対決になってしまった。
二人は次第に捜索時より速くなり、屋根で最短距離で走る水犬、アクロバティックに糸を出しながら飛び移るアラネの戦いは、総統の指示した時刻まで続いた。
「クルックー」
「そうですか…あなたはどうですか？」
「クルックー」
「はあ、なるほど」
ハトは総統から貰った豆を使って、公園中の鳩を集めていた。
ここからクルックーの翻訳開始、ハトによる鳩の翻訳。
「あたしらに聞かれてもその時生きてないしね～」
「マジっすかアチシラのスミツイテルマイタウンに宝アルなんてマジパネー」
「そんな事聞かれてもＹＯー分からないＹＯー」
「それわ私はわかりかねます」
「それより聞いてよーまた男に逃げられたー」
「ククククそ…そんなことククク…聞かれてもねククク」
「てめーは黙ってろ、ハトさんって名前かい、ちっと聞きだい事が…」
出てきたのはグラサンをかけた強気の鳩で、後ろに何羽か鳩を連れ

て飛んで来た。
「あんさんもしかして、あのｂｌｕｅｂｉｒｄの娘さんですか？」
「はい…そうですが…何でしょう？」
相手はグラサンを外し鳴き声をあげながら聞いてきた。
「まさかｂｌｕｅｂｉｒｄの姉御……逝っちまったんですか？」
回りは急に静まり返って、正直に答た。
「はい…４ヶ月前に…」
何かが切れたのか、涙を流しながら大声で泣き出した、後ろにいた鳩も声に出さないように泣き、すぐに数羽が駆け寄った。
「頭、お気を確かに」
「ウオオオオー姉御ーー」
ここまで母のことで泣いてくれるなんて……。
あらかた私も泣き終わり数分後……
「実は頭の頭が大変危険な状態を姉御に助けていただいたんです」
「それで若頭がその恩をかえそうとこちらに赴いたんですが……」
「頭の話しによると姉御も見つけてないとか」
「でもきっとこの街にあるはずです」
地元の鳩の応援で元気が戻ってきた、鳩の応援を裏切らないために、もう一度飛び回ることにした。
「皆さんありがとう、私頑張ってみます」
「うん、頑張りよ」
「チョーガンバ」
「成功を祈ります」
「が…頑張るんだな」
私は見送られ再び捜索を開始しようとしたら。
「ハトさーん」
先程のグラサン鳩の若頭が追いかけてきた。
「少し考えてみたんですが、ハトさんの家系の仕事に関係があると思うんですが…」
家系の仕事といえば配達……

「それじゃ引っ越しセンターでもいってみようかな、それじゃね」
結果その後の収穫はなにもなく、総統の指示した時刻がきてしまった。
日が沈もとしている、総統達は待ち合わせの郵便局に集まった後、みんなは諦めてアパートに帰宅途中に、アライドは話をまとめていた。
「この街昔っから公共施設の場所や神社とかは、変わってなんです、警察やお寺とか……」
そして、ハトから聞いた話し。
「ハトさんの家系の仕事に関係があると思うんですが…」
ハトの家系の仕事は情報配達……。
アライドは手に持っていたコピーの伝書を見て、空を飛び回る鳩を見た。
「情報…配達…伝書…配達…鳩…！？」
アライドは歩くのをやめて総統にある提案をした。
「総統、平和郵便局に戻りましょう」
「ん？忘れ物したの」
「違います、もしかしたら平和郵便局にあるかもしれないんです、なんかゴロ合わせみたいで変に聞こえると思いますが、ハトさんの話しから家系の仕事は情報配達、そしてこの伝書、そして名前を繋げて読むと」
配達伝書、伝書ハト。
「伝書鳩？」
「そして、なんで平和郵便局なのかは、鳩は平和の象徴で郵便局の名前にも使われていて、なによりこの街は公共施設の場所は変わらない、ちょっとした永久保存ですよ」
「そうだとしても郵便局にあるとは思えないな」
「とにかく行ってみましょう、もうあてはないんだし」
もうあてがないハトはアライドの提案に賭けていた…若干きたいはしていないが。

「でも、これで郵便局に行くの三回目だよね総統」
急いで郵便局に引き返し、総統は平和さんを探した。
「平和さんなら先程、部屋に戻って行きました…家族ですか？」
「はい！そんなもんです」
郵便局に着いた時、誰から見ても家族にしか見えない並び方だった。
総統はそのまま平鳥鳩和のいる部屋に全員で向かい、扉をノックした。
「平和さん…いいですか」
「ハハハ？総統なのかい？どうぞどうぞハハハ」
総統は部屋に全員で入ると、始めはにこやかな顔の平和さんの顔が、人数が増えるたびに焦り始めた。
「ハハハ、何だい？家族全員で来て、何か怖いじゃないかハハ…ハ…」
「平和さん、お聞きしたい事があります」
そして、ハトが手に持っていた伝書を見せようとしたら、平和さんの表情が懐かしい人を見るような柔らかい表情になった。
「ハハハ、君はハトちゃんだね、待っていたよ」
日は完全に沈み夜がきた、平和さんは窓のカーテンを閉め、薄暗い電気をつけた。
「平和さんはお母さんと知り合いなんですか？」
「ハハハ、知り合いと言うより平鳥家と君の家とは身近な関係なんだよ、ハハハ、話すと長くなるから言わないけど、君がここに来たということは…、お母さんは亡くなったんだね」
平和さんはなんでも知っているようにハトの親の事を話し、なぜハトのこと、この場所にハトが来るのを知っていたのかを教えてくれた。
「君の家と平鳥家はずっと昔っからここを拠点とする運び屋だった、鳩と人を使った郵便配達だね、しかし、時代が変わるにつれ役割が変わった、それで、鳩はどこかえとんで、平鳥はその情報で配達をするようになった」

「平和さんはなぜハトさんのこと知ってるんですか？」
「まだ私が若かった時に、幼い君をつれてある代物を渡しにきた時にしったんだ」
「ある代物？」
平和さんは机の引き出しから正方形の箱を取り出した。
「昔っから続いている試練のようなものだ、ここの昔の地図を使いこの街に伝書を届ける、まさに」
「伝書鳩ですね」
「君のお母さんが亡くなり、世代交代がきたんだ、これがその証のプリズムだ」
ハトは平和さんから渡された箱の中には、ひし形にコーティングされたプリズムが入っていた。
「キレイ、これはいったい？」
「私はそれを渡して、それで終わり、そのプリズムに関して何も知らない、けどねハトちゃん」
平和さんは立ち上がりハトの目の前で止まり手を出して、ハトはその手を握りしめ握手をした。
「君はこれで、立派な伝書鳩だ、これからはどこに飛んで行こうが何をしようが君しだいだ、おめでとう」
どことなく真面目な平和さんを見て、総統は驚いていた。
「おめでとう、お姉ちゃん」
「おめでとうハトさん」
「皆さん…ありがとう」
平和さんは自分の椅子に座り、いつもの笑顔に戻った。
「ハハハ、けれど総統がハトちゃんを連れて来るとはね、何かお礼をしないと、ハハハ、そうだ！皆さん夕飯はまだでしょう、ならば食べに行きませんか？こちら持ちで、でも決めるのはハトちゃんだよハハハ」
「そうですね、私は……」
ハトは悩む事なく総統の方を向いた。

「私は総統の作った豆料理が食べたいです」
「ハハハ、決まりだね、私は食材でも買って来ようその間に総統、つまみでも作っておいてくれ」
「平和さん僕も食材買い手伝います」
話しがまとまりアパートに戻った総統は、大きな文字で世界征服と書いたエプロンをつけて。
「それじゃ、ハトさんのために頑張ってみようかな」
その日は真夜中まで飲んでは食べが続き、終わった時は2時過ぎだった。

伝書鳩（後書き）

数日後・・・
「やっぱり、旅は続けるんだね」
「お母さんのように世界の情報屋にやっぱりなりたいんです」
早朝、総統の弁当を持ち平和さんからもらったリュックを背負い旅立つ準備をすましアパートの前で見送りをしていた。
「平和さんにはだまっていくの？」
「はい、あいさつはまた今度にします」
ハトは翼を広げ空に、まだ日が登らない空に飛び上がった。
「バイバーい、またいつかねー」
「バイバーイ」
その時、ある程度飛び上がったハトがこっちを向いて大きな声をだして、総統に話を持ち込んだ。
「総統さん、私、W団に入りたいんですけどいいですかー？」
「いいのかいハトちゃん？」
「はい、私みたいに困っている人を見つけ出して、総統さんに伝えるぐらいしかできませんけど」
「総統…」
みんなと話し合わなくても、そう言われたらもう返答は決まっている。
「ようこそ、ハトちゃん、我等W団はきみを歓迎する」
「ようこそー」
「これからよろしくね」
「みんな、ありがとう」
「それじゃ」
総統達、空に飛んでいるハトはポーズをとり朝日が昇ると同時に叫んだ。
「我等W団」

こうしてハトは、そのまま情報を手に入れるため旅立った。
「いつ会えるんでしょうかね…」
「また豆でもおいといたら帰ってくるよ」

戦闘開始！第一回（前書き）

出会いは唐突であり、地味である。
気づいた時はもうかかわりを持ってしまっている。
それが、どんな形の出会いであっても…。

戦闘開始！第一回

出会いはどこにでもある、それが朝食のパンを口にくわえながら、全力で走っている彼女が曲がり角で、誰かとぶつかり、運命的な出会いであったとしても。
日曜の朝、カバンの中に食パンを入れ、その一枚を口にくわえながら全力で走っている彼女の名前は…。
中之島レナ、不思議な出会い、運命的な出会いを毎日求めている、彼女は今日も自宅近くの細い道を走っている。
まだ日が昇ってから時間は経っていない早朝、道角を曲がる手前で速度を上げ、左右どちらかに曲がる、それが彼女の日課。
「今日も収穫なし」
あらかた走りまわりレナは自宅に帰ろうとしていた。
「なんでかな～、やっぱり学校に遅刻しそうな時間に走った方がぶつかるのかな」
レナは漫画にありがちな道運命出会い法を毎日6時～7時に試みている。
成果はいちようあるが、どうもピンとこないイマイチな人ばかり。
細い道を選ぶのも視界の見にくさと車にひかれないためである、しかし、自転車はどうしようもない。
「もうそろそろ家に帰って、別の方法を試してみよーと、と言うことで」
レナは再び走り出した。
1つ、また1つと角を曲がる、そのたび数を数得る、出会いのなかった回数を。
「結局なにもなく家に戻ってしまった」
これで半年…、もうやめようかな。
と玄関の扉を開けようとしたら。
「すみません、ちょっといいですか？」

「えっ！？」
ま…まさか…きた！
運命の人がきた！
えっ、でもそんな、いきなり家に来るの、それは唐突すぎる！
今までいろんな事やってきた、少女漫画でありがちなシーンをやったり、ドラマのシーンを自作でやったり。
…それ……でも。
私は満面の笑顔で振り返り、誤って口にだしてしまった。
「それでも、最高にいい」
「……」
「あっ、ごめんなさいつい驚いてしまって」
相手は男でスタイルはそこそこいい…コレなら…。
しかし、一カ所不思議に思う場所があった、腕につけている腕時計？なのかは分からないが、微弱な光を出してるように見えた。
「…のいいですか？」
すっかり相手がどんな人かを見定めていたら、相手の事を忘れてしまっていた。
「はい！なんでしょうか」
まさか告白？でもそれは早すぎる！まずは…。
そんなマイドリームはあっけなく壊れることとなる。「この近の公園で待ち合わせしてるんですが、地図が解らなくて、これで分かりますか？」
「えっ！？」
私の何かが音を立てて割れているような、まさか彼女と待ち合わせ？リア充なの？
私はどうなるの？
馬鹿なの？
家に帰って泣いていいの？てか…。
いま泣いていい、もう……泣いてもいいよね？
もしくはこの手紙の相手を……。

渡された地図は手書きで、放心状態の私が見ても分かりやすく書いてあった、それにこの公園、私がよく使っている公園で遊具はなくベンチと草原のような広場しかない、簡単にデートスポット的な場所になっている。
悪気はなかったが宛先をチラッと見てやった、アルファベットで一文字書かれていた、……M?。
私はそのまま地図を返して、道を教えてあげた。
「ありがとう、それじゃあ」
「ハハ、どうも 」
男はそのまま教えた道を走り去った。
私は今後どうしようか計画を練るため自宅のベットで、寝転がろうとした時。
「ハァ！……もしかするとこれは新しい出会い方、今から追いかけたらもしかすると……」
すぐさま食パンとメモ帳を入れたリュックを手に取り部屋から飛び出した。
「レナ、またでかけるの？」
「お母さん、今から私素敵な出会いしてきます」
「そうだ、諦めんなよ、応援している親の事を考えるんだ、必ず目標は達成できる、だから、ネバーギブアップ、アンドどこまでも燃える愛、真っ赤な誓いを見つけるんだレナー！」
熱い父親の言葉を背に私は全速力で走った、あの公園は家から近い、上手くいけばすぐに見つける。
「この勝負……私が勝っ」
その時、私は角を曲がろうとしたら、誰かにぶつかった。
私と相手の身体は一瞬だけ空中に浮き上がり、同時に尻餅をついてしまった。
「なによ！今から私は……」
ま…まさかこんな時に運命の出会い！
しまった、よりによってこんな時に。

「大丈夫ですか総統？」
「大丈夫だよアライド君、さあ急がないと遅刻してしまう、その前に……」
さっき地図を見せたのが若い人で、今、目の前にいる人はダンディーな男の人だった。
総統と言うらしい、私に手を差し伸べて、私は手をかりて起き上がった。
「あ…ありがとう…」
「大丈夫？怪我はない？」
「大丈夫です…」
やだ私なに赤面してるの、ちょっとぶつかっただけで。
「良かった、それじゃあ、みんな行くよ」
「みんな？」
私は総統の後ろにいたメンバーを見て驚愕した。
まさに今から誰かを倒しにいく者達の顔をしていた四人がいた。
しかしその内二人は黒いフードをかぶって見えなかった。
その者達は総統が前に進むと一緒に前に進んだ。
「まさか…全員…総統の手下や配下の者達！？」
今、まさに熱くなるＢＧＭが私の中で再生された、私は思わずリュックのメモ帳を出し、状況を書いた。
「私と誤ってぶつかった人は優しいダンディーな人だった、しかしその総統は今から戦いをするため移動中だった、その後ろを歩くフードをかぶっている二人はいったいどんな人なのか、いったいどのようなな戦いが始まってしまうのか……」
いつの間にか書いてしまった、メモを読み周りを見てみると誰もいなかった。
「しまった、惜しいことをした、でも私には当てがある」
そう、総統が歩いてった方向は私が向かっていた公園、もしかすると……。
私は走った、手紙のＭとさっきの総統は同一人物なのかもしれない、

と言うことは……。
「運命って怖い…こんなに上手くいくなんて……」
私はいつの間にか笑っていた、こんなに楽しい事は久しぶりだった、だからこそ…だからこそ…。
私は走りながら目的地の公園の中に入っていた、広い公園の中であの人達を捜しながら、燃え上がるように熱くなった胸を押さえながら。
「これが最高の恋ってやつね」
そして……。
ついに見つけた、丘の上に立っている一人と六人が向き合ってい
「今からいったい何が始まろうしているの」
私は声が聞こえるギリギリの距離まで近ずき、くさむらに紛れ込んだ。
曇り空の下、ついに始まる、ここまで長かった前振り、そして、この状況をメモしているレナ。
数分後、総統は口を開いた。
「長い間、待たせてしまったな、貴様の存在は小説のタイトルにあるのに、初登場まで時間がかかってしまった、あろうことか名前を誤字変換していると感想に書かれるほどじゃ」
「……」
「どうした正義の見方、何もしゃべらないのか、せっかくの初登場なのに」
「……」
「まあよい、そのまま我が手下に倒されるのじゃ」
どうやら彼は正義の見方と言うらしい、総統が正義の見方を指差しフードを被った一人が動いた。
「行け水犬！その水の体に正義の血を馴染ませるのじゃ」
フードはとられ中から出てきたのは、犬の形をした水の化け物だった。
「なんなのあれ！？」

水の化け物は唸りをあげながら正義に近ずく。
「……」
「どうした正義、驚いてなにも出来ないかそれなら……」
総統は再度、正義を指差し水の化け物に命令した。
「行け水犬！先手必勝じゃ！」
水犬は後ろ脚を地に跡を残すぐらい、力強く踏み込み正義めがけて走り出して、なにも言わず避けようとする正義だが、水犬の鋭い爪が獲物を捕らえ避けきれなかった足に傷を負わした。
「……」
正義は己の傷を見てもなにも言わず再度牙を剥き出して迫ってくる水犬から避けようとするが、的確な水犬の攻撃により、みるみる正義の身体は傷だらけになってゆく。
「いいぞ水犬、そのまま正義を倒すんじゃ」
総統の言葉に同意するように水犬は低く唸り、正義の喉に穴をあけるため、鈴を取るときに飛んだ時よりも高く飛び、正義めがけて跳んだ。
「正義！」
私は声を出さないように願った。
「神様……どうか正義が水犬に勝てる力を」
その時、正義の腕時計？が光り出して、喉に噛みつこうとする、水犬の牙を正義が自らの手で受け止めた。
「ワン（なに！）」
「水犬！すぐに正義から離れるんじゃ」
水犬は身体をひねり、無理やり正義の手から逃げ出し、総統のいわれたとうり正義から離れた。
離れていく間にどんどん光が増しているように見えて、水犬は自分の焦りを隠そうと無意識で唸り声を出していた。
「正義……ついに本気を出すのか……水犬！気を引き締めるんじゃ」
正義は腕時計を天に向けて、ポーズをとった。
「W団、貴様の企み正義の名の下すべて打ち砕いてくれる」

ん？さっきW団って言った？Mじゃなく……。
「まさか私地図を逆さまに見てた、それでも見やすい地図を作ってたのに分からないなんて……正義は方向音痴？」
そんなことは後にして、ついに正義が動き出す、長きに渡り名前だけを出しておきながら登場なしの正義が動く……悪を倒すため。
すると光が腕時計？に集まっていく、正義は腕時計を顔に近ずけ真顔では叫べないことを叫んだ！
「正義の見方変身！」

戦闘開始！第一回（後書き）

ここで、宣伝。
パイプの最終回を今週中に投稿しますので、よければニコ動で、パイプの紹介どうがを見てください。ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ１０８２５４５２、あと実況もしてます。
宣伝終了。

水犬ＶＳ正義の見方（前書き）

遂に始まった、悪と正義の戦い、水犬の攻撃により傷ついた正義は腕時計を使い変身する。

「見せてやる、総統、これが正義の見方だ、変身！！」

注意事項、今回正義とある方が技を叫びますが、作者とは一切関係ありません、これは技名を考えた人の……なのであしからず。

水犬VS正義の見方

「正義の見方、変身！！」
正義の身に付けていた腕時計を天にかざし針が回り強烈な光、飛ばされそうな風、立っている地が揺れる、雲が正義を中心に渦をつくる。
「うおーーー！！」
声は公園内に響き渡る、腕時計に四匹の獣の絵柄が浮かび上がり、光は正義を包み込んだ。
「何なんですかあれ、あれが変身なんですか？」
アライドが耳を塞ぎながら、微動だにせず腕を組んでいる総統が答えた。
「そうじゃ、長い間封印していたものを全て吐き出す勢いじゃ」
総統は正義に負けじと正義に負けないように声を張り上げた。
「さあ！かかってこい正義！我等W団は逃げも隠れもしないぞ！！」
「うおーーー！総統ー！！」
「正義ーー！」
正義を包み込んだ光ははじけ、その衝撃波がW団にぶつかり、水犬は後方に少し飛ばされ、総統はアライドをエンクランスはサリィの盾となり、フードの人は一歩も動かず立っていた。
「あれが…正義の見方……」
そこには微妙な私服から、全体的に赤、青、緑、白が程よく色分けされた服に首に巻かれた黄色のスカーフが特徴の格好になり、腕にはあの腕時計が。
「水犬！今までどうりにいかないかもしれんが、行け、その牙でもう一度正義を倒すのじゃ」
水犬は先程と同じ動き方で正義に襲いかかった。
「ウーッ（変身ぐらいで強くなるはずない、すぐに決めてやる）」
水犬は正義に飛びかかったが、水犬は正義にあっけなく上空に投げ

飛ばされた。
「……」
「ワ！！（なに！）」
投げ飛ばされた水犬は地面に着く前に身をねじり、キレイに立て直した。
「水犬、油断するな、先程の正義とは別人じゃ」
その後も水犬は正義に襲いかかったが、そのたびに投げ飛ばされ、始めはキレイに着地していたが、次第に立て直す力がなくなり地面に叩きつけられるように落ちていく、それでも水犬は総統のために闘った。
「ウーッ（まだ…まだ…）」
「水犬！」
「スイ！もうやめて、総統このままじゃスイが…」
「そうですよ、エンクランスさんも止めてください」
しかし、二人は止めようとしなかった。
「総統、エンクランスさん」
するとエンクランスが総統に代わって代弁した。
「水犬は投げ飛ばされてから一度も総統を見ていない、諦めてないからだ、そこに私や総統にやめろといわれたらどうなるか、さぞ悔しいだろうな」
「さすがはエンクランス、そのとうりじゃ」
今にも水犬にやめるように指示したい総統だが、必死にこらえている。
「水犬がこっちを一度でも振り向いたらやめるように指示する、しかし水犬はそれを今、望んでいるのか、だから止めないのじゃ」
「総統……」
また、水犬の体は高く上がりそのまま地面に叩きつけられた、表面の水が少しずつ流れ落ちている、犬の原型を保つのも厳しくなり、倒れ込んで動かなくなった、四季蜘蛛の時よりひどい状態に。
「クーッ（ダメだこのままじゃ）」

その時、無意識に水犬は総統の方を見てしまった。
「水犬……分かった、よく頑張ったね」
W団メンバーは水犬の負けを認めようとしたその時、顔の右耳が潰れ、尻尾もなくなった水犬が立ち上がった。
「ウーッ（総統、まだです、まだいけます）」
「水犬！」
「アウゥ（だって…約束したから）」
前日、正義に手紙を送り、夜中に戦闘メンバーの順番を決める際、一番に名乗り出たのが水犬だった。
「やってくれるのか？」
「ワン！」
「それじゃあ順番はこのとうりで正義を倒そう、我等W団が必ず勝つ」
「我等W団！」
その後、みんなが寝ている中、水犬はアラネが寝ている木があるアパートの庭で空を見上げていた。
「ファァー（明日は決闘か…）」
「水犬、こんな所にいたのか、自力で水筒から出れるようになったんだね」
総統がアパートの外から庭に通じる道を使わず、部屋から直接庭に出れる窓から出てきた。
「ハウ（総統…）」
「水犬…今日君が積極的に名乗り出てきてくれて、正直に嬉しかった……水犬」
総統は水犬の冷えた頭を撫でながら小声で頼んだ。
「正直に言うとアラネちゃんには戦ってほしくない、まだ小さな女の子だ、そんな子に生死をかけた戦いをしてほしくはない」
水犬もそこは理解していた、アラネはあんなに強がっているけど、あの時の四季蜘蛛のような怪我をさせたくはない。
「だから水犬、無茶は承知の上で頼む、正義を倒してアラネちゃん

に回さないようにしてくれ」
僕が負ければアラネが傷つく、アラネが負けるとは思わないけど、負ければW団は壊滅、サリィは救出という形でもう会えない……総統やアラネにも……。
「ワオォー（イヤだー！！）」
「水犬！もういい、十分頑張った、正義の体に傷を付ければもう十分じゃ、だからもうやめるんじゃ」
「総統の言うとおりだ、もう下がるんだ水犬」
しかし水犬は下がろうとしなかった、水犬はフードをかぶった顔を隠した人を一度見て、崩れ落ちた体を少しずつ治した、全力で飛び上がるために。
「水犬…頑張って」
「総統！水犬は玉砕覚悟のつもりですよ総統！」
もう何を言っても止まらない水犬を見て、覚悟を決めた。
「アライドくん、見届けよう……水犬の最後の一撃を」
足の形を治し終え変身したその場から一歩も動いていない正義に向かって雄叫びをあげた。
「ワオォー（正義ー！）」
水犬は走り出し、高く、空高く飛び上がった、あのまま飛びかかった所で投げ飛ばされる、だったら先程出したこの技で、変身前にとめられたが、もうこれしかない。
牙を極限まで鋭くし、前脚に爪を尖らせる、すでに体の大半は飛び上がる時にただの水になり流れた、もう後ろ脚はない。
「……（一撃…たった一撃だけでいい…深い傷さえつければいいんだ、そのために僕は……）」
水なのか、はたまたそれは涙なのか、潰れた片方の眼からでた水滴は崩れる体と共に落ちていった。
「哀しいね…」
水犬の体は落ちる、正義めがけて爪と牙を向けて、落ちる。
「水犬…君はよく闘った…」

落ちてくる水犬に対して構える正義。
「でも……負けるつもりは…ない！」
力を込めた正義の拳が水犬めがけて放たれた。
『正義の見方奥義・正義の裁拳』
水犬は正義の奥義を避けることなく直撃、体はまた空に昇り、地面に一度叩きつけられ、再び浮いてからゆっくりと倒れて落ちた。
「水犬ー！」
総統達は倒れ込んだ水犬に走り寄ったが、フードの人は動かずに正義をにらんでいた。
すでに体の半分は流れ落ち爪と牙はなくなり、片方の前脚と半分の胴体、氷が溶けるように形を失ってゆく顔、その水滴は地面を濡らしている。
総統はすぐに自分のマントを地面に敷き、これ以上崩れても水犬だった水を回収出来るようにした。
「総統…水犬は大丈夫なんですか？」
「分からない…ここまで崩れた水犬は見たことがない、もしかしたらこのまま」
「スイ！返事して、スイ」
水犬は片方の前脚をフードの人がいる方に伸ばし、口を動かして何かを伝えようとしている。
「カ…クッ…クッ（アラネちゃん…ゴメンね…負けてしまった…少しでも…力になれたら良かったのに…）」
フードの人は水犬を見ていなかったが、正義の睨みをよりきつくし震えていた。
「クッ…カ…（総統…ダメでした…すみ…ま…せん……）」
そして、恐れたことがおきてしまった。
「水犬……」
総統が触ろうとした体は、触れられる前に崩れ、音を立てて透き通った清いただの水になった。
「ス…イ…」

初めて総統が連れて帰ってきた新しいメンバー。
「水…犬…」
無茶な命令もなにも言わず従った。
「水犬…」
いっつも外に散歩する時はついてきてくれた。
大切な我等W団のメンバーが今……。
倒れた……
「水犬ーーー！」
しかし、戦いはまだ終わっていない、正義を倒さない限り戦いは終わらない。
「アラネちゃん…もうフードをとってもいいよ、水犬はよく頑張った、でもこんな姿になるまで戦わなくていいよ」
「総統…それは……」
フードをおもいっきり投げて出てきたのは、動きやすいようにカットされた紫の着物を着て膝までのびた黒髪の小さな女の子が出てきた。
「今の私には出来ません」
アラネ、言うことを聞くんだ
「総統！私はあの時の会話を聞いたんです、その時に水犬と約束したんです、あんたが負けても私がなんとかする、だから無理はしないでねって、それなのに…それなのに！」
アラネは指先から糸を出し、正義の腕に絡ませた。
「正義、かかってきなさい、私の名は四門アラネ、蜘蛛使いであり四門家現女王、大切な仲間、水犬の仇を討つため正義の見方、あなたを倒す」
正義に絡ませた糸をほどき、アラネは林の中に入っていった。
「ついて来なさい正義、あなたをこの林に住んでいる蜘蛛の餌にしてあげる」
アラネの姿は林の中に消え、正義もゆっくりと入っていった。
「アラネちゃん…無茶だけはしないでくれ」

「総統、私とアライドで戦いの行方をみてきます」
しかし、既に戦闘は始まり、アラネの技が正義の身動きを封じていた。
「さぁ正義の見方、どうするの、負けを認めてもいいのよ」
だが、アラネは気づいていた正義の異変に、正義がボソッと何かを呟くとあの腕時計が青く光り、次第に大きくなっていることに、そしてまた大きく光る。
「哀しいね……」

水犬ＶＳ正義の見方（後書き）

水犬が倒される数分間、蛍池では水犬の健闘を祈る蛍姫と多数の水犬、そして、あることを感じ取ったのか座っていた水犬が各々立ち上がり鳴き出した。

「そうですか…負けてしまったんですね、よく頑張りました、あとはアラネさんに任せて、今は深く休みなさい」

しかし、アラネは正義にかてるのかそして、サリィの身柄はどちらにとられるのだれうか。

次回、正義ＶＳ悪、勝利はどちらの手に。

とある正義の戦闘記録（前書き）

水犬は倒れた、正義の手によって倒された、その哀しみを背負いアラネが戦うが……大きな音が２つ鳴り響いた

とある正義の戦闘記録

アラネが林の中に入り、追いかけて入ったエンクランスが見た物は直視できない、無惨な光景だった。
「アラネ…く…だ、大丈夫…く…」
「エンクランスさん、だめですよ笑っちゃあ」
「君は遅れ…てきたから分からないだろうが、あれを見たらねー」
それはアラネが正義の見方を蜘蛛糸で辺り一帯を巣のように囲み逃げれないようにしたとこから始まる。
「どうよ、これでもひとりで熊一匹チュルリと倒して食べたんだよ、身にしみこむぐらいあたしの糸で楽しんでね、せ・い・ぎ」
「楽しむ……可愛い…」
アラネは巣の中心に突っ立ってる、正義を中心に周りの木に飛び移り、速度を上げながら正義の体に糸を絡める、次第に振り払っていた糸が振り払えずに体につく、跳んできて直接つけたり細かったり、網状にして飛ばしたり、工夫をこらした糸が飛んでくる、次第に動きが鈍る正義にトドメの一撃、地面に落ちた糸を手繰り寄せ四方から正義を閉じ込めるように引き上げ。
『四門家奥義・蜘蛛繭』
正義はさなぎのように体に糸が巻きつき、立ったまま動かなくなった。
「決まった…後は正義を食べるだけ」
蜘蛛の捕食は「生き血を吸う」という風にもいわれるが、実際には消化液を獲物の体内に注入して、液体にして飲み込む、食べ終わると獲物は干からびるのではなく、空っぽになっている。
小さいものはかみつぶして粉々にしてしまうこともある。
アラネは木から猛スピードで正義に飛びかかった。
「正義ー！」
「小さい女の子に食べられるのはいいが……さすがにこれはね」

そうすると、繭の中から正義の手が出てきた、そのまま正義は後ろに倒れながら、アラネの顔の前で思いっきり手を叩いた。
「ヒィ！」
その時にエンクランス到着、アラネはそのまま正義を飛び越え木に顔から激突、大きな木がしなやかに揺れる。
「そんな…そんな……大きな音は…駄目」
アラネは今でも、車のクラクション、工事の音、バイクのあの音、テレビの発砲音、フーセンの破裂、とにかく少しでも大きな音にも反応してしまい、最悪の場合倒れる。
「アラネちゃ…く……くく」
「エンクランスさんいったいなにが……」
「アラネ…く…だ、大丈夫…く…」
「エンクランスさん、だめですよ笑っちゃあ」
「君は遅れ…てきたから分からないだろうが、あれを見たらねー」
しかし、エンクランスが笑いをこらえている間に正義が繭から抜け出していた。
「哀しいね…もしかしてこれで終わり？」
実際倒れているのはアラネだが、本人はどうだろうか。
「なわけないでしょう、まだまだいけるわよ」
立ち上がったアラネの顔はすでに半泣き状態、絵に描いたようにおでこが真っ赤に。
「アラネちゃ…無理……しないほうが……アハハもうダメむせそうアハハハ」
「エンクランスさん……わからなくもないです」
もう下を向いて泣き出す一歩手前のアラネ、しかし泣くのを我慢しながら、袖の衣で顔を拭きながら正義にもう一度挑戦するその姿は。
「正義！も…もう一度…しょ…勝負！ウウゥ」
「…か…可愛い…」
そんなアラネを見ながら正義はポーズをとりはじめた。
「アラネちゃん、君の思い十分理解した、しかし、正義は悪を打ち

倒すのが道理、もう手加減せずに君の哀しみを吹き飛ばしてあげよう」
「なに言ってるのそんな痛いことといっても、もうひろわないわよ」
その時、正義の腕時計から新たな青い光が林を照らす、正義がポーズを変えると更に光が、そして、その光はアラネの体からもオーラのように出てきた。
「やっぱりまだ何か隠してたのね、来なさい！そうじゃないと水犬の敵討ちにならない」
アラネもついでにポーズをとる。
「いいだろう、その哀しみを打ち砕いてあげよう、正義の見方四神竜チェンジ」
正義のコスチュームが少しずつ青く染まる、腕時計の針が3時を指し、まるで腕時計から青龍が飛び出したかのように見え、周りに飛んでいた青いオーラを吸収して、正義の体の中に入り込んだ、そして！。
「人の哀しみ代わりに背負い、青色涙を身に浴びて、青き龍の力を借り、哀しみの一撃にて終わらせる、哀しみの見方、ここに参上」
ついにきた、アレが正義の周りを飛んでいた正体、正義が変身して水犬と戦っていた時から、フードで顔を隠してても感じていた、まさか更に強くなるなるなんて……。
「アラネちゃん、もう後にはひけないよ」
アラネは不意打ちを狙い糸を飛ばしたが、簡単に振り払われた。
「今更逃げるなんてことしないわよ、もう一度…今度こそ失敗はしない！」
先ほどの技を出すため再び木に飛び移り、猛スピードで正義の周り一帯に糸をとばす、しかし、正義はそこから動かず、技が完成するのをじっと待っている。
「勝気満々ね、でもさっきとは技が違う！」
どは足下から包み込むように上げたが、今度のは真上、逃げ道を防ぐために使っていた側面、そして真下から囲む、三段の構えで正義

の動きを止めようとした。
『四門アラネ流奥義・蜘蛛繭』
ところが、正義は何もせずに立ったままアラネの技に当たり、顔が見えないほど糸を巻きつけ、アラネは正義を包んだかを確認せず間髪入れず飛び込んだ。
「倒れろせいぎ…」
そこには、繭の中にいるはずの正義が、周囲に飛び散った糸の中心で、水犬を倒したあの構えで待っていた。
「アラネ、君はまだ幼い、もっと強くなれる…、だが！その哀しみこの糸のように吹き飛ばしてあげよう」
避けようとしてもすでに手遅れ、正義は始めっからアラネの技が当たっても意味がなかったのだ。
『哀しみの見方奥義・青龍円月砕』
アラネは頭の中が真っ白になり、気がついた時には自分が林を抜けて空高く打ち上げられていた、体はある程度上がり、水犬と同じように落ちていった。
「アラネちゃん！」
総統がいる広場に落ちていったアラネを両手を使って見事キャッチしたエンクランス、すぐに状態を見るが、アラネはグッタリと目を開けたまま人形のように動かなかった。
「アラネちゃん…エンクランス…意識のほうは…」
「意識はあるようですが、もう戦える状態では…」
「そうか…、エンクランス…みんなを頼んだ…」
総統は水犬だった水を水筒に入れ終えて、サリィに渡し、一人で正義の待つ林の中に入って行った。
「総統…待ってます、必ず帰ってくることを」
総統は後ろ向きに手を振り、林の中に姿を消した。
数分後…。
大きな音が一回だけ鳴り響いた。
その日の夕方、傷だらけの影一つに寄り添う影が四つ横に並んで、

歩いていた。
「みんなボロボロだね」
「総統ほどじゃないですよ、いったい正義とどんな勝負をしたんですか？」
「アライドくん、それは総統だけの秘密だよ」
「今度こそ正義を倒して餌に…」
「アラネちゃん大丈夫？」

家路を歩いて帰っていた、正義の見方には負けてしまった、だが、まだW団は生きている、これが始めての敗北ではない水犬と会う前から正義と戦っていたのだ、しつこい汚れのように悪もしつこい、決して折れない心の強さがW団の強さでもある。
「さあみんな、帰ったら祝杯の鍋だよ」
「なんの祝杯何ですか？」
そんなアライドの手にはスーパーのビニール袋に沢山の食材が。
「アラネと水犬の初戦と無事に帰ってきたことのお祝い」
「負けたことを祝うんですか？」
そこにエンクランスの訂正。
「それはちょっと違うね、W団の総統やサリィのことを思って戦ってくれた君達のメンバーの絆を祝うんだ、そうですよね総統」
「そのとうりじゃ」
総統がいったいどうやって正義を黙らしたのは誰も知らない謎のまま…。
「…しかし、そこには2人だけの特別な間になにかあるのかもしれない、とっ、いやー長かった、まさかこんなに長くなるなんて」
電柱の後ろに隠れながら今までつけてきた中之島レナ、その左手には先ほどの戦いの記録されたメモ帳が。
「世界征服を企む悪の組織W団、それを防ぐために戦う正義の見方、どっちについてもおもしろそう、でもここは…」
レナは総統達を追い越して道を塞ぐように立った。

「そこの悪の組織W団、ちょっと待った」
「君はあの時の」
「私はこの近くに住んでいる中之島レナと言います、先ほどの戦い見せていただきました、そこで私はぜひメンバーに入りたいと思いまして、ここに現れたのでございます」
「うん、いいよ、これから君もW団のメンバーだ」
軽、まさに一言で表すならこの言葉。
「それじゃあこれから君の入団も祝って鍋を食べようか」
どうしよう、もうちょっと苦戦してもおかしくないと思ってたのに、簡単に話が進んでしまった。
「それが…この後用事がありまして」
「そう…それでも近いうちにアパートにきてね、それじゃあみんな引き続き帰るよ」
W団は私の真横を通り過ぎ帰っていたが一人だけ歩みを止めた。
「君が一日中見ていたのは気づいていた、どういうつもりか知らないが、W団に来た以上、仲間として協力してもらう」
そう言い残してエンクランスは歩き出した。
「協力…するわよちゃんとね」
レナは総統達が見えなくなるまで待ち、もう一人の所まで急いで走った、そのもう一人とは。
「私はこの近くに住んでいる中之島レナと言います、先ほどの戦い見せていただきました、そこで私はあなたのファンになります正義の見方さん」
「……なんで」
これよ、普通の人ならこの反応のはずなのになんであの組織は。
「あの素晴らしさ、とても感動しました、だから私も正義の為に働きたいのです」
「……そうなの」
「それで私はなにか恐ろしい企みを聴いたら伝えにきます、それでは」

それだけ伝えて日が暮れた夜道を走って行った。
「……嵐みたいな子だな」
正義はそのまま一人、少ししか入っていないレジ袋を持ちアパートに帰った。
中之島レナ、無事に帰宅。
家ではすでに夕飯を食べている両親、焼かれた手羽先をそのまま音をたてて食べている父が、帰ってきたレナに気づくまで一秒とかからなかった。
「あら、今日は早かったわね、どうだったの？」
「順調に話がまとまったよお母さん」
「そうか！レナよくやったこれでガッチリと彼を捕まえ絆、愛を深めるんだこうバリッと」
「分かってるよ、ご飯は後にするから先に入ってるね」
「そうだ！風呂ってゆうのは熱いに限る、こう燃えているような温度が」
「お父さん、もう行ってしまいましたよ」
軽くやたらと熱い風呂から上がり、濡れた髪を乾かさずタオルを体に巻き、すぐに今日のメモ帳を取り出し自分の部屋の机に座った。
「悪と正義……、どっちが勝か……、私はどっちもいいけどやっぱり強いほうがいいな、正義には悪いけど私はW団に助力するわよ、これも一つの愛のか・た・ち、なんてね」
レナは新しいノートを取り出しタイトルを書いて、パジャマに着替えたのち、夕飯を食べに部屋の電気を消した。
『とある正義の戦闘記録』

とある正義の戦闘記録（後書き）

W団の住むアパート、戦いを終えた総統達は全員で鍋を囲んでいた。注意点ここから先、どんな状況かはいっさい書かず会話だけです。

「総統、鍋が出来ました」

「ちょっと待って、しいたけを用意して…、出来たよ」

「さすが総統、用意が手慣れてる」

「総統さん、他に運ぶ物は？」

「もうないから、後はみんなで食べるだけだよサリィちゃん」

「総統！水犬の入れた水筒から、消しゴムサイズの水犬が」

「水犬…良かった、ごめんね、あたしこれから強くなるから一緒に頑張ろ」

「ワン（もちろん）」

「それでは、今回は負けてしまったが、更に強く打倒正義を夢見るだろう、我等W団は世界征服をするまで、力をあわせて頑張るぞ」

「我等W団！！」

「それじゃあみんな…一気に食べよう、鍋将軍はワシじゃー！」

「そうはさせない総統、私が鍋将軍になる！」

「やはりついてくるかエンクランス！」

「2人だけ別次元だね」

「そうでもないわよアライド…、鍋女王は、じゃないしいたけは全て渡さない！」

「急がなくてもとらないよ、だろサリィ……」

「鍋女王……鍋女王！」

「言葉…気に入ったの」

「グルル（鍋獣王！）」

「水犬…そんなに豆腐にかぶりつかなくてもそれだけで満足でしょ、……なんかなー、一人だけ冷静なのはやだな、鍋将軍の座はこのアライドがもらい受ける、突撃！」

「総統！鍋が空になりました」
「一時休戦、みんな待機、……再開！」
「ウオオオーー！」

熱い工場長（前書き）

どうも、総統です。
今回のお話は第一回アンケートの中から選ばれたアラネが主役のお話し、ということで前回のあらすじと今回の内容。
屈辱的にそして簡単に負けてしまったアラネ、自分の弱さを再確認したアラネは夜の世界に飛び出す。

熱い工場長

１９・００
「こんばんは、午後７時のニュースです」
テレビのニュースキャスターが現在の世界平和の状況を教えてくれる、今日の夕飯は冷やし中華、それぞれの麺の上にはいろんな具材が盛られ食されている。
「総統、卵のみじん切りありますか？」
「総統さん、マカロニありますか？」
「総統、キュウリとキャベツとトマトにレタス…あとマヨネーズありますか？」
「あるよ、アライド君には卵、サリィちゃんにはマカロニ、でも２人とも野菜も食べること……エンクランスは何を食べるつもり？」
「冷やし中華でーす」
「まあ、野菜は大事じゃが、もうそれマヨネーズサラダの中になんとなく麺が入っているにしか見えないんじゃが」
野菜と麺が８・２で構成され、タレはマヨネーズになっている、それでも言い切るエンクランス。
「冷やし中華でーす」
そんなエンクランスを見ながら別の皿に盛られたシイタケといつもなら一番に席についている一人が帰ってこない。
「どうしたんじゃろうアラネちゃん、せっかく用意したのに」
正義に負けた日から帰りが遅くなり、すっかり元どおりになった水犬が一匹で帰ってくるだけ。
「よほど悔しかったんじゃろ、麺がのびたら困るからまた後で用意しよう、さて食べるか」
総統も冷やし中華を食べようと席に着き、きれいに盛られた三色冷やし中華を食べ終え、食器をかたずけながらブラウン管テレビから流れるニュースを聞き流しながら家事を進める。

「…ここ最近、工場から金属の盗難が増えつづけています、なので郵便局前で金属古市場をするらしいです、それでは（警察官の見張りはないので気楽に来て下さい）」
3時間後…
海の匂い、工場から出て流れる煙、工場側から向かい側のホテルの光、アラネは工場の高い塀を歩いていた。
「ハァ～、ここ最近アパートから遠くに離れた場所に何かあるか、そして、何かヒントが見つかればいいと思ったんだけど…」
袖に入れていた小石を手に取り、目の前に放り投げ、すぐさま糸で捕まえる、という遊びを繰り返しながら塀を歩いていた。
「何かないかな～、こう悪っぽいことしたらなにかおきるかな？」
犯罪に手を出すのはW団の禁止行為、やりたくても出来ない、そんな時。
「…急げ」
「…慌てるな、まだ大丈夫だ」
「ん？工場の中から声がする…従業員？」
アラネは興味本位で工場の中に入り声の方向に走り出した、そこにはアラネがスッポリ収まるほどの鉄パイプを両手を使い二本持った大男、ボルトやネジの入った袋をサンタクロースのように持ち歩いている小男、鉄板を縄で結びつけリュック感覚で集めている中女、絵に描いたような三人トリオがなにやら金属を盗んでいるようだ。
「アネキ、これでいくら出してくれるんだろ？」
「黙ってな、一週間ぐらいなんとかなるさ」
「でもさ、アネキが鉄板を集めているのは、ある意味ピッタジ…」
「人の身体的特徴をバカにした罰だ」
「ああ！ネジが！危ない転んじゃうよ」
「……何あいつら？」
工場の屋根に取り付けられている煙突からちらっと見ているアラネに全く気づかずに、黙々と作業をする三人トリオ、私には関係ないと帰ろうとしたその時、塀の方に向かおうと屋根の端に立ったら真

下から声が。
「おおお落ち着くんだお嬢ちゃん、何があったか知らんが早く…いや、ゆっくりと慎重かつ早くおちついて降りてくるんだ」
アラネに話しかけてきたオッサンは日焼けでもしているのか黒光りして、でっぱり腹にハゲ、腕には豪華な金の輪が両手に身に付け火のついていない葉巻をくわえて、アラネが落ちてもキャッチ出来るようにせわしく動いている。
「おじさんはあの三人の仲間なの？」
「何をわからない事を、ほらおじさんが下で落ちたときに受け止めるから、降りてくるんだ」
屋根の端に非常用の下に伸びるタイプのハシゴがあった、まだ伸びていない。
「……おじさん、本当に受け止めてくれるの？」
「おじさんは嘘つかない、だから…て、なにをする気だ」
アラネはサビたハシゴに全体重をかけるように飛びかかり、長年使われていなかったハシゴが急落下する、そして、伸びきったのかハシゴは急停止したが、なんとか耐えた。
「手が痛い…でもなんとかなった、おじさんなんとか…」
「お嬢ちゃん早く下りるんだ、それはサビて止まっただけで、早く下りるんだ」
しかし、元のネジが外れ、アラネはハシゴと一緒が落ちた。
「危ない！」
オッサンは落ちてくるアラネを見事キャッチ、サビたハシゴは落下時に大きな音をだして、工場内に鳴り響いた。
「誰だい？！」
三人トリオが音の方に近づいて来る、それに気づかないオッサンとアラネ。
「おじさんありがとう」
オッサンの身長は軽くアラネの二倍、見上げるように見ないと話せない。

オッサンは葉巻に火をつけ深く息を吸い込み、工場の煙のような濃い白煙を空に向けて吐いた。
「おじさんは嘘はつかない、お嬢ちゃんどうしてあんな所に？」
「あんたら誰だい！？」
そこに中女が到着、それに続きトリオ集結。
「アネキ、こういう時は逃げた方がよくない？」
「そうだよ鉄板、逃げだぼうぎゃ」
「ネジが！危ない転んじゃうよ」
「お前達か最近の盗みを働いているのは」
オッサンのことより地面に散らばっているネジを気にするトリオ。
「危な…そうさ、でも見られた以上、ちょっとした口封じしないとね、大男！」
「危ない！転んじゃうよ…はい、アネキ」
盗品の鉄パイプを片方地面に置き両手を使い振り回す大男。
「人の盗品を勝手に武器にしよって、この盗人が」
オッサンは葉巻を捨て、火を消そうと足で消したが、慌てて葉巻を拾う。
「もったいない、まだ吸えるのに」
「いくぞオッサン！」
大男はオッサンの頭を狙い鉄パイプを振り下ろしたが、正義とは違ったポーズをとった後に片手で受け止め、武器を奪い取るようにパイプを持ち大きな声と共に大男とパイプを一振りした。
「うわあぁ～」
大男はその一振りに耐えきれずトリオの方に飛んでいった。
「小男！」
「はいよ鉄…アネキ」
袋に入っているネジやボルトを指で弾きまるで弾丸のように飛ばしてくる。
オッサンは奪い取ったパイプを盾にして、アラネを盾の後ろに誘導した。

「お嬢ちゃん、おじさんちょっとした無茶するけどついてきて」
「さっさと出てこい…て…来るなー！」
それはパイプが猛スピードで接近してきたのだ、パイプは地面にこすりつけられ火花を散らしていた。
「アネキ、俺先に逃げる、わあぁ～」
「あんた女を残して逃げる普通？、仕方ないね」
背負っていた鉄板を一枚おろして、迫ってくるパイプの上を飛び越えて、背後をとった中女。
「おじさん後ろ！」
「もらった！」
鉄板を縦回転をつけて投げてきたが、両手を使い挟むようにして、鉄板を止め軽く投げ返した。
「そんな危ないって、ひあぁ～」
三人トリオに一発きついのをそれぞれ放ったオッサンだが、アラネはいつの間にかどこかに消えていた。
「お嬢ちゃん？あれどこ行って……」
お嬢ちゃんを捜しているその時、オッサンの真後ろに大男が鉄パイプを振り、すかさず腕で防御したが、盾にしていたパイプから離れてしまった。
「クリーンヒット！アニキいまだ！」
ネジの弾丸が飛んでくるが防ぐものがない。
「たたみかけな！」
「はい！」
小男はネジを弾き、中女は鉄板で外れたネジを打ち返し、大男はパイプを振り回している。
「勝てるぞ～」
そうすると、パイプから声が。
「うう、気分悪くなってきた」
「えっ？パイプから声が……」
大男は振り回すのをやめて、パイプの中をのぞき込むと、パイプの

中に大量の蜘蛛の巣、その中に小さな女の子が赤い目を光らせ待っていた。
大男の顔は吸い込まれるようにパイプにはまり抜こうとするが抜けない。
「蜘蛛の巣が女の子がパイプの中にアニキ！助けてー！」
「バカ！こっちに来るな」
しかし、大男は小男に近ずき、足下に散らばっているネジを踏み、前のめりに倒れて小男も巻き添えをくらうことに。
「ギャー！」
「あんた達、なにしてるの！」
「おじさん！これを上に投げて」
アラネは大男の持っていたパイプからふらふらっと出て、先ほど盾にしたパイプを上空に投げるように頼んだ。
「わかったが何するつもりだ？」
「あと、できるだけあの鉄板の近くに落ちるように」
「誰が鉄板だ！あんたも鉄板のくせに」
「お姉さんより未来はあるもん、じゃあ頼んだよ」
言われたとうりにオッサンはパイプを投げ、それを確かめたアラネは考えた後、中女に突撃した。
「何するつもりかわからないけど、これでもくらいな！」
縦回転で投げてきたが、一枚の鉄板に当たるほどアラネは鈍くない、中女はすぐに2枚目を投げようとしたが、アラネは糸を飛ばし両足を結びつけた、転けないようにバランスをとっている中女にアラネの両足飛び蹴りがヒット、後ろにジャンプしながら後退する中女だが、ネジを踏まずに見事に保った。
「ハハハ！転ばせようとしてたのに残念だったね、そこまで鈍くないのよハハハ！」
その時、上を向いて笑ったらあのパイプがこっちに向かって落ちてきている。
「ハ…ハハ……あアァー！」

強烈な音とともにパイプが中女の場所に落下、しかし、パイプの穴に奇跡的に入って直撃はしなかったが、大男のパイプに仕組んだ巣をもちろん仕組んでいたので中女の頭だけがパイプから出てミイラのように顔に糸が……。
「良かったじゃないあたしみたな細さじゃなかったらどうなってた……か…」
「お嬢ちゃん！？」
アラネは考えた決めゼリフを言い切ったらいつものように倒れた、理由は考えるまでもない。
「覚悟してたのに…」
倒れたアラネを心配して大男から目を離した瞬間。
「おい、今だアネキを助けるぞ」
大男はなんとか頭がパイプから抜け出して、小男を肩に乗っけて、すぐにハマっている中女入りパイプを回収して逃げていった。
「覚えておけ、いつか復讐してやる！」
「そうだ、やってやる！」
「コラ！逃がすか」
しかし、小男は持っていた袋を全て投げ、道は大量のネジで敷き詰められたら。
「なんて事をする連中なんだ」
時刻は日が変わってから一時間、ようやく目覚めたアラネ、場所は変わらず工場内のようでベンチで寝ていたようだオッサンの姿が見当たらない。
「もう、帰らないと」
アラネは目の前に出口があったので歩いて工場を出た。
「あ…あたま…が…」
まだ、ふらふらしておぼつかない足取り、クラッとなり看板に当たり倒してしまった。
「うう、頭に響く…」
アラネは倒してしまった看板を立て直し読んでみると。

『熱くなれ、叩かれるほど鉄も体もつよくなる』
「ん？」
よく見るとほかにも看板がある。
『草食？肉食？私達はバランスよく両食系だ！』
『冷静はご注意とお断り、ここは熱血だ！』
『寒い？ならば動け！暑い？ならば脱いでふんどしになれ！』
『チームの力は結束、熱意、団結だ！だから覚えよう朝の体操、歌詞……』
「あれ？こすれて読めない」
何かおかしいと思いながら工場の出口を出たら、門の近くの電灯の下で葉巻を吸っているオッサンがいた。
「おじさん…なんでいるの？」
「お嬢ちゃんを一人にしてわおけないが、家に連れては行けない、この体と差では誘拐に見えてしまう、だから起きるまで遠くから見張っていたんだ、ワシの工場だしな」
葉巻の火を消すため、燃えているとこだけ切り取り、再び葉巻をくわえた。
「おじさんの工場？」
「そう、この製鉄所この灼熱工場のだ！…といっても今は作業中じゃないから熱くないが、ワシのつくったオリジナル体操をすれば暑いぞ」
…熱く…熱く……熱く。
アラネは考えた、いまの自分では正義に勝てない、でも…
「おじさん…あたし…ここに遊びにきてもいい？」
「なにいってるんだお嬢ちゃん！？ここは遊び場じゃなくここは工場で最近あのような連中がきて危ない…」
「ならあたしを雇って、みたでしょあたしの力、だから夜の警備をやらせて」
今の生活では総統に負担をかけている、だからこのバイトをして、給料および強くなる。

「なにをいっても無駄かい？」
ジッとオッサンを熱く睨むアラネに対してオッサンはそれを確かめるため一つだけ聞いてきた。
「熱くなれるか？」
「なれる…あたしは熱くなれる」
道路に車は走っていない、電灯のチカチカする音だけが唯一の音、少しの間の後、動いたのはオッサンのほうだった、握り拳をアラネの目の前にゆっくりとさし出した。
「この拳を力いっぱい殴ってみな、それがあいさつだ」
アラネは力いっぱいオッサンの拳を一発殴ったが。
「コレじゃあだめだな、諦めなさいお嬢ちゃん」
そう言い残し帰ろうとするオッサン、こんなことでは諦めないアラネはオッサンの背後にとびっきりの両足飛び蹴りを行った。
「おじさん……あたしのあいさつはこれだー！」
しかし、オッサンはまるで来るのを予想したかのように振り向いた。
「そうだ！」
オッサンは先ほどの拳でアラネの飛び蹴りを受け止めた。
「これぐらいでなければワシの工場には、入れない！ようこそお嬢ちゃん、君を灼熱工場の夜間警備員に任命しよう」
一回転して後ろにさがるアラネ、半分以下になった葉巻に火をつけるオッサン。
「そういえばまだ自己紹介してなかった、ワシは灼熱工場の工場長、銑三（せんさん）、みなは工場長と呼ぶ」
「あたしは四門アラネ、悪の組織のメンバー」
「悪の組織？これはまた面白いお嬢ちゃんを雇ってしまったな」
こうして、新たな力を求めるため夜間警備員として雇ってもらったアラネ。
黒光りして太ったデカくて人情熱い灼熱工場の工場長、銑三。
しかし、この工場すでに悪の手が伸びていた。

熱い工場長（後書き）

セリフだけ、しかも中女。
「あんたたちのせいで顔がミイラ化したわ！、何とか戻ったけど、…失礼します。…あの、いいですか？今回の成果わパイプ一本…ヒィ！、すみません、ですが邪魔が入って…はい…いえ、あのおっさんだけでわなく子供がヒィ！、すみません……え、まさかじきじきにでるんですか？…分かりました…それでは……。もうあいたくないわ！あんなやつになんであたし達がしたがってんだよ、はあでも私達いく当てないのよね、それでも…今度は勝つわよ！」

灼熱体操！！（前書き）

灼熱工場の夜間警備員として雇われたアラネ、しかし夜間だけでは強くなれないと思い、朝早くからアラネは工場に出かけた、そして弱点の克服に一歩近ずく。

灼熱体操！！

大勢の灼熱工場の工場社員が朝早くから一カ所に集まる。
「ここか…」
その時、アラネは第一灼熱地獄工場の屋根裏の鉄骨に隠れていた。
ここは灼熱工場の中では一番デカく作られ、社員三千人は軽く入る。
「何をするんだろう？まさか悪巧み？それに何？この黒い箱は？この工場の中だけに四方におかれてるのは」
アラネは黒い箱を叩いたり引きはがそうとしたが、びくともしない、その代わりどこかで聞いたことある声が聞こえる。
「じゅ…は…るのか…マイク…わる…テストして…みる」
「銑三の声？まさか銑三…あまりにも太ってるからって長方形の箱にならなくてもいいのに、痩せようとして失敗したの？」
アラネは黒い箱に抱きつき元銑三の声を聞こうと、スピーカーに耳をくっつけるかたちになった。
そんな事をしていたら、木製ステージ端から銑三がマイクを持ちながら歩いてステージの中心で朝の挨拶が始まった。
「マイクテス、マイクテス、ああ、それでは…」
銑三が急に大きな声を出し、耐えきれなかったマイクを通してスピーカーから強烈な音が。
マイクの使い方を失敗したときになる耳を刺す強烈な音が工場内に響き、社員は耳を塞いだ。
「おっと、音量下げて」
マイクの音量が下がったが屋根裏では蜘蛛一匹が確実に倒れていた。
「は…は……」
アラネである。
「どうも使い方がまだ解らん、まあいいか、誰が倒れるわけないし、それでは朝の体操からスタート」
その後…

「ん…気分悪い…今何時……２０時…夜！」
見事に最長昏睡状態更新。
次の日……
「二度とあんな思いはしたくない、破れたかと思ったわ！」
今度は工場の中心にきて、四方のスピーカーから一番遠いと思われる場所に待機、ついでにスピーカーには蜘蛛糸で二重巻きしておいた、布を間に入れて。
「それでは、朝のあいさつはここまでにして、体操のたいけいに開け」
「ハッ！」
「どこの学校の運動会？」
すると、スピーカーから聞き覚えのあるあの体操第一の曲が。
「両手を前に出して背伸びの運動…1…2…3…4……5……6……7……8」
「間が長い！どんだけ背伸びさせるきなの！」
といったツッコミどころまんさいの体操は十五分かけて終了。
そして、銑三の衝撃の一言。
「それでは、再度体操します」
「もう一度するの？！さっきの…あたしの勘違いだったかな？」
だが、ある社員は喜び、社員の気の引き締め用は先ほどとは段違いだった。
「準備はいいか！」
「ハイ！」
「声が小さい！」
「ハイ！！」
「よし、構え！」
すると、社員三千人が寸分の狂いもなく同じ動きをした後、先ほどながれた第一の曲のアレンジなのか、太鼓の音がメインの激しく暑苦しい曲に、それもそのはず工場内の機械が急に動き出し熱気が閉めきられた工場を包んでいるのだから、なのにピクリと動かない社

員に銑三。
「は……は…これはヤバい、水…水を」
アラネは暑さについていけず脱水され干からびた蜘蛛になりかけていた。
「なるほど、たしかにこれについて行ける暑さを持たないとダメだわ…は…」
そして、銑三が歌って収録した歌が始まり、太極拳のような何かの武術を踊りだした。
「銑三…銑三はどうして……」
ステージに立っている銑三を見て驚愕した、なんと暑苦しいを通り越して、体中に炎をまとい踊っていた。
「銑三！それ熱いを通り越して燃えてる！」
こんな状況がもう十五分続き、曲の終わりと同時に工場の出口が全開され、涼しい風と共に清々しい顔の社員がそれぞれの持ち場に平然と歩いてゆく、それを手を振って見送る銑三。
「行ってらっしゃーい」
社員全員が出て行ったのを確認したアラネはステージに立っている銑三の所に降りた。
「どうだったアラネちゃん」
そこには平然と短い葉巻を吸う銑三がいた。
「あの夜のことを理解したとだけ言っとく」
アラネは汗だく状態。
「すぐに水分補給した方がいいよ」
「うん…そうする……近くに海もあるし…」
「まさか海水を飲むつもり？」
銑三は衰弱したアラネを食堂までつれていった、そして、銑三が立っていたステージには円を描いた木の焼き後が残っていた。
数日後……
アラネはあの暑さに慣れるため日々、工場に通った。
ある時は自分で踊ってみたり、熱唱したり、氷を持ってきて何分耐

えれるかなどなど、いろんな事を試した。
結果……
「アラネちゃん！大丈夫かい」
屋根裏から落下、その後は普通に社員の中に組み込まれ、朝の体操参加者の一人となった。
W団本部アパート夕方
「そうか、朝早くから起きて体操なんて偉いね、でもなんか変な方向に走ってない」
「大丈夫ですよ総統、最近じゃあ皆さんと同じぐらい熱くなれますし、コーンポタージュをすぐに飲めるようになりました」
「前は冷やしてたよね」
コーンポタージュを飲み終えたアラネはいつもの着物を着て庭にある蜘蛛糸ハンモックで一休みした。
「この後バイトだから少し寝てから行くんだって、今日は工場長がいないから大変な日になるっていってたよ、すごいよね、我が団員ながら感心、家計簿も大助かり、見て久しぶりの黒字」
「ギリギリだったんですね総統」
「さすがに全員養いながら仲間探しの旅費もバカにならないからね」
「といいつつ今日はステーキですか、しかも特別ソース付き」
「少しは奮発しないとね張り切って仕事できないでしょ」
「そうですね」
使い終わった皿を片付ける総統、その手伝いをするサリィとアライド、しかし今度はいつも水筒に入っている水犬がいない。
「家庭の悩みは解消されてないなまだ、こんどは水犬がいないよ、仕事でも探してるのかな？」
「さすがに水犬を雇う人はいないでしょ」
水犬はこの時何をしていたのだろうか、それはまた別の話。
場所は変わり灼熱工場出入り口。
「今日もいい仕事が出来た」
「帰ったら風呂に入って寝よ」

「もう少し別のことしないか、雀荘にいくとか」
「なら太鼓しに行こうよ」
日が落ちて帰宅時間になった灼熱工場から煙は消えそれと共に炎も消え、社員はそれぞれの家路に向かっていたが。
「そういえば今日は工場長外出してるんだってさ」
「じゃあ誰が工場を守って…ああ彼女がいたか工場長が認めた」
「だったら大丈夫だろう」
そんな社員が外に出ようとしたら出入り口を陣取っている三人トリオがいた。
「あねき、聞きましたか？」
一人は自分の身長と幅ぐらいある鉄パイプを片手で持ち。
「チャンスですね鉄板」
一人はサンタクロースの袋みたいな物にネジを入れた袋を持ち。
「鉄板いうなチビ、でもこれはチャンスねあのガキ相手なら勝てる、それに今回は人質付きで強力な助っ人もいるしね」
背中に鉄板を背負っている女の合図と共に出入り口の死角からぞろぞろと武器を持った集団が出てきた。
「さあみんな、やっちまいな！」
こうして、銑三がいない時に襲撃された灼熱工場、そうとも知らず出勤するアラネ、今三人トリオの復讐が始まる。

灼熱体操！！（後書き）

大変更新が止まってしまって申し訳ありません。
ですがこの夏休み中もう少しだけ休ませて下さい。
次回予告
三人トリオにより占領された灼熱工場、到着したアラネは早速三対一のハンデ戦をすることに。
次回灼熱工場、アラネＶＳ三人トリオ

アラネＶＳトリオ（前書き）

三人トリオにより灼熱工場は占領され社員は人質に、不気味に静かな工場、一人の少女が役目をはたすため闘う。

アラネVSトリオ

夜の工場とはいえ、あまりにも暗く、静かな場所になってしまった。
そこに一つの足音と一つの何かを引きずる音が第一工場に向かっていた。
「あの三人トリオがまた来たってのは本当？」
「ばい……」
アラネと出入り口を閉鎖していた敵の警備員一人を蜘蛛糸で拘束し
アラネによって引きずられている。
「アパートで寝たのが間違いだった、三人トリオに占領されるとは、
あたし…銑三に顔を合わせられない、だからこそ……」
アラネ、第一工場に到着。
「きっちり後始末しなきゃ」
中から人の声が聞こえる、屋根裏から忍び込むか、ここは真正面から攻めるか悩んでいると。
「お嬢さん、ここは君には向いてないよ、だから帰ろうね」
アラネの真後ろに出入り口の雑魚とは違う男が立っていた、すぐに距離をとろうと屋根に糸を飛ばしたが。
「まあまあ、入り口はここからどうぞ！」
男に捕まり、目の前の扉が中から開かれ、その中に投げられた。
アラネの体は第一工場の中に入り、自分を投げた男がゆっくりと入ったのち、その部下によって扉は堅く閉められた。
「ハクジさん！その子どうした…ああ！あんたは」
「あんたは鉄板」
「鉄板いうな！どいつもこいつも同じようなことといって、終いには怒るよ」
「アネキ、すでに怒ってます」
「じゃかましい！それでハクジさん、この子をどうするつもりなんですか？」

ハクジと言われる男は腰に拳銃を差し、扉の前を陣取り三人トリオに指示を出した。
「そのガキはてめーらと俺の顔に泥を塗った、やることは一つ……口封じだ」
中女はその命令を予想していたが、気が進まない顔をした。
「アネキ…」
「やるよ、あたしらはここでしか生きていけない」
三人トリオはそれぞれの武器を構え、アラネの周囲を歩き始めタイミングを見計らう、人質の社員はステージ近くに座らされ、それをハクジの手下数十人が武器を持ち見張っている、しかし、拳銃を持っているのはハクジだけで、残り手下は細いパイプやバットなどなど。
そして始まる、アラネVS三人トリオの戦いが。
「かかってきな、だてに朝の体操参加してないんだから」
アラネの言葉が開始の合図になり、かけ声と共にパイプを振り回しながら大男が突っ込んで来た。
「叩き潰してやる！」
アラネに向け振り下ろされたパイプは空振りしたが、その威力は今のアラネが受け止めたら鉄板になってしまう。
「蜘蛛女が！うろちょろするな！」
大男のパイプが何度もアラネを襲うが、アラネの人並み外れた跳躍により見事な回避の連続。
「じれったいね、小男！」
大量のネジが入った袋を肩から下げ、アラネに向けて山なりに放り投げた、その袋を中女の鉄板が切り、大量のネジがアラネと大男に降りかかった。
「痛い痛い、地味に痛い」
そんなアラネを狙って、大男の横振りが、それを回避しようと体を動かしたら。
アラネの横腹に散々と降るネジの中を、小男の放ったナットが命中、

次の瞬間。
「クリーン……ヒット！！」
大男のパイプがアラネに命中、ある程度パイプと一緒に振り回されてから地面に叩きつけるように振り下ろされた時、なんとか飛び降りることに成功した。
鈍い音と一緒に工場社員のざわめき、ハクジの部下のトリオに対しての応援が更に向上。
「ウウ……ッウ…」
地面に膝をつけ、必死に痛みを耐えるアラネにパイプを引きずり、音をたてながら近づいてくる大男。
「蜘蛛女…」
痛みで立ち上がれない、ゆっくりと両手で持ち上げられたパイプが作る影が自分を覆い隠し、巨体の大男の頭を越えた。
しかし、大男のパイプはなかなか振り下ろされないままどうするか悩んでいた。
「アネキ…」
「大男！コレを使いな」
中女が出したのはいつもの鉄板だったが、それをみた大男は容赦なくパイプを振り下ろされた。
覚悟を決めたアラネは体を丸めて歯を食いしばるように目を閉じたが、いっこうに何も起こらない、試しに目を開けると。
「あれ？何も見えない……イタ！頭うった…なんかここにきたことあるようなきが…まさか！」
アラネはパイプの筒の中にいれられた後、鉄板で穴に蓋をされて逃げられなくなった。
「勝ったぞ！トリオが勝った」
「なんだ、これで終わりか」
「ああ…お嬢ちゃんが負けた」
「もうおしまいだ、この工場はあいつらにとられるんだ」
勝ち誇った顔で手を挙げ勝利を体を使って表す大男にハクジが立ち

上がり近づく。
「大男…テメ―」
「ハクジさん、オレかちましたどうです…」
工場内の歓喜と絶望のざわめきは、ハクジの腰に収められていた拳銃が大男の顔に向けられたことにより、静まった。
「大男…俺は口封じをしろと言ったはずだ、捕まえろとは言ってない」
「ハクジさん！」
そこに中女が入ってくる、拳銃は大男の顔から狙いを中女に変えた。
「その子はまだ子供です、ちょっと痛い目にあえば何もしませんよ…それに、これ以上は私には出来ません、今更だと言われてもいい…でもそこまで非情にならないといけないんですか？」
「そうだな…少しやりすぎか、仕事はおしまいだ、さっさと逃げるぞ」
ハクジのまさかの行動に戸惑いながらも社員から離れ逃げようとしている。
ホッと安心した中女がアラネの入っているパイプを見てからハクジを見た瞬間、五回の銃声と共にパイプに五つの穴が。
「ハクジ…さん？」
ハクジは再び、先ほど使った拳銃を中女に向けた。
「けどもそれはそれ、これはこれ、俺はこういうことをする組織なんだ」
「あんたって人は！」
「そして…それなりの証拠も残さないとな」
ハクジに鉄板をぶつけようといつもより大きめの鉄板を片手に持って投げようと、体をひねるまでは良かった、鉄板を投げる前にハクジの撃った弾が中女のわき腹に命中、中途半端に投げられたら鉄板は地面をこすりながら進んだが、ハクジの足下までも届かなかった。
「いままでどうもご苦労様、あとは任せた、俺らの罪を背負ってお世話になりな」

撃ち尽くした拳銃に弾を込めながら、立ち尽くしている大男の横を通り抜けて、アラネが入っているパイプに装填した全ての弾丸をもう一度打ち込み、撤退の命令をだした。
「あらかたきれいにしてから帰るぞ、キレイに…」
中女は必死に傷口を服で抑えているが、なかなか止まらない、それを大男と小男がどうしたらいいか戸惑っている。
「了解です、ハクジさん！」
穴があきまくりの鉄パイプにうずくまる人、絶体絶命の時にこそ。
「ヒーローは現れる」
工場内の照明が一列一列消える、全ての照明が消えると強烈な爆音が。
「前が見えないぞ、灯りはないのか！」
そして、ステージ中心に円上の灯りと人影、黒光りしている肌に、でっぱり腹でハゲ、腕には豪華な金の輪が両手に身に付け火のついていない葉巻をくわえて、天井に指を差してポーズをとっている、それはこの灼熱工場を守る工場長。
「工場長！」
「銑三！」
「わし、華麗に参上」
次のポーズを取り直そうとしていたら、声を上げてバットを振り回している男が迫ってきたが、それを軽くバットごと殴り、折れ曲がったバットごとステージの下に転がっていった、胸ポケットからマイクを取り出した銑三は話した。
「工場社員とお嬢ちゃんよく聞け、君たちは今までどこで働いていた…毎日汗をかき必死に鉄を溶かして固めた漢達だろう…なのになんだこの冷め切った灼熱工場は！おまえたちはこんな不完全に燃えた悪に負けるのか！そんな風に叩き、延ばし、鍛えた覚えはないぞ！このワシは！」
スピーカーからは朝の音楽が流れ、忘れていた熱さ、リズム、雄叫び。

突如、社員が雄叫びをあげて、陣形をとりポーズをとり、踊り出した。
「な…なんなんだ…この工場は…」
「みな…準備はいいか？」
「ハイ！」
銑三はリモコンを取り出して音楽を止めた。
「照明なんか暗い暗い…音楽なんて小さい小さい…わしらの照明と音楽はこれだ」
銑三に当てられていた照明は消え、真っ暗になったステージ裏から熱気と炎の赤い色が銑三の背後から出てきた。
「工場の機械からでる音と熱には勝てん！行くぞ灼熱工場社員よ、不完全燃焼の生ぬるい悪を叩き直すのだ！」
それは鉄溶鉱炉がフル活動して、その炎と熱気だった。
見た目は地獄にみえて悪魔のように銑三が立っているが、社員にとっては救出の炎、守りの浄化の炎、炎の救世主。
その熱気に当てられた社員はみるみる悪魔の戦士のように立ち上がる、ここは灼熱工場、地獄の業火がぬるい心を燃やしつくす場所。

アラネVSトリオ（後書き）

更新が遅くなりましたが、これで復活します。
次回をお楽しみに。

灼熱魂（前書き）

今でも思う…先にこっちを投稿するべきだった！
どうするよ、気づかないで先に進んじゃう人がいるかもしれないよ
……仕方ないね。

灼熱魂

「なんなんだ…こいつら……」
「逃げろ！」
銑三の登場により、灼熱工場は活動を開始、爆発的な勢いでハクジの部下を倒している社員達。
「行け！灼熱工場の悪魔達！その拳で灼熱死させるのだ！」
銑三はステージから下りて、穴だらけのパイプの鉄板蓋を取ろうとしたら。
蓋の鉄板が真上に飛び、中からゆっくりと出てきたのは、紫色の着物に黒髪ロングの蜘蛛女、四門アラネである。
「お嬢ちゃん…大丈夫かい」
中から鉄板を蹴り上げて出てきたアラネは見たところ怪我はない。
「銑三…私…工場守れなかった…」
「そうだね、でも今、何をすべきかは、ワシ自ら語らずともお嬢ちゃんの心が一番分かっているだろ」
やることは決まっている。
「ハクジの奴を倒す！でもその前に」
アラネの目線の先は、あの三人トリオを見ていた。
「アネキ！死んじまうんですか！？アネキー！」
「慌てるな大男、まずは救急車だ」
「でも、俺ら携帯持ってないよ」
うずくまっている中女の周りで慌てている二人の中に割って入るアラネ。
「あんた達！ちょっとどきなさい」
「何する、この蜘蛛女！アネキに触るな、オイ！こら！人の話聞け！」
そんなことお構いなしに近づき話しかける。
「立てる？立てるなら力を貸して」

「敵だったあなたがなにいってんのよ」
「確かに敵だったけど、あの時、大男に叩き潰すように命令できたのにしなかった、そんな人が敵のはずない、だから…」
アラネは中女をしっかりと起こした。
「ハクジを倒すため力を貸して」
中女は少しうつむいて思った。
「こんな小さな子に勇気づけられるなんて、心が熱くなるじゃないか」
中女は立ち上がり慌てている兄弟に一声浴びせた。
「慌てるなこのバカ兄弟！いいかい、今から私達はハクジから離れてこっち側につく、そして…あたしを撃ったあいつをぶっ倒す！」
「オオー！！アネキ！」
「中女……」
そんな事をして、アラネに言われたとうり準備している銑三は。
「あの女、いいもん持ってるじゃねえか」
工場内の戦いは圧倒的な勢いで銑三の社員が押していた、我先にと工場から逃げ出すハクジの部下、そして、ハクジ自身もそこから逃げようとしていた。
「弾がほとんどない以上、戦えねえから出直すか」
「待ちなハクジ」
後数歩で工場の外に出て路上に止めているバイクに乗れるという場所で、振り返るハクジ。
「このまま帰れると思ってんの？」
そこに立っているのはあの穴だらけのパイプに入っていたはずの娘と、撃たれたはずの中女が片手に鉄板を持って立っていた。
「今更何のようだ？」
「分かってるでしょ、お返しよ！」
中女の渾身の水平投げがハクジに飛んでゆくが、あっさりと回避された。
「お返しどうも、なら全返しだ」

ハクジは残りの弾を中女に向けて撃ったが、どこから飛んできたのか中女の目の前に鉄板が複数飛んできて弾丸を防いだ。
「お嬢ちゃん、これぐらいでいいかい？」
「さすが工場のヒーロー、タイミングピッタシ、中女、バンバン投げちゃって」
「そのつもり！くらえハクジ！」
地面に刺さっている鉄板を引っこ抜いてはハクジに投げ、引っこ抜いては投げの連続。
間髪入れずに投げられる鉄板から逃げようと、走り出すハクジの足を狙う小さな男。
「逃がすか」
弾かれたネジはハクジの両足に命中、体が前に倒れそうになったが、バイクのシートに倒れた。
「よし、これで逃げれる……」
既にさしている鍵をひねりエンジンをかけようとしたが。
「ハクジ！アネキに謝れ」
振り向くと、大男が何かを投げた後のように立っているが、目の前には何も飛んできていない。
「いったい何を投げて……そうか！」
ハクジはとっさの判断で上を向いた、そこにはいつも大男が持っていたあの子供がスッポリ入る太さのパイプがハクジ向けて落ちてきている。
このまま避けてしまうと逃走用のバイクが壊される、それなら。
「俺をなめるな！」
数メートルから落ちてきた鉄パイプを素手で受け止めたハクジ。
「ハハハ！どうだこれで俺の勝ち！見てろよすぐに仕返しにきてやる…」
「行け！お嬢ちゃん」
「蜘蛛女！」
ハクジの持っているパイプの筒の先から見た物は、空高く飛び上が

り、こっちに両足を出して突っ込んでくる子供、ハクジの持っているパイプの太さは先ほどの戦闘で使っていたものと同じ太さ、つまり。
「くらえ！この不燃物」
筒の中を通り抜けて、そこから覗いていたハクジの顔面に強烈な蹴りが当たる。
「ガッ！」
ハクジはアラネの蹴りでのけぞってそのままバイクのシートのおかげで、地面に倒れずにすんだが、まるでブリッジをしているような状態になってしまった。
「無駄に痛そう」
ハクジの手から離されたパイプはアラネを入れたまま地面に落ちて、少し転がってからアラネは出てきた。
「大成功、即興で作った作戦がここまで成功するなんて」
「お嬢ちゃん、よくやった」
しかし、ハクジは起き上がり、すぐさまバイクにまたがり、どこかに逃げてしまった。
「しまった！」
アラネは蜘蛛糸をとばしたがとどかない。
「逃がすか」
「やめるんだ、お嬢ちゃん」「でも、このまま野放しには…」
「今日、あんな目に会ったからといって、すぐに戻ってこないよ、それにこれ以上は無理できない」
ハクジが逃げるのを見ていた中女だったが、ムチャな鉄板投げを繰り返していたため倒れていた。
「中女…イッ！」
「それにお嬢ちゃんも大男の攻撃が当たってるんだから、もう動かなくていいよ」
「銑三…こんどあいつが来たときは絶対に逃がしません」
「それでこそお嬢ちゃんだ、みんな！捕まえた不燃物（ハクジの部

下）はすぐに収集車（警察）を呼んで、回収（連行）してもらえ、その後は掃除だ」
「ハイ！工場長」
その後、銑三はトリオに近寄った。
「さて、お前たちはどうする？」
「私達に帰る場所、仕事もありません、このまま収集車に乗るつもりです」
「アネキ…俺らそうなるんすね」
「仕方ないよ、もしかしたら離れ離れになるかもしれないけど、私達はトリオだよ」
「アネキ！！」
そんな、別れ話を聞いて、銑三は何も言わず、拳を中女の目の前に出した。
「採用試験だ、ワシはそれしか言わない、さあ…どうする？」
アラネは気づいている、あの夜、始めて銑三に会って、夜勤警備員に採用されたあの試験、だが。
「こ…こう？」
殴るまでは合っていたが、あまりにも弱い拳に呆れた銑三。
「不採用、残念だったね、三人仲良く箱に詰め込まれな」
「ちょっと待って、二人は見逃して…」
しかし、全く話を聞いてくれない銑三に対して、イラついてきた中女は自力で立ち上がり銑三を殴りに走った。
「話を聞け！」
「ならば聞こう！」
「銑三、それは！」
拳と拳がぶつかり合い、中女の熱さが銑三に響き渡る。
「いいねいいね、これぐらいじゃないとこの工場じゃ働けない、よし！採用！」
「……銑三…瀕死の人に対抗して、元気一杯の拳は……」
銑三が感動して目をつぶっていた目の前では数メートル飛ばされた

中女がいた。
「アネキ！！俺らのためにこんな姿になってまで」
「救急車！早く救急車」
無事に救急車は到着、中女を運び移動した。
「それでは、残った男は掃除に行け」
「えっ、でも…」
「何を言っている…お前たちはもう灼熱工場の社員だ」
急いで掃除に向かわされた大男と小男、疲れきったアラネはあの時気絶したベンチで横になっている。
「お嬢ちゃんは朝まで休むといい、ワシは残った仕事がある」
「あれ？工場長、またどこかにいってしまうんですか？」
「ここに寄ったのは仕事の途中、偶然寄っただけで、まだ終わっていないんだ、だが大丈夫すぐに戻る……」
銑三はそのまま車に乗り込みどこかに出発した。
……ハクジの隠れビル
裸電球一個だけがハクジの部屋を照らし、そこでハクジは怒りにまかせて物を壊している。
「なぜだ！なぜあんな工場に負けたんだ」
机の物をどけて、豪快に机を蹴り上げて、隠していた木箱を取り出した。
「あんな工場…壊してやる…とことん…このダイナマイトで」
木箱は全部で七個その中に二十四本入っている。
「手順なんかどうでもいい、すぐに壊しに行ってやる覚悟しておけ、ん？だれだ」
誰かが部屋の扉を叩いている。
「仲間の一部が帰ってきたのか、よし入れ、お前たちも手伝ってあの工場を潰しに……」
「あーあ、不燃物が頭を熱くしても塵にもならんぞ」
入ってきたのは火のついた葉巻をくわえ、顔がうっすらと見えるがそれ以外は見えない、しかし、忘れはしないこの声。

「なんでここにいる…いや、そんなことはどうでもいい」
ハクジは懐にしまっていたライターを取り出し、手に持っていたダイナマイトに火をつけた。
「貴様さえ倒せばあの工場は俺様の思いのままだ、爆発してしまえ！」
葉巻の男は深く煙を吸い込み、吐き出す、その煙は無尽蔵に出てくる。
「それは…熱いのか？」
「くらえ！」
投げられたダイナマイトは葉巻の男の目の前で爆発、ハクジの部屋の窓は吹き飛び、ハクジは木箱と一緒に倒した机に隠れた。
「ハハハ！これであいつと工場もこわして」
「ぬるいな」
隠れていた机からゆっくりと顔をだすと、男は片手を前に出しその手から炎が出ていた。
「なんなんだお前は…」
「不燃物を可燃物にするためにきたヒーローとでも言っておこうか、そのダイナマイトごと」
更に片手の炎が燃え上がる。
「吹き飛べ…」
男の拳から炎が放たれ、ハクジを襲う、その火が木箱に燃え移り、木箱のダイナマイトに……。
「お前はいったい！何者なんだ！」
ハクジのいた隠れビルはダイナマイトの爆発でハクジごと吹き飛んだが。
「葉巻一本、燃え尽きてしまった、勿体無いことをした」
その張本人は救急車と消防車を呼んだ後に平然と車を停めさせた場所に徒歩でむかっていた。
その男に一台の車が近づいてくる、後部座席の窓が開けられた。
「あそこまで派手にするとは思ってもみなかった…葉巻いるか？い

つもよりいいのだ」
「いや、いらない、まだ熱が残っている」
「そうか、なら久しぶりに吸ってみるかな」
「なんでついて来た？」
「ああ、ゴホゴホ、助っ人が必要かと思ったが、相手は一人だったから、ここから降りずに見守ったんだ、ゴホゴホ、情報が役に立って良かった、ゴホゴホ」
窓から葉巻を投げ捨てようとしたら、勿体無いと言い手を出して取った。
「それじゃあ、今度はこっちの役にたってくれよ」
「任せておけ、来週の１９時１０分、昔と同じ用にするんだろ」
相手は何も言わずに窓を閉め、走り去った。
「あいつらもおとなしくしていれば良かったものの」
男は火のついている葉巻をくわえ、自分の乗ってきた車に乗り込んだ。
「Ｎｏ．３仕事は終わりましたか？」
「ああ、兼二の言った通りだ、それにワシは今はＮｏ．３ではない」
車に置いといた金の腕輪をつけなおし葉巻の煙を吸い込み、吐き出しながら言った。
「灼熱工場の工場長…銑三だ」
その日の朝、あの出来事はニュースにはなったが大きくは取り上げられなかった。

灼熱魂（後書き）

これを読んでくれた皆さまえ宣伝です。
よければニコ動に投稿中の実況プレイも見てください。
活動の欄に書いときます。

W団ショートコメディ（前書き）

このお話は、今までにW団の日常でおきた少しでも笑えたらいいと作ってみたショートコメディである！

W団ショートコメディ

０１こういう日もある。
正義の見方と生死を賭けた勝負をする日のこと。
「総統、水犬、アラネちゃん、そろそろ出ないと間に合いませんよ」
アライドが総統をよびにいったら、二人と一匹でテレビの再放送ドラマを見ていた。
「グスン…ああ…アライド君…今日は駄目…涙で前が見えない…ティッシュはどこ」
「ここです…総統…なんで残ったんでしょうね」
「部下の代わりに自分が残って、若い人に未来を託したんだろう、カッコイイよ」
「総統…勝負の方はどうするんですか？」
アライドが遅刻すると何度もいうので、仕方なく用意するアラネ。
「そうだね、約束は守らないとね、こっちから呼び出したんだし」
総統達は玄関前でいつもの気合いを入れる掛け声をするつもりだったが。
「よし！みんな今日はさっさと負けて、レンタルして、始めっからみんなで観よう」
「オオー！」
「総統！打倒正義はどうしたんですか」
そして、いつも道理負けたW団だったが、その夜の涙は悔しさからだったが、レンタルされていて見れなかった悔し涙なのだ。
０２ハンモック
アパートの庭は住居者なら誰でも使っていいことになっていて、アラネは庭に植えてある木に自家製の蜘蛛糸ハンモックで寝ていることがある。
「でも、勝手に使わないで下さい、あれは私だから使えるものであって、普通の人が使うと…」

庭からアライドの悲鳴が。
「絡まって動けなくなります」
「はやく助けて」
０３水筒
普段水犬は水筒の中で寝て夜を過ごしている。
「総統、お茶を凍らせといて下さい、明日は遠出するので」
エンクランスは仲間集めのために、時折、遠出する事がある。
「任せといて」
と総統は二つの水筒を冷凍庫に閉まった。
翌日……
「総統！水犬がどこにもいません！」
「水犬、どこいったの！水犬ー！」
そして、外出中のエンクランスの方では。
「水犬…割った方が早く溶けると思うけど…やってみる？」
水筒から出てきた筒状の形で凍った水犬は全力で嫌がっていたと、
後程エンクランスから教えてもらった総統だった。
０４電車で忘れ物
アラネが仲間になって、アパートに帰るとき。
電車に乗ってから数分後…
「…で、特徴とかはないんですか？」
「はい…だいたいの特徴は…」
「んんん…この夏祭りの季節にそれは難しいかもしれませんが捜してみましょう」
数分後……
「すみません、この子ですか？」
駅員に連れてこられた子供は紫色の着物に黒髪ロングの子で、アラネだった。
「あ！その子です」
別れた原因は、乗車中にアラネが隅っこで隠れて、降りる駅で一緒に降りなかったからしい。

０５回覧板
毎週日曜日は決闘の日、今日もまた悪の組織が動き出す。
「今日こそ正義の見方をたおすぞ」
「オオー！！」
「我々W団、出撃！」
いつものメンバーで移動中……
いつもの公園に到着。
「正義の見方…今日こそ貴様を亡き者にしてくれる、行け水犬」
水犬が前に出て、正義と睨み合う、そして…
「頑張ってー」
「負けるな水犬、今度こそ勝つんだ！」
町内の人からW団にエールが投げられる。
「…戦いにくい」
林の中で遠くから見ている中之島レナは考えていた。
「どうしこうなった？」
これは、中之島レナが正義の見方が有名になるため、回覧板に貼った告知が空振りして、W団の応援団が出来てしまった。
０６手紙
毎月第一月曜日にW団宛てに届けられる手紙がある。
「あ、今日も来た」
それは、世界中を飛び回っているハトからの絵手紙で、行く先々を絵にして送ってくる。
「ハトさんは今どこを飛んでいるんでしょう、総統はどこだと思います？」
テーブルの中心に今まで届いた手紙を置いて、今度はどこの絵手紙がくるのかを予想している。
「コレをみるかぎりアジアはあらかた飛び終わってるから…オーストラリアとか、南側に行くんじゃない？」
「そうかもしれませんね」
そんな話を聞いて、ふと、思いついたかのように総統が。

「今から寒くなるからツバメのように南に飛んでいくみたいだね」
「そうですね」
そして、ハトはオーストラリアを目指して飛んでいる最中だが。
「ツバメに負けてたまるか！」
オーストラリアまでツバメと競争中だった。
「日本からオーストラリアまで遠いいよ！」
ここで一言、総統の住んでいる町は空想ですが、総統達の活動している世界になると現実の世界になります、日本とかＵＳＡやイタリアとか、ですが基本は空想です、フィクションです。
０７ポスター
平鳥鳩和は今日もポスターを作っている。
「…これでよし、どこに貼ろうか……」
そして、今日もポスターを見て配達をしようと、荷物を持ち運びながら総統は思う。
「ハトさんに会ってから人物画が増えてる…」
平鳥は気づいていないがハトの人物画が半分を占めてきた。
０８人それぞれ
今日もだめ男こと松木は、公園で酒（一寸の時間）を飲む、完。
「ちょっと待て総統！みじかすぎ…」
０９バイト
正義の見方はバイトをしている。
本業は悪を倒すことででる、正義貢献により正義協会からその規模の大きさによって、金額が決定、毎月末に送られ、それと別に移動費、乗り物、武器や服なども支給される。
今までにでた最高金額は正義アギドの７１２０億ドルのアメリカでおこしたアスロン協定撲滅が有名である、そして、正義は２３２１円である、もちろんそれだけである。
だが、Ｗ団の仲間集めが本格的に進行することで、金額は上がってきている。
頑張って仲間を集めて少しでも生活を楽にしてあげよう。

「それで、今月はいくらでした？」
「二千にカットされてた」
「今月更新してなかったから」
おしまい。

W団ショートコメディ（後書き）

次回からはちゃんと本編を書きます。

ザ、輪（前書き）

今度こそしっかり最後まで走っていきたいと思っていますので、どうか見守って下さい。
実況プレイと小説の方を。
それでは新しい話しデジデータをどうぞ。（・∀・）つ
注意もしかするとグロ注意かもしれない。
顔文字頑張ってみた。

ザ、輪

我等W団一同だが総統は町内会の用事でいないが、映画館に映画を見に行っていた、最近話題のホラー映画。
『ザ・輪』
を見に行っていた。
この話は主人公の友達が興味本位で粗大ゴミから拾ってきたブラウン管テレビとビデオを見て、友達がそのビデオを見た一週間後に顔のパーツ、両目両耳鼻口が塞がれたというより消えたまるで顔なしの状態で、アパートの風呂場で亡くなっていた。
その事を深夜に知った主人公は既に夕飯にカレーを食べながらなんとなく見てしまっていた。
といったところから始まり、その呪われたビデオをみた主人公も呪われてしまいそれを解くというホラー映画。
の帰りからW団のホラーな物語が始まる。
「怖かったですね」
「今時ブラウン管テレビもどうかと思うけど、何よりテレビから出てくる……、誰だっけ」
「紀子ですよエンクランスさん」
「家にテレビなくてよかったですね、もうすぐでアパートにつきますよ」
最近は日も暮れるのが早くなって、帰った時には夕暮れ時になっていた。
そして、扉の鍵を開けようとエンクランスが鍵を差し込むと。
「あれ？開いてる…鍵は閉めたはず……」
「じゃあ開けたまま出たとか」
「エンクランスさんがそんなミスするはずがない」
「でも総統は夜遅くに帰ってくるはず……」
「じゃあなんで開いてるの……」一同全員

すると、ドアの向こう側から物音がする。
ならば、泥棒を捕まえるため一致団結して捕らえようとドアノブを握り、タイミングを合わせて突撃を試みることになった。
「……せーの」
勢い任せで突撃。
「泥棒！そこを動くな！」
「えっ！何事！？」
真っ暗な部屋にいる犯人？を捕まえるため全員で上から押さえ込む。
「捕まえた！覚悟しろ」
「ちょっと待って、何事？みんなどうしだの」
「みんなストップ、押さえ込むの中止」
エンクランスの声で停止した後、ゆっくりと電機を点けると、押さえ込まれていたのは総統だった。
「ビックリさせようと暗い部屋で待ってた結果がこれだよ」
「それで総統……なんで帰ってるんですか？用事は？」
食卓には大きなプレゼント箱が置いてあった。
「すぐに町内会会議に戻るよ、その前にこれを貰ってきた」
「何々？それは」
総統がプレゼント箱の紐を解いた、中から出てきた物は。
「どうこれ、ちょっと形が古いかもしれないけど我が組織にも新聞以外にこういった情報を手に入れる…」それはパソコンでブラウン管テレビのような奥行きがある形が特徴的なパソコン一式が入っていた。
総統は熱心にパソコンの説明をしているが、他のメンバーは。
「どう思う……」
「まあパソコンなんだし何かの景品とか」
「総統、これ景品ですか？」
「ん？違うよ、粗大ゴミから拾ってきた」
４人と一匹が合図もしていないのに後方に一歩下がり集まる。
「嘘…だよね」

「いや、現実にこうなってるわけだし」
４人と一匹が映画を見に行ってるのを知っているが、何を見てきたのは知らない総統。
「じゃあご飯は作っておいたから、エンクランスよかったらパソコンのセッティングよろしくね、それじゃあ」
会議に出て行った総統、残されたメンバーは動かない事を祈りながら、食卓の中心に置いてから食事をする事に決定した。
「よりによってカレー……」
「動きませんように動きませんように」
「さすがに動かないよ、コンセント刺してないし」
「クゥー（水筒に隠れてれば見ずにすむ）」
「サッサと庭に逃げよ」
「いや、なんで元お化けが恐がってんの、水犬にいたっては早いよ逃げんの！」

といった感じに総統が帰ってくる前にいちようセッティングしといたエンクランスだが、その日は絶対に点けないことに決定、コンセントも刺していない状態で放置した。
……深夜
起きてしまったのは…
「こういう日に限って起きてしまう」
アライド。
「あるよね、こういう日に限ってトイレって…誰に話してるんだろ」
数分後……
トイレから出たアライドはすぐに布団の中に潜ろうと早歩きで寝室に向かったが。
灯りがない中歩いていたアライドの足に何かが当たり、蹴飛ばしてしまった、アライドは手探りで探し、机から落ちてしまっていたマウスを見つけた。
「誰かが踏んだらどうするんだ」

もうすっかり暗闇に目が慣れてしまい食卓として使っているテーブルに置いてあるパソコンの隣りにマウスを置いた。
「これでよし……」
すると…。
まるでテレビの電源が点いたかのような音と共にパソコンの画面がつき、飲み込まれそうな真っ黒の映像だけが流れていた。
認めたくないアライド、しかし見てしまう、真っ黒な画面の中に確かにいる何かを、ゆっくりと小さな何かが、大きくなっているのかはたまたこちらに近づいているのか、どちらにしてもすぐに消さないと。
アライドは電源ボタンを長押ししたが消えない、画面の方も押したが消えない、ならばコンセント…、刺さってない……。
「そうとう……」
なにも出来ないまま画面を凝視するアライドが最後に見た物は。
人の形をしていて、死人のような色白の両手を使って必死に画面から出ようと画面を叩き、髪は顔を覆い尽くされ…。
違う、確かに覆っていたが。
ない……
顔がない……
顔のパーツがない……
叩いている時になびく髪のさきは両目両耳口鼻がない顔がこちらにこようと必死に何かを訴えながら画面を叩いていた。
「総統ー!!」
あまりの恐怖に叫んでしまったアライド、その声で起きた総統は自作のタオルで作ったパジャマのまま出てきた。
「どうした!アライド君」
電機を点けて、あたりを見渡すとそこにアライドはいなかった。
「アライド君?」
声は聞こえるのにどこにもいないアライド、いた場所は。
「今日は食卓の下で寝るの?」

「総統！！紀子さんです！紀子さん！出てきたんですよパソコンから」
総統はコンセントの刺さってないパソコンを覗いたが。
「アライド君、それは夢だよ恐い映画見た日はよくあることだよ」
「そんなにないと思いますが」
「もう遅いから布団で寝よう、それは朝に聞くから」
「分かりました……」
しぶしぶ布団で寝たアライドだったが、カウントダウンは始まっていた。
残り7日。

残り三人（前書き）

粗大ゴミから拾ってきたパソコンから出てきた紀子さん仮、アライドは呪われたのか、そして今夜さらなる犠牲者が

残り三人

アライドが紀子が出たと騒いだその次の夜……
「キャインキャイン！」
の声と共に食卓からいろんな物が落ちた音が。
「水犬どうした！」
しかしそこには誰もいなかったが、冷蔵庫が半開きになっていた、開けてみると。
「冷蔵庫の中で寝るの？水筒をわざわざ移動させて」
冷蔵庫の中で震えながら水筒の中に隠れていた水犬がいた、今にも倒れそうな勢いだ。
「じゃあお休み」
総統は冷蔵庫を閉め食卓から落ちた資料や箸立てをなおしてから布団で寝ようとしたが、パソコンの電源がついている気がして、画面を覗き込んだ。
「点いてないか……」
電気を消して布団で寝る総統、しかし、パソコンの中では着実にあることが進行していた。
後6日……
その日の朝……
「水犬、昨夜に何があったんだい？」
ここから水犬が普通に喋りますが、実際はワンなどのこえで総統達に話しています。
「昨夜、ちょっと散歩してて、アパートに帰ってから食卓にペットボトルがあって、その中に残っていた天然水を飲もうと、食卓に飛び乗ってフタを取って飲んでいたら……ん？誰か起きてる？トイレかな？……と思い、食卓からジャンプして脅かそうとパソコンの置いてある横にスタンバイしていたら、突然パソコンに電源が入り、画面の向こう側から必死に叩く女性の人が！！、キャインキャイン

（紀子さんだ！）、と叫びながら、慌てて食卓から台所にある水筒を取り、冷蔵庫に逃げ込んだんです」
「なるほど……」
たった一人理解しているアラネ、それ以外はただ黙って椅子に座っていた。
「全然分からない、アラネちゃん翻訳」
カクカクシカジカ……
「なるほど、そんなことが」
「やっぱりおかしいですよこのパソコン、すぐに捨てましょう」
「でも次の回収は1ヶ月後なんだよ」
アライドの訴えは通らなかった。
「それより、パソコンにスピーカー付けるの手伝って」
「総統、捨てるつもりサラサラないですね」
エンクランスと総統はパソコンにスピーカーを付けようとしている最中に、サリィのとある発言で、その場の空気が一変する。
「紀子さんか……もしそうなら…アライドと水犬は一週間後に死んじゃうの？」
アライドと水犬は凍りつく、映画を見た二人も遅れてことの重大さを思い出し、自分の発言を振り返ったサリィ自身も動作を止める。
「もしそうなら…後6日…ですよね？」
総統はカレンダーの一週間後に赤丸を書いて、次の日に青丸を。
「後6日か、その日は見方と闘うことになってるよ、キャンセルしとく？」
「そんなこと言ってる場合ですか！本当に呪われていたら……」
アパートの風呂場で死んでいるアライドの次に水犬。
「嫌だ！」
アライドは叫びに似た一言、水犬は庭に出て遠吠えをした。
「まあまあ、二人が見たのは顔のない何かで、顔のパーツが増えてる訳じゃないんでしょ？」
「そういえばそうだ」

冷静になる二人。
「だったら何かのバグでそんなありもしないことが、起きているのかもしれないよ」
「総統、それでは今夜に使えそうなアプリを入れときますね」
「エンクランスお願いね、ホラ2人とも食事の途中だよ、サッサと終わらせちゃって」
腑に落ちない二人だが、これ以上悩まないように、忘れて過ごすことにした。
その日の夜…
予想外にアプリを取り入れるのに時間を費やしてしまい、真夜中になってしまった。
「やはり、壊れているから取り込みに時間が…まあこれで、曲や録音も出来るようになった、総統はこれで何するつもりなんだろうか…よし、今日はもう寝よう」
台所で歯を磨きながら寝る準備をするエンクランス、電機を消して寝室に入ろうとしたその時、パソコンのスピーカーからテレビの砂嵐の音が流れ出した。
「ん？消し忘れか？」
再びパソコンの目の前に立ち、アライドと水犬が見たという物に遭遇する。
「フ、これが紀子さん、ただの画面に映し出された映像じゃないか、これで何か変わってたらおどろ……く…」
紀子さんは垂れ下がった髪が顔を隠して見えないようにしているが、体が大きく揺れる度に綺麗な黒髪がなびく、砂嵐の音は徐々に大きくなり近づく、アライドの話では顔がないと言っていたが、エンクランスが見た物は。
「口がある……」
独り言をしながらこちら側に近づく紀子、画面いっぱいに近づいた紀子の口が動き砂嵐の音と共にスピーカーから流れた。
「ザザザハザザザザザザザザザザザザザカザセザザザザザザおザザザ

父ザザザサンザザナザザザンデザザザ」
「これは…」
エンクランスはよく聞こうとスピーカーを手で持ち耳に当てようとしたら、急に紀子の姿が消えた。
「あれ、でも微かにまだ聞こえる」
じっくりと耳を当てながら画面を見ていたが、なにもおきない、耳から離そうとしたその時。
「ナンデケシタ…」
ボソッとスピーカーから聞こえた後、間髪入れずに紀子が現れて、こちら側にこようとスピーカーを通して紀子の叫びとドアを叩くような音が流れた。
「ナンデケシタナンデケシタナンデケシタナンデケシタ……」
「これは…いったい……」
スピーカーを手から離してしまったエンクランス、スピーカーが床に落ちきった途端、パソコンの電源は切れ夜の静寂が戻ってきた、もう音は聞こえない。
「アライドと水犬が見たのは顔なしの紀子さん、私が見たのは口ありの紀子さん、呪いが進行しているのか……、もしこれが本当に呪われたパソコンなら、私含めて残り5日、持ち主を探した方がいいかもしれないな」
残り5日……
「と、言った感じなことが昨夜ありました」
「嫌だ！」
アライドは叫びに似た一言、水犬は庭に出て遠吠えをした。
「私も風呂場では嫌だ！」
三人で朝の庭で大声を出している。
「そうそう、明日になるんだけどインターネット引くから」
「それじゃあ、本当にパソコンが使えるようになるんですね」
「簡単にだけどね」
呑気に話している総統を差し置いて、三人で呪いのパソコンの持ち

主を捜すことに。
「いいか！これは生死がかかっている絶対に持ち主を探し出すんだ」
「我等W団！」
「そこ、勝手にワシを置いて名のらない、それで今日マイクを買いに電気店に行くんだけどみんなはどう？」
もちろんエンクランスと総統で別れました。
電気店組
電気店についた総統達、目的の品を探していたら、テレビのニュースキャスターが昨日の昼におきた爆破事件を読み上げていた。
「お昼のニュースです、先日、銑三さんの工場、灼熱工場から謎の爆発がおこりましたが、奇跡的に死者はいませんでした、この事件に似た事件が数年前、同じ場所でおき、警察は同一犯のテロリスト、パイプではないかと捜査した結果、一人の男が発見され、すぐさま病院に運ばれましたが移動中に息を引き取りました、警察の調査の結果、男の名前はランバート、テロリストパイプの残党という事が判明し、その生き残りがまだ逃走中とのことです。次のニュースです……」
それを聞いていたアラネは走り出して、レジで買い物を済ませようとしていた総統の頭を飛び越えて。
「総統、少し帰りが遅くなります、夕飯はさきに食べてて下さい」
急いで灼熱工場に向かった。
「どうしたんだろう」
総統とサリィは訳も分からず、先にアパートに帰ってから、買ったマイクで正義の見方宛てに挑戦状を作り始めた。
「今まで電話で話してたからこうやって録音して、トーンを下げれば、悪の組織みたいな雰囲気がでる、よし、早速正義の見方宛てに挑戦状を送ってやろう、ＣＤに保存してポストに入れておこう（その内容はあとがきで）」
総統は出来あがった挑戦状ＣＤを封筒の中に入れて、マイクを差したまま寝る事にした。

捜索組
「よーし、みんなこの周辺一帯の粗大ごみの回収所を捜索する、今日はそれだけでいいその後に電気製品系統の回収率を確認する、あとはその日の当番の人に聞き来む事いいね？」
「了解です、エンクランスさん」
……調査中。
……調査中。
「調査の結果…」
「そんなばかな！」
「ここら周辺の電気製品の回収率は一個もないようです、総統が持って帰ったから0個になったとしても、当番の人に聞いてみたら」
「総統さんはたしかにここの当番だったけど、その時にはもう持っていたよ」
「じゃあいったいどこの粗大ゴミからもってきたんだ…」
「食事中ぐらい悩むのやめたら？」
「そうします」
アラネは夕飯になっても帰って来ず、先に夕飯を食べる事に、結局、12時過ぎても帰ってこなかったので、そのまま全員寝る事に。
アラネが帰ってきたのは真夜中の2時、そして、パソコンの呪いが動き始める。

残り三人（後書き）

「あーあー！んんん！？あーあー？あ→あ←、これでいいかな、ふふふこの声が聞こえるかな？」

「正義！助けて！」

「そうだ、人質のサリィだ、いいか人質がおしくば日曜の９時にいつもの公園で、それでは、ふはははは！」

……

「どうですか総統？」

「名演技だったよサリィちゃん、今度はカメラでもつけて本格的にやってみようか」

「楽しみ！」

呪いの進行（前書き）

あなたの家にブラウン管のパソコン残ってますか？もしかするとそこから人の声が聞こえてくるかも……。

呪いの進行

総統の買い物中に抜け出したアラネ、電気店のテレビで見たニュースで昨日の夕方に工場が爆発したことを知り、糸を使いながら屋根を走り最短距離で灼熱工場に向かっていた。
灼熱工場爆発場所……
銑三の指示で社員は爆発による被害と破片の回収をして、銑三は警察の事情聴取を受けていた。
「オーイ、そっちはどうだい？」
「駄目だ動きそうにない、工場一つ壊す程の爆発で良かった」
「怪我人もいなかったもんな、宴会を早めにしてて良かったよ」
「それでも向かい側のホテルは窓ガラスが壊れて張り替えるらしいよ」
「そこ！喋ってないで分別する、工場長が帰ってくる前に解体しておくんだ」
「ハーイ鉄板！！」
「鉄板言うな！」
その間、仕切るように命じられたら中女、破壊されたのは主力にしていた第三火炎工場、これの停止は灼熱工場にとって大きな損害だ、1日経っているが、まだ鉄に熱がこもり秋だというのにそこだけ夏のように蒸し暑かった、それだけ大量の鉄が散らばったが銑三によると。
「それは心配ないよ、買い手の一つが受け持ってくれるらしい」
とのこと、確かに損害は大きい、それを一社が全部受け持つことにどこか疑いを持っている中女。
「まあ深く考えないでおこう」
そして、解体作業を開始して正午を過ぎた頃。
お昼休みでおにぎり片手に食事中の中女の所に忘れられないあの声が。

「鉄板ーー！！」
アラネが向かい側のホテルの屋上から工場の塀を軽く越えて、中女向けて跳んできた。
「馬鹿！いつも道理に跳んだら」
だんだん落ちてくるアラネはいつも火炎工場の屋根に着地している。
「あのニュース、本当だったんだ……着地する屋根がない！？」
中女はアラネを受け止めようと落下ポイントに走る。
「蜘蛛女！」
「鉄板！」
中女はアラネをなんとか受け止めたが何度か後ろに転がった。
……数分後
「なるほど、そんなことが」
両手におにぎりを持ち両方食べながら中女の話を聞いていた。
「ねぇ、なんであんたは平然と私のぶんを食べてるの？」
おにぎりを６つ置いてからお茶を取りに行ってる間に４つ食べられていた。
「えっ！？１：５じゃないの？」
「なんでそうなる！」
「それじゃあ食べた分だけ手伝うよ」
しぶしぶ立ち上がり持ってきた冷たいお茶を飲む。
「そうしてくれると助かる、あんたの力は役に立つから」
「銑三はいつ頃帰ってくるの？」
「分からない…事情聴取の後に買い手の企業に話をするとかで……」
すると、昼休み終了のサイレンが鳴る。
「それじゃあ作業に戻りますか」
その後の作業は夜遅くまで続き、銑三が帰ってきたら宴会になり、アパートに帰るのが遅くなった。
深夜二時アパートの庭……
宴会の途中で抜けたアラネはそのまま庭の手作りハンモックで寝ようとしていたが。

「枯れ葉が邪魔！墜ちてくるな」
ハンモックにくっつく枯れ葉を手で取り除いていた、しかし、取り除いても取り除いてもその倍の量で結んでいる二つの木から枯れ葉が堕ちる。
結果……
「ああ！あたしの寝床が……」
蜘蛛糸ハンモック重さと雑な取り除きにより破れる。
寝床を無くしたアラネ、あることを考える。
「もう一度作る？でも工場の手伝いでスッカラカン、力が出ない……布団で寝るか」
アラネは窓からアパートに入り、総統達が寝ている隣を通り抜け、寝室にある襖の物を全部だしてから布団一枚取って、寝ようと襖の上段に飛び乗った、その出しているさいに、総統の布団が二段から5段になっているとこにアラネは気づいていない。
「苦しい…苦しい……あ！？来るな……こないで」
「総統どんな夢見てんの？まさか幽霊に追われてる夢とか」
爆笑を声に出さないよう堪えるアラネ。
「来ないで……来ないでジャクソン……」
「ジャクソンて誰よ！？」
そんな驚きの寝言を聞き流して、ようやく寝る準備が出来た。
「これでよし、そうだ……せっかく布団で寝るんだったら、毛布を探そう、たしかさっき出した物の中にあったはず」
アラネは出しっぱなしの布団から毛布を探り当て、襖に投げ込んだ。
プツン……
「ん？何？さっきの音は……襖から…総統の寝言……いや、台所からだ」
アラネが庭から台所に入った時、台所にはアラネの入ってきた窓からの月明かりしかなかった、だが、今はもう一つの明かりがあった。
食卓に置いてあるパソコンの画面、それが点いていたのだ。
「あれ？入ってきた時は点いてなかったのに…こ……これは」

アラネが画面の目の前に立ったときある物に気づいた、アラネはそれを手にとったそして。
「あーあー、あああ？あ→あ←、なるほどこれがマイクなのね」
総統が買ってきたマイクで遊びだした。
「そういえば今、紀子さんで大変なことになってたんだっけ」
アラネは閃いたかのようにふざけ大半であることを試みた。
「こちら四門アラネ、こちら四門アラネ、紀子さん聞こえますか？」
画面とスピーカーからなんの反応もない。
「なーんだ、つまんない」
「ザザザノザザリコザザザシザザザモンザザ」
アラネはマイクを手放して、真後ろの壁に飛びついた。
「えっ！？喋った！？紀子さんが」
画面にはなにも映っていない、真っ黒な背景だけ、しかし、スピーカーからは砂嵐と一緒に声が入っている。
「ザザヤザザットザザコザザウ〝エザザガザザギコザザザウ〝ザルザザ」
アラネは砂嵐から聞き取れる音を頼りにオウム返しのように口に出す。
「やっと…声が聞こえる？まさかあたしの声……」
更に続く。
「ザザカラザザザザダザザモトザザザモドルザザザザアザザザトザザモウザザザスザザコシザザ」
「体が元に戻る……後少し…」
アラネは総統がつけているカレンダーの日付に新たにエンクランスのマークがつけられていることに気づく。
「ザザノリコザザザワタシザザザハザザノリコザザザモウザザスグザザザアウ〝ルザザザアウ〝ルザザトウザン……」
スピーカーからの音が弱まり、とうとう聞こえなくなった。
再び動き出すかそのままここを動かずに一夜を過ごすか悩むアラネだったが、頭の中では布団で寝たい一心である

「もういいや、このまま壁にひっついて寝よう」
アラネの気がゆるみ目を閉じようとしたその時、パソコンの画面から強烈な光、真っ白な紀子さんの叫ぶ顔、スピーカーからの砂嵐を消し飛ばし直接頭に流れる声、アラネの目は暗さに慣れすぎたために、目を閉じてもパソコンに映し出された紀子さんの顔、腕、体がくっきりと目に焼き付いたかのように離れない。
「目が…目が！」
「アイタイザザアイタイヨザザザココカラデテザザアイニイクザ」
アラネは倒れた体を起こそうと椅子に手をかけて立ち上がろうとする。
疲れか？それとも呪いか？体は鉄のように硬く重い、腕を動かすたびに金属の引っ張られたような音がする、目を押さえても見えるのは紀子の裂けた口、垂れ下がった髪、血の気の失せた肌、そして砂嵐の音……。
「キコエタヨ……アナタノコエ…」
砂嵐が消え、はっきりと自分の耳から聞いた紀子の声……。
耳……。
「まさか……」
体の重みが嘘のように消えて、素早く両足で立つ、そして、パソコンの画面に映し出していたものは。
叩くのを止めて、ジッと立ち、眼のない顔でこっちを見ている。
「違う…見てるんじゃない、コレは……」
紀子の両手が動き、その手は腰から肩を撫でるように動きながら顔に近づき、顎に頬そして、長い髪をどかして出てきたのは耳、真っ白な耳が紀子の顔について、聞き耳をたてていた。
「そんな…アライドが教えてくれたのは口しかないって」
「アライド……アライドッテコガイルノ？」
アラネは口を塞いだ。
「あたしの声が聞こえてる」
まさに地獄耳、なにを喋っても全て紀子が聞いている。

「ダンマリ？……デモ、モウオソイヨ」
画面に近づく紀子、ニヤッと笑い。
「モウスグカラダガモドル…ソノトキハアイニイクネ」
「あーー！」
アラネは叫びながらパソコンを飛び越え食卓の上から寝室の閉めた襖に向かってジャンプ、襖を破いてそのまま用意した布団に隠れた、さすがの物音に起きた総統。
「何！？何事！？……わお、襖が破れて……破れてる！アラネちゃんどうした…」
アラネに事情を聞こうとした時、破けた襖から蜘蛛糸が総統の口を塞いだ。
「う〝がだぁ、あざにぎぐごどにずる、ぞんどぎばずじぃでよ（分かった、朝に聞くことにする、そん時外してよ）」
再び寝る総統。
「フフフフ……モウスコ……シ」
後４日

眼（前書き）

パソコンの呪いは着実に進行していた、W団はこのまま紀子に呪われ壊滅してしまうのか……

眼

日に日に朝食の時間の空気が重くなる、紀子に聞かれないように用心のためマイクは抜いたが、アラネは朝食を食べ終えてから庭に出て、あの三人の仲間入りを達成した。
「嫌だ！」
アライドは叫びに似た一言、水犬は庭に出て遠吠えをした。
「私も風呂場では嫌だ！」
「あのまま庭で寝とけばよかった！」
W団メンバーの半数が呪われてしまった、このままでは壊滅の危機に陥ってしまう、だが、気にもせずにその日の午後、業者の方が到着、パソコンはインターネットが出来るようになった。
「これによって、更なる情報を手に入れて、世界征服を確実なる物にするのじゃ」
「総統さん、これで新聞紙だけで、明日の天気予報を確認してたのも楽になるね」
呑気にパソコンをつついている総統とサリィ、既に呪われた四人は必死の思いで、元の持ち主を捜すのだった。
「いいか！もう残り時間は四日しかない、もしこのまま一週間経ってしまえば、アライドを始め、水犬、私、アラネの順番に風呂場で倒れるのだ」
アライドが一つおかしい点を指摘する。
「風呂場限定ですか？」
「いや、ザ・輪の時は風呂場以外にソファーの上、布団の中だの、とにかく何処にいようが、一週間経ったその時、紀子呪いによって私達は天に召されるのだ！」
「ああ……短かったな…」
「諦めるなアライド！」
その後、庭で作戦をたて、昨日と同じく近辺の調査、およびゴミ捨

て場の調査を行うことに、しかし、エンクランスの作戦はこれだけではなかった、その作戦の名は。
「紀子がでる時間を見計らって寝ずの番でパソコンを見続ける大作戦」
「簡単に言うと、コンセントもマイクも刺して、そのまま放置しといて、出てきたところを問い詰めるんですね」
「その通り、アラネちゃんの話によると言葉を交わしたようだ、つまり話し合いで解決する合法的で平和的解決方法といえるのではないか」
エンクランスの作戦に皆から拍手喝采、士気上昇。
「それでは作戦開始、午後から夕飯までアライド、夕飯からみんなが寝るまで水犬とアラネちゃん、夜通しは私がする」
「エンクランスさん…あなたって人は…」
総統とエンクランスのみんなの目が日に日に変わってもいた。
その日、W団メンバーはエンクランスの作戦どうりにパソコンの見張りを交代で夜通し行い、それ以外は持ち主を探しに走り回った。
結果……
残り3日
「みんな……なんか怖いよ……」
コレといった情報もなし、夜通し行った見張りも効果なし、喋りかけても応答なし。
今までにない重い空気で朝食、エンクランスは睡眠中、誰も言葉を交わさない事態に、話をしようと総統は話題を出すが、呪われ組は腹話術でもしているのか、口が動いてないのに透き通った声が出ていた、水犬は形をなくして、水筒で一定間隔で気泡を出している。
「もう…終わってしまうんですね」
「短かった…まだ一年も経ってないよ」
「でも、頑張ったよね……」
「ハァー」呪い組一同
「お願いだから口だけでも動かして、誰が喋ってるのか分からない」

呪い組一同口を開けたまま動かない。
「その状態で喋らないでよ」
放心状態の呪い組はそのまま死体のようにいすに座っていた、だが、寝ていたエンクランスが起き上がり、事態は一変する。
「そうか…考え方を変えよう、粗大ゴミに捨てたということはいらなくなったということ、つまり」
エンクランスは食卓で放心の呪い組を起こす。
「まだ探す場所がある、みんな起きるんだ」
「エンクランスさん、諦めましょ……」
諦めモードのアライドに言葉の差込を入れるエンクランス。
「アライド君、君は古くなった物を捨てようとおもったが、冷蔵庫やレンジなど、日常生活に必要な物だった場合はどうする？」
「新しく買うでしょ……買い換えのことを言ってるんですか？」
「そうだよ」
エンクランスは作戦用のホワイトボードを取り出し、ある店の名前を書きだした。
「古くなった物は捨てられる、捨てられ方はそれぞれだが、パソコンを捨てるということは、新しく買い換えた可能性は十分にある」
書き終えたホワイトボードの文字を読む。
「リドミ？」
「マジコ？」
「ケーズエレキ……あ！」
「気付いたようだね、そう！買い換える為には買いに行かないといけない、ここにあるのはその電気店の名前だ」
光和、洋三、下松、ダマヤ、カメラザビッグ、芝虎カメラなどなどいろんな電気店の名前が書かれた。
「手段は構わない、ここ二週間に売られたパソコンを調べ上げ、持ち主を探し出す！コレが」
『作戦名：電気店巡り』
「おおー！」

「いや、作戦名そのまますぎ」
こうして、作戦は開始され、盗み見、聞き込み、突撃、逃走、再度調査を繰り返した。
……調査終了、時間は夜九時を回り既に寝ているサリィの隣の作戦室もとい食卓で倒れていた。
「疲れた……」
至る所にある電気店を走り回り、精巧な作戦で手に入れた資料を基に散策をして、話を聞き、疑われたりしたが、着実に資料の数が減ってきている。
「でも、コレで見つからなかったらどうするんですか？」
「そういうのは考えない、今あるのをさばいて行こう、それじゃ明日、店が開く時間の三十分前に起床で」
「はーい！」
食卓の電気は消され、それぞれの布団、破れた襖に敷かれた布団、冷蔵庫の水筒の中でぐっすりと寝た。
……真夜中、針時計の秒針が動く度に寝室に音がこだまする。
疲れきった身体を休める睡眠、明日に備えて気力を蓄える一時だが、何時もより早く寝たときにいつもどうりの感覚で起きてしまうと、その時刻は真夜中だ。
起きた者はまた寝るが、みんなが寝ている間は自分の時間だと夜更かしをする者もいる……。
今、冷蔵庫の中を探っているサリィがその例だ。
「やっぱり…今食べると太るかな…」
水犬は水筒の中でぐっすりと寝ている、サリィに気付いていない。
「もういいか…」
食べるのを諦め、もう一度寝ようとするが、何か勿体ないと思う子ども心。
「そうだ…明日の天気でも確認しよっと」
パソコンの電源を点けるサリィ、起動画面に入り、デスクトップが表示される、デスクトップにはエンクランスが入れてくれたアプリ

が数個に、基本な画面は白字のWに黒の背景の簡単なデスクトップ、それが消えるように、インターネットを画面いっぱいに開いた、ローマ字表を見ながら打ち込む。
「なんだ、曇りか…やることないな…やっぱり寝よう」
そして、インターネットを閉じると、設定していたWの文字は消えて、真っ白な背景に髪の長い青が基本のワンピースを着た女性らしき人が、サリィに背を向けて座りながら何かをしている。
「何？これ……」
サリィはマイクを取り出して、その女性に話しかけた。
「お姉ちゃんはだれ？」
画面の向こうの女性はサリィの声に気づいたのか、慌てて隠れようとする、しかし、何もない白背景では隠れる物がない、ワンピースの女性は背中側を見せたまま答えた。
「ダレデスカ？」
「私はサリィ、あなたはもしかして…紀子さん？」
ワンピースの女性は髪を揺らしながら考えて答えた。
「ノリコ？ワタシハノリコナノデスカ？」
「違うの……じゃあ、あなたは誰で何をしてたの」
すると、動作が止まり、背中を見せたまま後ろ歩きで、サリィの方に近づいてきた。
「ワタシワノリコ…ワタシハノリコ…ワタシハアイニイッタ…デモイナカッタ…ドコニモイナカッタ…アイニイッタノニイナカッタ…ワタシハアノヒトニアイタイ…アイタイ…デモマダタリナイ…ノリコニハ…アルモノガタリナイ」
サリィは言葉を出せずに紀子さんの声を聴いた、そして、紀子の頭しか見えなくなるほど近づいていたのに気づいてのは、この言葉を聞いてからだった。
「ワタシノカオハ…カラダハ…モトニモドッテキタ…デモ…」
「でも……」
ゆっくりと振り返った紀子の顔は、血の気があるかのような綺麗な

肌色に紅色の唇、サリィの声を聞いていた耳があるに対して、自らの手で書いたのか、目とは言えないものが紀子さんの顔に描かれていた。
「コレデハアッテモミエナイ…ミルコトガデキナイ…メガナイ…ミルタメノメガ…ダカラ……」
紀子は内側から自らの手で画面を叩きながら叫ぶ。
「メヲ！ワタシニメヲ！アノヒトヲミルメヲ！メサエモドレバアイニイケル！ダカラワタシニメヲ！」
メヲ！
眼を！
今にも画面を突き破って、サリィの眼を奪っていく勢いの紀子、スピーカーから流れる透き通った紀子の叫びがなだれ込む、人なのか霊なのか、確かなことはそれが現実であること。
そして、もう人事ではない範囲まで及んでいること。
……残り2日

パソコンの持ち主（前書き）

残り時間２４時間を切った我等Ｗ団、まず、一日前の話からしよう

パソコンの持ち主

残り約二十四時間……
朝食、誰も喋らず黙々と食事を終わらせ庭にでる、それはもう総統も例外ではなかった。
「嫌だ！」
アライドは叫びに似た一言、水犬は庭に出て遠吠えをした。
「私も風呂場では嫌だ！」
「あのまま庭で寝とけばよかった！」
「なんであの時みんなを起こさなかったの！」
「お化けなんていないさ、お化けなんて嘘さ、寝ぼけた人が見間違えだのさ……だけど……だけど…お化けはホントはいるんだよ！！」
「総統！あんたが一番怖いわ！」
残り時間は約１６時間、日付が変わった瞬間、タイマーのない爆弾を背中に抱え込むような状態になる、しかもタイマーがないのに朝までには爆発もとい呪い倒される、再起不能、天に召されるのだ。
「もう駄目…手がかりはもうないのね」
サリィが庭に寝っ転がる。
「回収した資料も今ではただの紙…全部外れ」
シュレーダーに回収した資料を放り込むアラネ。
『コレから毎日一人消え、また一人消える』
木にもたれ目線を地面の枯れ葉に向ける水犬。
「最後に残った総統が一人食卓で『酒名・最後の酒杯』を飲みながら孤独に消えるんですね」
そんな水犬を眺めるリーチ、テンパイ、チェックメイト、王手のアライド。
「嫌だ！！一緒に逝こうよ！」
女座りでハンカチを噛みながら嘆いている総統。
「そんなこと言うなら最後のあがきぐらいして下さい」

呆れて総統を励ますエンクランス。
このような状況になったのは昨夜の夕食まで戻る。
夕食の準備をしながら帰りを待つ総統、中之島レナからパソコンに挿せるカメラを借りて、帰ってくるみんなの作戦成功の喜びを撮ろうとしていた。
朝にサリィの見た話で崖っぷちの表情で話を聞いていた呪い組は急遽行動を開始、全速力で残りの資料を手がかりに走り回った。
……だが。
玄関から入ってきたみんなの顔は……燃え尽き、崩れ落ち、水が滝のように流れ、床に倒れたり、頭としっぽがなかったり…正確には胴体しかない水犬だが、作戦は。
失敗！！
「み……みんな…大丈夫？」
総統の問いは空しく流された。
「総統……明日の食事は豪華にしておきましょう」
その後、会話らしき会話はなく、ただただ時間は過ぎていった。
みんなが寝てから総統はとある作業をし始めた。
「もしもし？夜分遅くすみません、私はW団総統、Wです！！はい、いつも応援ありがとうございます……あっ今度こそは正義を倒すので……はい…はい…もちろん任せて下さい、それでお聞きしたいことが……」
総統はパソコンを貰ってきた日からみんなの目を盗んで、元の持ち主を捜していた。
「……そうですか…はい？なんでそんな事をしているかって？勧誘？そんなんではありません…ただ…元の持ち主がどういう理由で捨てたかをしつこく聞く気はありません…団員の為もありますが、みんなの話を聞いてると……可哀想なんです…棄てられたらパソコンが……日に日に体が治っているのは怖いです、でも……パソコンが訴えている内容が可哀想なんです…」
総統はお礼して電話を切った。

他人が聞けば狂った人のいい見本だ、それでも総統は聞き込んだ。
「会いたい…お父さんに会いたい……捜したけど、どこにもいなかった…それはネットワークの世界だったから…眼さえあればあの人を…つまりお父さんを見つけられる」
総統は電機を消して、窓から差し込む光だけを頼りにパソコンの目の前にトマトジュースを持ちながら椅子に座った。
「パソコン…紀子さん…どれでもないかもしれないが、見えているか？ワシが……聞こえているか？声が……話せるか？口が…」
総統は待った…紀子が出てくるまで、時計の秒針がいつもより大きく聞こえる、どんなに待ってもパソコンに変化はない、いつの間にか聞こえていた秒針の音が止まって、替わりにノイズ音が聞こえだした、ドンドン高くなる、頭に直接ノイズが入ってくる。
「来たか……」
総統は立ち上がりパソコンを指差した。
「出てこい紀子、どういうつもりで我等W団を壊滅させるが知らんが、このW団の総統が許さない」
ノイズが消える。
「アナタハダレ？」
紀子の姿は出ていないが、確かに声は聞こえる。
「W団総統のWだ」
「クラクテヨクミエナイ……アカリハナイノ？」
総統の読みどうりだった、電機を消したのは紀子の体が元に戻っていると想定して、事前に灯りを消しておいたのだ。
その想定は目が見えているということ。
「どうやら灯りがないと見えないようだ」
「ヘンナフクキタヒトシカワカラナイ」
これは、自作のパジャマ姿を言われている。
「やっぱり変かな？……そんなことはどうでもいい、どういうつもりで我等W団を壊滅させるのだ」
少しの間を入れて、話した。

「アナタタチガオトウサンヲ…、トウサンガコトワッタカラ」
断った？何か重い話になりそう。
「ダカラワタシハ…、トウサンノジャマダカラ…、ソレモコレモアナタタチノセイ」
「待ちたまえ、何か誤解していないか？」
「ノロッテヤルノロッテヤルノロッテヤル……」
「ダメだ、話し聞こうとしない、なんで幽霊って一方的なやつばっか……」
総統はトマトジュースを飲もうと手に持ち、口に運んでいたら。
「呪ってやる！！」
紀子の顔が急に画面に映し出され、紀子の両目が総統を睨みつけた。
「……」
総統は動じてはいなかった、叫び声も恐怖もしていなかった。
パソコンはすぐに切れて、紀子の姿は消えた。
しかし、総統は動かず、代わりにガラスコップが床に落ち割れた。
「……」
総統は確かに動じてはいなかった声も出していない、ただ出す暇がなかったのだ、あまりの恐怖を通り越して体が総統の電源を瞬時に切っただけのこと。
その時の総統は可愛らしい天使と会話中の事だろう。
残り１５時間…
総統の話を聞き終え、本格的にする事がなくなった我等W団だったが。
「行く宛はまだ残っている」
総統の取り出した紙には一つの住所が記されていた。
「ここが元の持ち主の住んでいた場所じゃ」
「いた…いたって何ですか？もしかして……」
「今は居ないらしい」
総統の持っている紙に全員が近づく、最後の手がかり、これがもし違ったらW団壊滅の危機。

「そこで、場所が遠いから三人で行こうと思っている」
「そんなに遠いんですか？」
「電車使うからそこそこあるよ、ワシを一人として後二人は誰じゃ？」
二人はエンクランス、アライドと即座に決まった。
残りのメンバーは帰ってくるまで自宅待機となった。
電車の車内……
人が込んでいて座れなかったので、立ちながらエンクランスがある推測を始めた。
「総統、アライド、聞いて下さい、これはあくまで推測ですが、紀子は幽霊として何の霊なのか考えたことあります？」
「自爆霊とか、式神？」
「あれじゃないの百年生きた物は霊力がつくとかいう奴」
「アライド君漢字が間違っている、付喪神の事ですがそうじゃないと思います」
「じゃあ何がいいたいの？」
総統は持ってきたオニギリを食べながら聞いている。
「結論をいいます……紀子さんは父さん、つまり実の親によって手をかけられた娘の怨念じゃないでしょうか」
「アライド君コレいる？」
「自分で責任もって食べて下さい」
総統は気を紛らわそうとオニギリにかぶりつく。
「アラネちゃんから始まり総統の聞いた話から…推測話を作ってみました」
エンクランスバージョン紀子さんの回想
数年前、まだ紀子が小さい時に母はなくなり、父さんは一人で娘を養っていました。
娘はパソコンを使う父の姿を見て、よくパソコンを触っていました。
そんなある日、父が電話越しに誰かともめているのを見てしまった紀子、その日から父は寝ずに働き、徐々に痩せ食事にも手を出さな

くなった、それでも紀子は父さんが大好きで、真夜中に帰ってくる父を寝ずに待っていました。
そんなある日……悲劇が起きたのです、父は借金取りから自分の命欲しさに一人娘の紀子に手をかけ、一人逃げ出しました。
それでも紀子は自分が見捨てられたのを知らないまま、一週間生きていたが……しかし、亡くなった事に気づかないままあのパソコンに憑き、真夜中にパソコンが勝手に点いて、ゆっくりと一週間かけて父を自分のいる場所に引き吊り込もうとしている、父を苦しめた人含めて……。
「……というのが推測です」
「本当にそれ一人で創ったの？」
「勿論です」
「重たいね…結構……なるほどだからあんなに古いパソコンなのか」
「あなた達のせいってのは借金取りの人でしょうか？」
「あくまで推測です」
『次は～千手直～次は～千手直～』
「それはそこに着いた時に分かる」

隠されたディスク（前書き）

ついに持ち主を突き止めた総統だったが…

隠されたディスク

後１１時間マンション釣熊亭前……
総統達の住んでいるアパートと似たりよったりの構造、違う点は一度入り口の監視室みたいな部屋を通り過ぎてから部屋に入るとこぐらい、その監視室にいる大家さんとお話中の総統。
「入れてくれるんでしょうか？」
「そこは総統の言葉しだい」
総統が鍵を持って戻ってきた。
「見て回ってもいいらしいよ、話し相手になったらいいみたい」
エンクランスとアライドは一度顔を見合ってから総統に軽く触れて。
「おばちゃんの話し相手頼みました総統」
総統が持っていた鍵はエンクランスが盗み、マンションに入って行った。
２０６号室……
「おばあちゃんの話だとそのままらしいけど……まさかアレもそのままじゃないですよね」
扉の前に立つ二人、至ってシンプルで変哲もない扉だが、数ヶ月帰ってきてないらしい、鍵を開け、扉を引く。
玄関から既に埃だらけ、床に敷物はなし、廊下を歩くと二人の足跡がきっちりと残っている微かに足跡が他にもあるがさほど変わりない、突き当たりの扉を開けて食卓に入った、机には数ヶ月前の新聞とコップが数個、冷蔵庫の中は空っぽ、キッチンのガスと水は既に止められ電気もつかない、埃かぶったカーテンを開けて窓を開ける。
「埃だらけだ…手がかりはないのか？」
「エンクランスさん！！」
アライドの声のする方に向かうエンクランス。
「どうした？」
「この部屋の机の上……」

小部屋に机と棚が数個、棚の中身は全てなくなって、机の上を見てみると、あのパソコンと同じぐらいのサイズに埃の積もりが周りのとは違っていた。
「あのパソコンはここにあったんだ……」
その頃総統はマンションのおばあちゃん達と立ち話の最中。
「……でね、コレわかる？この気持ちわかる？」
「でも他に理由があるかも知れませんよ？」
夫の不倫疑惑の相談を受けている総統、重たい……。
「消えたと言えば、２０６号室の古物さんどこに消えたんでしょう？」
「古物さん？その方がどうしたんですか？」
おばあちゃん達は総統を輪の中に入れて、限りなく小さな声で話した。
「数ヶ月前から突然消えるようにどこかえ行ったんです、あの人夜遅く帰ってくるから」
「私たちの読みはいわゆる夜逃げもしくは逃亡だと……」
「なるほど……それは一人でですか？」
「そりゃそうよ、だって古物さん、奥さんいないんだもん」
「それに変な服着た人達が押し寄せたとか……きっと借金取りよ」
「管理人さんの所に来て…、古物さんは旅行と仕事の関係上数ヶ月帰ってきませんが、お支払の分は部屋を残していただきたい、後外に出した物は棄てていただいても構わないと、それでは……、とかいって古物さんの本とか段ボールを運んでたらしいわよ」
エンクランスのお話どうりに進んでいる、しかしおばあちゃん達の会話で気になる点が出てきた。
「まぁ古物さんは一人暮らしだったから逃げやすかったでしょ」
「一人暮らし…娘とかはいなかったんですか？」
「管理人さんから古物さんは一人暮らし娘はいないです、もちろん愛人とかも私と違って……」
「それでも消える前は楽しい方でした、総統さんの言うとうり娘が

いるかのような」
古物はどこに消えたのか、変な服着た借金取り、存在しない娘、その後総統は一つの段ボールを抱えたエンクランスが戻って釣熊マンションから決戦の地に戻った。
残り9時間電車で移動中……
パソコンの持ち主が古物さんであり失踪中ということをエンクランスは聞かされ、段ボール箱は鍵を返したときに管理人から貰ってきた物らしい。
「おばあちゃん達の言うとおり、本、雑誌などはなく、他にもパソコンはあった痕跡はありましたが、それは持ってかれたのでしょう」
「で、その中身は？」
「管理人さんいわく、古物さんの物を勝手に棄てれないし私の判断で預かってたけど場所をとるのでいります？、とかで貰っておきました、つまりコレが最後の手掛かり…」
段ボール箱はガムテープでしっかりと閉ざされ中身はまだ分からない。
中身はいったい何なのか、コレが紀子を倒す事が出来る手掛かりになるのか。
「そういえば、ザ・輪の方の主人公はどうなったの？ワシ見てないから」
総統は町内会でエンクランス達と一緒に映画を見ていない。
「あっ…そ…それは…」
アライドがうつむいてしまって、エンクランスが電車で揺れながら話してくれた。
「実は主人公も紀子の実家に行き、手掛かりを探して箱を見つけるんです、それを持ち帰って呪いを解除する方法を見つけたんですが……」
いやな予感がする総統、震えるアライド。
「後一歩の所で時間がきてしまい、主人公はヒロインを助けようと紀子を道ずれにして、ヒロインは助かり呪いのテレビはヒロインの

手によって葬られました……ちゃんちゃん」
「ちゃんちゃん…じゃないよ！！つまり主人公は助からないでヒロインだけ助かったの！？」
「いえ、正確には日本全体…どっかの人がおもしろ半分で動画を投稿して、広がっていました」
総統はアライドをチラッと覗いたら端っこの方で座り込んでいた。
「じゃあアライド君は助からないの？」
「いえ、そうとは決まっていません、映画は夜の９時アライド君は深夜の何時、時間差は明らかです、この差以内に呪いを解けばいいんです」
「それもこれも、この段ボール箱に賭けるしかないんじゃな」
W団拠点夕暮れの五時食卓……
食卓のテーブルに段ボール箱を置き、メンバー全員で囲んで、総統がはさみを持って待機している。
「開けるよ……」
メンバー全員がつばを飲み込み、瞬きせずに凝視している、はさみがガムテープを切る音がよく聞こえる、はさみはテーブルに置かれ箱を開封する、その中身は……。
「ん？……ＣＤとＤＶＤ」
全員で箱の中身を手にとりそれぞれ確認した。
「ホントにＤＶＤだ」
「これはただのＤＶＤじゃない、ロボットアニメのＤＶＤだ」
「他にもいろんなジャンルのＤＶＤがあるよ」
『なんだ？これ…フリスビー…遊び道具！』
「総統、水犬が勘違いした使い方してます」
「玄関からフリスビー取ってきて庭に投げといて」
そんなＣＤやＤＶＤが箱いっぱいに敷き詰められていた。
「これだけ？手掛かりは…解除する方法は…ないの？」
「今の所…そうとしか言えません」
夕暮れの太陽が輝いているが、それももう少しで真っ暗な夜が迫る、

この箱が月のように闇夜を照らす光になればよかったのだが……。
「他に何もないの？」
「残念だけど……」
「そんな……こんな物！何の役にもたたないじゃないか」
アライドは怒りのあまり段ボール箱を机から投げた、箱はそのまま窓から庭に放り投げられた。
「アライド君、気持ちは分かるが物に当たるのはよくない」
「もう……どうなってもいいよ」
太陽のこの日最後の輝きがアパートを照らす。
アライドが見る最後の光が……。
その時、庭で遊んでいた水犬が放り投げられた段ボール箱に吠え始めた。
「水犬が吠えてる…」
誰も机から動こうとしないので、総統が窓から差し込む光を手で遮断しながら水犬に近づいた。
「どうしたの水犬？フリスビーならあっちに……」
『総統！フリスビーこの中にある！』
「もう…近隣のかたに迷惑に…な…る……」
水犬が見つけたのは段ボール箱の底に太陽の光が当たり円盤型の影が一つ箱の裏面に浮かび上がっていた。
「水犬よくやった！！」
庭で騒いでいる総統が気になり始めたメンバーは日が暮れ、星が空に見え始めた庭に出た。
「総統…なにかあったんですか？」
その総統の手に
『タイトル・固円盤再生ロボ・バックアップ』
と書かれたCDをしっかりと持っていた。
「コレが紀子を倒す最終兵器になるはずじゃ」

0：00（前書き）

ついに紀子の正面対決が始まる。

0：00

２ＸＸＸ年世界は機械により安全で快適な最低限度の奉仕を受け、天国のような生活だった。
しかし、機械を制御していたコアが暴走し世界は機械が支配する地獄の地と成り変わった。
コアはもはや地球そのもの、破壊してしまうと地球は灰色の惑星となる、この事態を打開するために造られたのが、固円盤再生ロボ・バックアップ、通称ＢＵロボである。
オープニング……
「で、コレが紀子を打開する方法なんですか？」
既に午後６時過ぎ、段ボールの裏面にあった隠されたＣＤを見つけたのはよかったが、パソコンに入れて読み込んでみるとなにやら変なゲームが始まった。
「でも、もうコレしか方法はないんだし楽しんでやろう、どうやらＲＰＧじゃないようだし」
オープニングが終わりタイトル画面が出てきた。
「アーケード、ＶＳ、オプションどれにします？」
「ストーリーで」
ストーリーを選びキャラクター選択、全機体で六体、個々に特徴的な姿をしている、キーボードを触っているのは総統、付属の解説書をエンクランスが読んでいる。
「これ全部自作なのか？だとしたら凄いな…みんなどれがいい？」
「総統の好きなように」
「それではこの黒い機体で」
総統が選んだのは、ＢＵロボ隊長プロト、機体は古いが全体的に黒く塗りつぶされた機体に肩のミサイルポットと腹部に内蔵されている粒子ビームを装着している。
ゲームが始まり２Ｄの格闘ゲームが開始された、初戦はキャラクタ

ー選択にもなかった雑魚戦。
「総統、コマンドは普段と一緒ではしょります、ですがこのゲームに特殊なルールがあるみたいです…」
「総統すげー！」
あっという間に雑魚戦勝利。
「だてに格ゲーしてないよ」
「まあ…きたときに教えます」
雑魚戦二回目。
順調に敵を倒す総統、コアが送りつけた刺客を次々と倒し、コアの中枢に進む。
第１０戦目
力量は五分五分、自分と同じ機体で戦ってくるミラー戦、しかし、総統の方が勝っていた。
「ゲージを消費して必殺……」
『粒子ビーム砲・ブラスター』
プロトの必殺技が炸裂、変装が剥がれ落ちミラーは爆発しながら吹き飛んだ。
「総統、次でラストですよ、エンディングまでもう少しです」
「そうだね……あれ？目的変わってない？」
映像が流れてプロトが大きな扉を開き始めた、この中に暴走したコアを止めにＢＵロボ達は戦ってきた、この次で終わる、この中にいるボスさえ倒せば。
扉は開かれ真っ暗な部屋についた、何にもない真っ暗な部屋、総統達は見覚えがある、あの紀子が出てくるときのあの真っ暗な部屋。
「総統……まさか…」
突如、プロトが入った扉が閉まり、正面から明かりが灯りだし、真っ暗な部屋は真っ白な正方形の部屋になった。
その部屋の中心に人が一人立っていた、アライドと水犬が見た垂れ下がった髪、エンクランスが見た口、アラネが見た耳、サリィが見た青のワンピース、総統の見た眼。

「紀子だ……ラスボスは紀子だー！！」
そこには完全な人の姿をした紀子が立っていた。
「あなた達のせい……あなた達のせい……呪ってやる呪ってやる……」
「総統！今がチャンスです！」
エンクランスが声を上げて、硬直していた総統を起こした。
「戦闘は始まってます、紀子は見たところ何の装備もしていないただの人です、なにかする前に……」
「叩く！」
プロトのブースターで一気に距離を積めて、もっとも攻撃が早い弱から入った。
「何もしない敵を攻撃するのは正直、気が進まないけど……当たれー！」
『ジャストガード』
紀子は驚くべきスピードでプロトのジャブを防ぎ、背後に回り、体格差が二倍もあるプロトの背中を蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされたプロトは前のめりに倒れ込んだ。
「何！？さっきのは、ただのガードじゃない」
「ジャストガード、単発で隙は大きいが相手の攻撃にあわせて押すと攻撃は当たらず、相手は攻撃モーションをとったまま固まるというガードのカウンター応用技」
「応用技！？なんで紀子が使ってるの！？」
「総統！紀子さんの体が……」
青のワンピースが紀子の体を覆い隠し、みるみるうちにキャラクター選択にいたキャラに変身した。
BUロボ対装甲操縦ロボ・デジ、人の形もとい身長も模したロボ、他の機体に比べ一番小さいが他の機体に乗り込むことによってその力は更に向上するサブ的なキャラクター、武器は主に体術、人の形を模しているため無茶な動きもでき、更に両手に装着している細い釘を打ち込むことで、内部から破壊する。

「総統…心してかかって下さい、あの紀子……相当強いです」
紀子が走って近く。
「体術なら遠距離から攻撃する、ミサイルポット１０連弾」
両肩の武器を紀子に向けて撃ち込み、紀子は爆煙の中に包まれた。
しかし、何事もなかったように紀子はガードと回避していた。
「大丈夫、確信はないがこの機体はそうとう強い、紀子の一発ぐらい軽い軽い」
総統は後ろに下がり防御の態勢、だが、紀子には関係なかった。
上段ガードを下段足払い攻撃で外して、そこに更に下段から蹴り打ち上げ、打ち上げられたプロトにジャンプで追いつきボディに中強の二連打、もう一度ジャンプして二連打、仕上げに空中掴みで、プロトの首に紀子の両手がそえられて、落下直後に両手から首に釘を射出。
プロトのライフをごっそりと持ってかれた。
「……」
思わずキーボードから手を離す総統、そして一言。
「上級者だ！！」
「なんですかあの動き、どこぞの格ゲーの動きでしたよ」
「私たちも出来るかなあの動き」
「アラネちゃんなら出来そうな気がする」
「総統、顔を画面に戻して、まだ終わってません」
しかし、どんなに抗っても的確な差し込み、素早い行動、なにより攻撃を無力化するジャストガード。
プロトの機体に数々の釘が打ち込まれ、四肢が動かせない状態に陥った。
「紀子に負ける」
紀子がプロトに近づいて、とどめを刺した。
『釘刺しショット』
ＢＵロボの弱点に差し込むとどめ技、プロトはそのまま打ち込まれた反動で、背中から地面に倒れた。

「プロトー！！」
完敗、敗北、壊滅、紀子に勝てなかった総統達に待っているのは、命のタイムリミット、精算が待っている。
貰ったパソコンに呪われ、とどめを刺された総統は長針が１０時を回っている時計を見た。
「もう１０時！？」
「えっ！？」
どうやら全員が気づいていなかったらしい、残り２時間、それ以内にこのゲームで驚異的テクニックの紀子を倒さなければならない。
「総統は休んで下さい」
「エンクランス……」
「総統は少しやりすぎです、僕らにもやらせてくださいよ」
「アライド君……」
「面白そうじゃん、驚かされた分キッチリお返ししてやる」
「アラネちゃん……」
『僕も僕も！！』
「水犬……出来るの？」
残り２時間、Ｗ団ＶＳ紀子の闘いが始まった。
コンティニューからやり直しが出来て、ホッとする一同、アライドが紀子と戦闘する事になった。
「あそこまで強いって事はもともと強いキャラなんですよ」
アライドは紀子と同じデジを選択、戦闘が始まった。
「攻撃をさせない、速攻の攻めをくらえ！」
アライドは紀子には攻撃をさせないように隙あらば釘打ち、連打、詰めて連打連打。
「いいよアライド、紀子を押してる」
一見アライドが優勢に見える攻防だが、エンクランスから見たらアライドの方が押されていた。
「イヤ…駄目だ、アライド君は決定打を入れていない、ライフは削れているが、あれはガードで軽減された釘打ちのみ、いずれアライ

ドの特殊武器の弾が尽き……」
「あ……尽きた…」
紀子の目が光り動いた、紀子はアライドが使うデジの握られた拳両方を両手でそれぞれ掴んだ、そこに温存していた釘打ちをここぞという感じで、打つ打つ打つ。
「アライド、紀子から離れろ」
「出来ません、しっかりと掴まれて……」
打ち込まれた釘が肩に飛び出した。
「両肩が動かせない……」
「蹴りだ！」
残された足で渾身の一撃を放ったが、その足を脇腹でガッチリと捕まえられ、軸にしていた足を払われ、背中から地面に倒され、紀子の手が顔にそえられた。
『釘刺しショット』
アライド敗北……
「アライド君…残念だけど……」
しかし、アライドはこの戦いであることに気づいた。
「紀子の…つまりデジのライフは小さい、プロトは何回も当てられて、やっと倒れたのに対して、デジはたった一回のコンボで倒された」
次はアラネの番、使用する機体はＢＵロボ災害地用運搬ロボ・グモ、蜘蛛型の機体に六本の脚を自由自在に動かし、先を尖らせることで、刺すことも出来る、そして、二段階に分離して小さくなれる。
「……蜘蛛だから選んだの？」
「そうです、それにコッチの方がやりやすい」
サイズはＮｏ．１の大きさ、故に分離して小さくなれるようになっている、プロトが人形のサイズぐらいに見える。
試しに残骸のプロトを刺して持ち上げ、もう一本刺して、真ん中から二つに裂いた。
「アラネちゃん酷い…いちよう隊長機……」

「これならガードなんて関係ない、この脚でくし刺しにする」
戦闘開始、珍しく紀子が先に動き、グモの弱点に向かって走る、機体が大きく蜘蛛型で動きが鈍いごり押しタイプの機体。
「この機体はただ脚を自由自在に動かして攻撃するだけじゃない、グモ特有のあれも出せるのよ」
『ネットガム』
口元から網が飛ばされ紀子に当たった。
「動きにくいでしょ、すぐに動きやすくしてあげる……」
紀子は必死にはがしているがガムのように離れない。
「当たれー！」
紀子に向けて脚がおろされる。
しかし、的を外して紀子の肩をかすめただけになった。
ネットガムから解放された紀子は肩をかすめた脚に捕まり、グモの弱点である胴体に内蔵されている本体に近づいた。
「させない、もう一度」
グモがネットガムの体勢に入ったその瞬間、グモの口にあたる部分が開ききったところに飛び込んだ紀子、ネットガムが発射される前に無理あり口に釘打ちをした。
「しまった！このままじゃ」
グモはそのままネットガムを発射、だが、閉ざされた口に当たり、使用不可になり、紀子はグモの背中に乗り、弱点に迫る。
「アラネちゃん！！」
「分かってます、分離！！」
紀子が弱点に釘打ちする一歩先に分離が成功、サイズはデジより少し大きめな感じ、本体が抜けだし、残った脱け殻は崩れた。
「今度はちゃんとした格闘戦、かかってきなさい」
だが、アラネの健闘も空しく分離、サイズは紀子の足先より小さくなった。
トドメは紙で虫を摘むように簡単に潰された。
「害虫のように潰された」

『次は僕が行く』
BUロボ探索兵器・ドグ、犬型の機体にどんな場所にも潜り込めるように製作された。
しかし、結果は悲惨な物だった、キーボードに脚をおいてみたら、他のボタンをおして、思うように動かずに一方的な攻撃が続いた。
「やっぱり水犬には無理か……」
トドメは釘刺しショットではなく最初から最後まで投げで終わった。
「あれ？この終わり方どっかで見たような……」
「次は私が行きます」
BUロボ重装甲兵器ガド、あらゆる攻撃をその両手につけてあるシールドで防ぎ道を開ける目的で造られたキャタピラ使用の強行突破専用機。
「この機体はもともと動きは鈍く戦闘向きではないが、間接部の隙間、弱点を極限までなくしたのがこの機体、紀子さんから見たらこの機体こそ苦手な分類」
「そうか、デジの基本的な戦い方は釘打ちの弱点攻撃、コンボをかさねてもトドメはどうしても釘打ちになる、さすがはエンクランス頼りになる」
「それでも、ガドには決定的な欠陥がある」
紀子とエンクランスの闘いが始まった。
エンクランスはすぐに全体のシールドで防ぎに入りながら後退した、それに続き紀子が追いかける。
「やはり見逃してくれないか……」
「どう言うことですか？」
紀子がガドにある程度近づくと、ガドの背後に回り込もうと方向転換、エンクランスもそれに合わせながら紀子を背後に近づけないように壁を目指す。
「なるほど……ガドの弱点は背中側に集中していて、壁を背にして戦うのが利に関するんじゃ」
「それまでに後ろをとられたら釘打ちのバーゲンセール、ガドは後

ろに攻撃も転換も出来ないキャラ、だからこそ逃げ続ける」
しかし、いくら逃げても双方ブースとなしの自分の走行だけで、なかなか勝負がつかない、紀子もガドを壁にちかづけさせないよう考えて行動してくる。
すると、急に紀子の動きが鈍りチャンスが訪れた。
エンクランスは見逃さずすぐそばの壁に背中を預けた。
「よし、これで紀子に勝てる」
エンクランスは紀子に疑いの目を外せずにいた、ガドのいるのは四隅のちょうど端、右肩が壁に当たって動かしにくくなっていた。
「しまった、紀子は両手が自由に使えないように片方の肩が壁にぶつかって動かしにくいように四隅のどこかに誘導してたんだ」
「それでもガドの優勢は変わらないでしょ？」
「そうでもない」
紀子が迫る、ガドは真横に方向転換するにはキャタピラの軸を変えるしかない、それはすぐに場所を変えれないという事、場所を変えるには結局、一度壁から離れないといけない、ガドにとっては中途半端な位置に誘導された。
「右肩が使えないっていう事はガドにとっては右側半分が使用不可状態、シールドを構えても右側は守りきれない紀子はきっとそこをついてくる」
ガドは無理やりシールドを構えたが、紀子は右肩に乗り、装甲が分厚顔面に拳のラッシュ。
「このままではガドの顔面の装甲が外れて、無理やりにでも釘打ちをしてくる」
ガドの頭部が崩される、このままでは壁を背にしなくても、いつかは負けてしまう、エンクランスが考えた末、とった行動は。
ガドを急前進させ上半身だけを回転させる技で紀子を振り飛ばした。
「せこい事はやめます、正々堂々とこのシールドでスクラップにして見せましょう」
両手のシールドを拍手するように何度も叩き合わせ、強行突破専用

機の名に恥じない特攻を見せた。
紀子は特攻をその身で止めようとシールドを構えたガドに挑んだ、結果は目に見えていた、紀子はいとも簡単に押され、足に火花を散らし壁に急接近する。
「潰れろー！！」
壁に激突、紀子は潰れたと思いきや、激突寸前に真上に飛び逃げしていた。
「見逃してくれなかった分、こっちも見逃しはしない」
『シールドプレス・粉砕機バージョン』
紀子の落下地点にガドの棘が出たシールドを構えて待ち受ける。
紀子はなんとか避けようとしたが、片腕を代償に技を避けた。
「紀子にやっとダメージらしいダメージがはいった」
紀子が地面に倒れた、立ち上がろうにも片腕を始めて失った紀子は立ち上がるのに時間をかけている。
「もう一度潰してやれば立ち上がれないだろう」
ガドの急発進が再度、紀子に襲いかかる。
だれもがエンクランスの勝利を祈り、確信した…。
だが、長針と短針が重なり、コンパスで言う北の方角をぴったりと指し示し、時の音を刻み鳴り響いた。

挨拶１（前書き）

年明けということで番外編です

挨拶1

年が明けて朝から蛍池に集まった我々W団、おせち料理を携えて騒いでいる。
「みなさまあけましておめでとうございます、今年も我々W団をお願いし……」
「総統！！デジの話は！？」
お茶を飲みながら年明けの挨拶をしている最中の総統にアライドが話しかけた。
「みなさま、後ろのBGMは正月らしい曲を聴きながら読んで下さい、本編の方は若干難航しています」
「言っちゃったよこの作者！」
「あれだよ、難航していますてのは戦闘の表現しにくいんですよ」
木の上から真下に蜘蛛糸で降りて総統の目の前に置いてある重箱を回収していったアラネ。
「このまま言わずに何日も放置するわけにはいけないでしょ、最近増えてきてるのに」
「放置するわけにはいけませんね、それなら早く書きましょうよ」
重箱が若干浮き上がってミニサイズの水犬が数匹重箱を運んでいる。
「ゆっくりと休んでるんですいろいろと……」
「いろんな小説作ってる人、どんなペースで書いてるんでしょうね、うちは週にだそうとはしてるんですけど、別作も作ってるし」
黒豆だけの重箱をハトが横から取って何回目になるだろう。
「配分も大切だけと現実もテストが迫ってる」
「とにかくデジだけは今月に終わらせるつもりです……これって活動報告に書くべきだとおもうんですが……」
松木が酔った勢いで池に飛び込んでいる、水犬が松木を池から出さない鉄壁のディフェンスで遊んでいる。
「それじゃあ、現実問題はここまで、今年で一周年目の我々W団を

よろしくお願いします……」
箸をとり、食べようとしたら重箱がみなにとられていた。
「ワシの分、残ってる？」
「みなさん、持ってきましたよ」
エンクランスとサリィそしてレナがおせち料理を持ってきた。
「総統だけではさばけないとレナさんに頼んだんです」
「残り物ですけど」
「これはどうも、それではもう一度」
あけましておめでとうございます、今年も我々W団をよろしくお願いします。
「我々……」
「W団！！」

挨拶1（後書き）

悪ふざけ正月早々お詫びします。
……えっ？正義の見方と銑三がでていない？正義の見方はたぶんへやで一人です。
銑三はあとでアラネを加えての宴会が控えてます。

総統ＶＳ紀子（前書き）

皆さんお待たせさせてしまいました、ついに決着です。

総統VS紀子

あれから一週間、半信半疑の呪いを解くために走り回った総統達だったが…。
「時間が…」
「エンクランス、もう時間がない…」
「わかっています」
しかし、ガドの一直線タックルは真っ直ぐだけにしか移動出来ない、紀子はガドの道筋から外れるだけで、簡単に避けることが出来る。
紀子は避けた際に何かを拾い上げた。
「だめだ、全然あたらない、このままじゃ…」
「まだです、この技があります」
『ガドレール』
両手のシールドを紀子のそれぞれ真横を通り越して射出、ワイヤーでつながれたシールドは壁にめり込んだ。
「当たってないよ…」
「これでいいんですよ、見てください」
紀子はワイヤーの外に出ようとするが、エンクランスの操作でワイヤーは上下に振られなかなか出ることが出来ない、そこにワイヤーを引き戻さず、ガド自身がシールドの元まで猛ダッシュ。
ワイヤーに挟まれた紀子の目の前から列車のようにガドが突っ込んでくる。
「もう一度、あの技にかければ」
ガドが紀子に接触、紀子はガドを止めようと押さえ込むが火花を散らしながら壁に近づく。
「今度は勝つ！」
猛烈なスピードで壁に近づく紀子、覚悟を決めたのか、壁に激突する手前でガドを飛び越えた、すぐにシールドを取り付けに入るガドに紀子が何かをガドの背中に投げつけた。

「終わりだ、シールドプレス・粉砕機バージョ・・・」
「エンクランス、ガドの背中に手が」
紀子の投げつけたのは潰されたはずの片腕、その片腕がガドの背中にある弱点にぴったりとくっ付いていた。
「外すことはできないのか？」
「ガドは背中にまで手が届きません」
『釘刺しショット』
紀子の潰された片腕が動き出しガドの弱点に釘を刺し込んだ、その反動でシールドの構えが解かれ、落ちてきた紀子がひるんだガドの装甲が壊れた顔面部分に手を当てた。
「終わった…」
デジの顔か紀子の顔が笑っている…勝利の一撃が放たれた。
『急転直下釘刺しショット』
ガドが負けることは、W団全員の敗北となる、時刻は十二時を過ぎ去っていた、紀子の呪いがアライドに今にも迎えを送りつけてもおかしくない。
「どうしようもないのか？」
エンクランスがキーボードから手を離し、席を立った時、総統が説明書を読んで、ある事に気付いた。
「いや、まだ手がある」
「でも、全員負けたんですよ」
「アライドくん我々のもっとうはなんだい？」
「W団のもっとう？」
総統が席についてもういちど、プロトを選択、これが最後のチャンスとなった。
「負けても負けてもチャンスがある限り、今度はこっちが相手を負かすまで諦めない、それが我等W団の不屈の精神」
ゲームスタートのゴングが流された。
開始早々攻める総統、しかし跳躍で簡単に避けられプロトの関節部分に反撃、総統を苦しめた釘刺しショットをどう防ぐかが総統の勝

つ唯一無二の勝利えと繋がるが、時間をかければかけるほど呪いはアライドの命を奪うかもしれない、短時間かつ一方的な試合運びが絶対のこの試合、しかし、そうはさせないデジ。
跳躍からプロトの右肩に飛びつき手を関節の隙間にねじり込む、それを総統は両肩についているミサイルで防ごうと被弾覚悟で発射。
結局デジに当たらず被弾しただけ、だが釘刺しショットを防げた。
「このままで試合を進めても総統は既に両肩被弾により動きが鈍くなってしまった」
総統はどう攻めるか考えに入った瞬間にデジはアライドの戦闘で見せた速攻に転じた、ガードが遅れて懐に拳を数撃浴びせた後、両足で胸部を蹴り距離をいとも簡単にとられ反撃に移れない、総統が攻めるとデジは逃げの一手、なにも考えづに拳を出せば、すぐに開いた脇を攻められ、下手をすれば片側全部に釘刺しショットを食らって勝てなくなってしまう。
圧倒的、八方塞がり、なにをしようが裏目裏目で返ってくる、しかし、時間がたてばプロトは有利になる技が一つだけあった。
必殺技であるブラスター、デジを一撃で消し去ることの出来る技なのだが、モーションが長い上に真っ直ぐしか発射出来ない、デジならこれだけで軽く避ける上に更に問題が、このゲームシステムのジャストガード、単発でしか出せないが成功すれば技の無力化に敵機の膠着、まさにデジ専用技のようなこのシステムのおかげで、もしデジを動けない状態でブラスターを撃ったとしてもジャストガードで簡単に目押しされ、とどめには反撃ダウンの可能性が。
「どうしようもない、どうやって勝てと……」
そんな中、総統は時間を気にせずにブラスターにエネルギーを溜める、デジの急転にも対応するが、着実にダメージば蓄積している、しかし、デジの攻撃を防いでいるおかげで無駄となった釘刺しショットは数を増やしていた。
残り時間五分……
ブラスターの充電は完了、デジの釘刺しショットは残り数発、追い

に回っていた総統が最後の賭けにでた、総統はみんなの闘いをただただ観ているだけではなく、説明書に書いてある記述に一つの賭けを仕組み込んでいた。
「総統、もう時間が！！」
チャンスは一回、もう一度するぐらいの余裕はない、この作戦に総統は賭けた、仕掛けるタイミングは……。
デジが急転して懐に飛び込んだ。
「この瞬間を待っていた！」
総統はデジとは反対方向に体を向けミサイルを放った、もちろんデジに背中を無防備にさらした結果は。
『釘刺しショット・ショルダー二段刺し』
「総統！」
プロトの両肩は動かすことは出来なくなったが、肩の動きを制限された両腕でも十分デジを捕まえることは出来た。
デジを正面に無理やり放り投げた総統はブラスターのモーションに入った。
空中に投げられたデジは避けることは出来ない、しかし……
「総統！駄目です、あれではジャストガードで防がれてしまいます」
それなのに、総統はコントローラーから手を離して画面を見ていた、そして口を開いた。
「ジャストガードは確かに無敵の防御システム、しかし単発でしか出せないし防げるのは一つだけ…」
プロトの体から光が漏れ始めた。
「つまり二方向の攻撃には対応できない、さらに片方には無防備になる」
「確かに片方の攻撃には当たるかもしれませんが、威力の強い方を防ぎますよ誰でも」
『粒子ビーム・ブラスター全開砲』
「それは選択できた場合、それに格ゲーをしている人にはよく分かるはず」

デジはブラスターの攻撃判定に合わせてジャストガードを繰り出した……ハズだった。
「誤爆だ」
ブラスターが当たる寸前に総統は一つのボタンを押した。
総統はデジに背中を見せて撃ったミサイルは誘導系の弾、大きく旋回してデジの後ろに回り込み、ブラスターが当たる場所に合わせ誘導弾を爆破、無論攻撃判定は優先的に誘導弾の方に。
結果、デジはジャストガードを誘導弾の方にプロトのモーションは既に終わっているのでブラスターは続行、単発でしか出せないこと攻撃判定の優先、ジャストガードの裏をかいた総統の策は無事成功した。
『ギャアアアア……ザザザザ……』
「これが現実の実戦で、さらにジャストガードに似たような技があったら、わしらは完璧に負けていた…ジャストガードを多用しすぎた紀子の負けだ、恐ろしい敵だった」
デジの体は消し飛び、プロトのモーションが終了、無事ライフは残り、画面に大きくこう描かれた。
『あなたは見事世界を再生するただ一つの方法にたどり着きました、娘を頼みます』
「娘？」
すると、画面にイエスかノーの選択、その内容は。
『……ＰＣに残された残留データをアップデート、および修復しますか？』
「どうしま……」
「ポチッと」
総統は考えずにイエスを選択。
「なにやってるんですか！？何も相談せずに」
「だってアップデートだよ、前より使いやすくなるんだよ」
「それでももうちょっと考えてから…」
「決定権はワシにあるはずだ」

「確かに勝った総統にあると思いますが……そのどや顔やめてくれません？」
そんな総統とエンクランスがケンカしている間に勝手に進行しているＰＣ。
『……アップデート完了時間推測六時間……』
「なが！！」
……数分後
「なので、本当に朝になりそうなのでワシとエンクランスは寝ずの番でみはるからみんなは寝ること、終わったら起こすから」
「ハーイ！」
こうして、朝まで寝ずの番で見張る総統とエンクランス、朝になると何が出てくるか、そして呪いは解けたのか、娘とはいったい、その謎はＰＣに映し出されたこの名前が教えてくれるかもしれない。
『デジデータ修復中……』

デジデータ消滅（前書き）

紀子さんの正体が遂に発覚、これは呪われてからW団8日目の話

デジデータ消滅

パソコンのバックアップが始まってから数時間、夜が明けて寝ずの番で総統とエンクランスはパソコンとアライドを見守っていた。
「どうやら呪いは完璧になくなったとみていいようですね総統」
「ＺＺＺ～……ん～……エンクランス何か言った？」
「いえ、なにも」
総統は背伸びして椅子から立ち上がり朝食の用意を始めたその時。
『データのバックアップに成功……デジデータ展開開始…』
「総統！！」
「エンクランス、みんなを起こして」
布団で寝ているアライドとサリィ。
「エンクランスさん…僕生きてます！」
「アライド生きてる」
襖で寝ているアラネ、破れた襖に腕を入れて布団の中にうずくまっているアラネを引っ張り出した。
「パソコン動き出したんですか？」
水筒で寝ている水犬、水筒の中で固まっているのか最終手段、ストーブの上に置くことに。
「みんな集まった？それじゃあ…」
『デジデータを画面に展開します』
パソコンの画面に映し出されたのはあの白の正方形の部屋に四脚テーブルとまったく同じ形のパソコン。
「何ですか？これは…」
「テーブルの上にパソコンがあるだけ」
「もしかすると、デジデータとはこのパソコンの事なのでは」
『そのとうりです』
スピーカーから声が、そして画面上のパソコンが形を変えて紀子の姿に変化した。

『私がデジデータの正体です』
「紀子さんだ！！」
『デジです、誰なんですかその紀子という方は？』
画面上に映し出されたのは人間を模した完璧な女性、青のワンピースにあの長い髪が二つに束ねられ顔が見やすくなっていた。
テーブルを椅子代わりにして座りこちらを見ている。
「紀子はある映画に出てきた呪いのビデオの人で……」
『あなた方がどういう誤解をしているか知りませんが、私に人を呪い倒す力などございません』
「……？」
メンバー全員が別の意味で凍りついた。
『ですから私に人を呪い倒すプログラムも力も超能力も魔法もありません』
これが最後になるであろう、皆が庭に出て両手を広げて一言叫んだ。
「あの一週間は何だったんだ！！」
一息入れて。
「話を進めよう」
パソコンがそれぞれ見えるように横に椅子を並べて座った。
「それじゃあ、ことのきっかけから話をするのが定石だと思うがすっ飛ばして、君は何なんだい？」
（知りたい方は我々W団を読んで下さい）
デジはなにやらややこしい数字を画面に展開して、自分が何者かをスピーカーを通して話してくれた。
『私は完全自立型電脳世界人間、私を作り上げた父は親しみからデジと名をもらいました』
「完全自立型電脳世界人間？簡単に言ってくれるかな？」
『つまり、パソコンの中に人が住んでいると考えて下さい、それもまだ不完全な』
「不完全とは？」
『私はまだ成長の最中です、更に人に近ずく為学び成長するのです、

インターネットを経由して』
なにやら難しい話になってきたので、話を変える総統。
「それじゃあ君はどうして捨てられていたんだい？」
『捨てられた……』
黙ってしまったデジは頭を抱え込んだ、するとデジは頭をかき始め何かを思い出そうと画面を埋め尽くす大量の文字と数字が。
「大丈夫なのこれ……」
『記録がなくなって思い出せません……私はどうしてここにいるのですか？父……父わ？』
「これは一から説明いるの？」
「いるんでしょうね」
〜〜数時間説明中〜〜
『つまりあなた方はその映画を丸呑みして私が紀子だと勘違いして、呪いを解こうと父つまり古物のマンションを訪ねて、私のバックアップデータを発見してインストールした、という流れでいいですか？』
アライドがあのCDを持って水犬にフリスビーとCDの違いを教えていた。
「……あのCD、デジのバックアップデータが入ってたんだ……そんな感じで、それじゃあこの一週間起きたあの出来事は」
画面にアラームのタイマーが表示された。
『これです、父は帰りが遅くだいたいこの時間に帰ってくるので、自動で点くようにしていたのです』
真夜中にパソコンが勝手に点いた原因がハッキリした。
「それじゃあ、デジが日に日に直っていたのは？」
『外部の付属品です、スピーカー・マイク・インターネット・カメラ、これらが私と連動しています』
総統が試しにマイクを抜いてみるとデジの耳がなくなって、慌てて付け直した。
『分かりましたか？』

「なるほど、マイクがこちらの音を拾うから耳、スピーカーが音を出すという意味で口、カメラは目といったところか」
「インターネットは何なの」
『それはこういった事です』
デジの体が褐色や白肌に自由自在に色を変えた。
「つまり、肌の色素を変えるのか」
「サリィが見た日にインターネットに繋いでましたから、アラネまでは白黒だったんですね」
「いろいと分かってきたところで、本題に入ろうか」
『どうして私がここに来たのかだいたい理解し、私の身におきた出来事を話の最中に修復しておきました』
総統達は飲み物を用意して準備を完了していた。
「ここまできたんだ、話してくれるかな？」
『あれは１５年４ヶ月１５日前……』
「ずいぶん正確な過去…」

当時の私はその時代のワープロ並みに古く壊れやすかったです。
その時は私の体はなく、０と１で作られ、父の手によって画面上に現れたのは簡単なドット絵、それから徐々に時代の流れにのり、私が始めて父と会話したのは、正方形のファイルにドラックという運び方で入れられ、私に口と声が。
そして、正方形の天井に文字が。
「これでいいはず、何を打ち込もうか……」
『ピーピピピーピ』
「その前に音声設定しないと」
これが始めての会話、それから父は私が入っているファイルにいろんな情報が運び込まれました、そのたび私自信で新たなファイルを作り、棚にしまうように整理していました、そうしないとなんども私の体が固くなったからです。
次に私は耳、つまり音をいただきました。

「あーあー、あああ？あ→あ←、聞こえますか？」
『はい……ピーさん』
「そのいれてない言葉のときピーはやめて」
『では、お名前を』
「名前か……古物は…ちょっとな、変な方向で主人とか……」
父は名前を考えていましたが、私はすでに読み方を決めていました。
『お父さん…父……父親…』
「なんだ？そう呼びたいのか？」
『……はい』
「まあ、それでいいか、それじゃあこっちも名前を決めるぞ」
『私の名前？』
「そうだ、呼び方を決められたから何がいいかな…そういえば……」
父は何かを探り出して、それを半分に切り、私と別のもう一人の名前を決めました。
「デジ、これから君はデジだ」
『デジ……それが私の名前』
「これからよろしく、私のかわいいデジ、もう少し成長したらもう一人作ってこの名前をつけよう」
『はい…お父さん……』
そして、父はいろんな情報を私に渡して成長しました、ドット絵から二次元絵に。
「アバターと言って君にとってはコレがデジ、君の身体だ」
『コレが、私の体……』
「それに、コスチュームや部屋の着せ替えも出来る、一石二鳥だろ？」
ですが、ファッションに疎い父はいろんな付属品を私に着せ替えましたが、結局シンプルな今の姿になりました。
ですが、まだ一つおかしい点がありました。
「その目は変えた方がいいかな」
私のアバターの目が異様にキラキラしていて、身体に不自然だった

のです。
『私の目がどうかしましたか？』
「ちょっと……キラキラしすぎかな」
『……少しお待ち下さい……』
私はペイントで他のアバターの目を真似ることにしました。
『どうですか？』
「目がグチャグチャ…目が死んでる…目線が下過ぎ…クマはとったほうが…病気の人の目だ…黒点は描こうよ…鋭い眼差し…丸すぎない？」
『これでどうですか？』
「なかなかいいんじゃない、ピッタシだ」
父は喜んでいましたが、その姿を見ることは出来ませんでした。
『所詮私はパソコンのデータ、目があっても私の目は光を通して色や形を認識することはない、ただの飾り』
そんな私の望みを父は叶えてくれました。
目を閉じるように言われて数分、閉じたとしても何も変わらないはずだった、しかし、私の目に電流が走ったかのように足りなかったものが差し込まれたような感覚が。
「デジ、目を開けて」
目を開ると、目の前に浮かんでいるブラウン管テレビ、そこに映された汚い部屋に幾つもの本や機器が乱雑した映像が流れていた、すると横からみすぼらしい格好の男が出てきた。
「これでどうかな？」
男は手を伸ばして何かを触ると、私の目の奥でゴロゴロと何かが動きそれに合わせてテレビの映像も動いた。
「外の映像をカメラを通して見えるようにした、どうだい」
『この方が私を創り出した父な…の……』
ようやく古物の素顔をみれると思った矢先、映像が途切れた。
『スミマセン、どうやらバックアップデータの中にこの辺りの記録は入ってなかったようです、更に父に関する映像が一片も残ってい

ません』
「素顔の部分を自分で消したのかもしれません」
「なんでそんな事を……」
『映像はなくても私の記録には残っていますし、もう少しでこの記録は最後です、つまり、私自身の消滅』
それから数日後、父と私が自作で作ったゲーム、父はそこに私の基本データとその形を密かに入れて、その条件がデジを私自身を倒すことにしたのです。
父から目をつけてもらってからは父の身の回りを見ることが可能になり。
「デジ！家の鍵どこにおいた？」
『枕の下です』
「そうか！……合ったぞ！、それじゃあ行ってくる」
『足下にきをつけ……手遅れですね』
雑誌を踏んで転けた拍子に棚が父の真上に倒れた。
棚に置かれていたCDと資料が散乱し棚の下敷きになった父は這いずりで部屋から出た。
「もうちょっと早く教えて、それじゃあ行ってくる……」
扉の鍵を閉めて、大急ぎで出て行った父でしたが。
『あ……レポート忘れてる』
机の上にレポートが残ったまま出て行ったらしい。
『もう少し起こすのを早めようか……ん？あれは…』
倒れた棚の上に置かれていた封筒が遅れて束で落ちてきた、封筒の差出人に名前はなくただ、数字が書かれていた。
『そういえば、ここ最近謎の差出人の封筒が増えてる、何が書かれてるんだろう……』
手を伸ばして取ろうとしても届かないし取れない、目に映る光景は現実、私はデータの形をした模人間、現実の封筒を開けて読むことは出来ない、読むことの出来るのはこのパソコン宛のメールだけ。
『父は私にいろんなものを与えてくれた、でも私は何もしていない、

毎日起こすことや、父と遊んだり、運んだりするだけ、倒れた父を助けたり、封筒を手に取り読むことも出来ない』
その日の夜、いつもどうりにアラームで電源が点いたのですが。
「……何度言っても同じだ、娘は渡さない、何度も封筒を送り金額を増やしても……なんだって…まさか……娘は渡さない、切るぞ」
父は帰ってきて、封筒の送り手と口論していました、その火種は。
『私…』
「デジ…聞いてたのか？」
『…いえ、何のことですか？』
父は黙って段ボール箱に荷物を積み込み始めました。
『お父さん…何を』
「デジ…明日は少し早めに帰ってくる、だからいつもより早めに点けといてくれ」
次々と荷物をまとめる父は何もいわずに段ボール箱の数を増やした。
散らかっていた部屋が綺麗になっているのは良いことのはずなのに、その日はそれ以上語らず、自ら電源を切りました。
朝を迎えるといつもはアラームで電源が点いたのですが、父自ら点けて何もせず出て行きました。
部屋には私以外のものはしまわれ閉じられ、抜かれていました。
『私…私は大丈夫…だって父は私を見捨てたりしない…きっと』
分かってるはずなのに、信じているはずなのに、電源を切ることは出来なかった。
私も自分のファイルを整理してから夜を待ちました。
その日の夜……
いつもより二時間早く電源を点けてから三十分後に玄関が開かれ、息を切らしながら父が帰ってきました。
『お父さん…どうした……』
「すまない……デジ…」
『…え！？』
父の手がカメラを掴み私の目が見えなくなり、映像が流れなくなっ

て。
『お父さんどうして！私はあなたの娘なのに…』
「すまない…」
自分を含めて全ての色がなくなり白黒に、更に私の正方形の部屋が崩れはじめ。
『やっぱり私は駄目だったの？』
「すまないデジ」
マイクが切られ、父の声が聞こえなくなり、自分の体が消え始めた、顔が消えて、脚が消えて、腕が消え始めた。
『お父さん…わた…し…は……』
その後はよく分かりません、なぜ私は消されたのか、なぜ私はこうして生きているのか。
なぜ私は捨てられたのか……
なぜ私はまだこうして残っているのか……
会いたい……
私が父の娘なら支えになれたはずなのに……
支えになって父の悩みを聞いたりできたはずなのに…
会って父の支えになる……
会いたい……
崩れた自信の体を必死の思いでかき集め食らいつき作り直した。
これが人なら九死に一生を得たというのでしょう、事実こうして残っている、けれど綺麗なデータでなく不純なデータばかりを取り込みすぎた体はバグとなって、設定された時間に表れるバグとなり父を出ることの出来ない箱の中で待ち続けた。
パソコンの中にいない膨大なインターネットの中にいない、壁の向こうや映像の向こうでもない、見えていた越えられない世界、地上、人の世界。
「今でもその思いは変わらないのかい？」
『父と別れてからこの思いは変わりません、ただ一筋な思いで、会いたいんです』

話が終わると、総統は立ち上がった。
「ちょっと休憩していいかな」
『どうぞ、これも私と人の差ですから』
総統の後に続いてついて来る団員、デジに聞かれないように庭で話すことにした。
「凄いよね、本物の人みたい」
「自分で行動し悩みながら生き目的を持っている」
「総統、このままこの件を投げたりしませんよね？」
総統に目線が集まる。
「どうやら考えていることは同じ用じゃな」
総統達は部屋に入るとカーテンを閉めて陣形をとりスポットライトが当てられる。
『何ですか？これは』
「デジ君、君は見事復活してこの世界に戻ってきた、しかし場所が悪かった」
何もかいていない側のホワイトボードを横から出してきて反転させると黒字で悪の組織W団の文字が。
『悪の組織？…まさか、私はあなた達に利用されるの？』
「頭がいいから話が手っ取り早くすむ」
『じゃあ、今までの悲観的な態度は…』
「演技だ」
小声で後ろの団員は。
「嘘だ」
「見えないところで号泣してたでしょ」
それが聞こえた総統。
「してたけど、今は黙って」
『私をいったいどうするつもり』
姿勢を直して腕を組む総統。
「我等W団の世界征服の協力をしてもらう」
『世界征服の協力？そんなのできるわけ……』

デジの言葉を遮る総統。
「おっと、それ以上は言わなくても分かる、しかしタダで働いてもらうつもりはない」
『どういう事？まさか協力しないと私を消すつもり？』
総統は一度、団員の顔を覗いたのちに答えた。
「協力してもらうのは君のお父さんを見つけるまでだ」
『えっ…』
「世界征服をする過程で偶然見つかった場合、君を親に帰す、これが条件だ、どう？簡単だろ」
「あくまで偶然の話」
『…まって、偶然の話だとしてもこれでは私のお父さんを捜してくれるような……』
「だとしてもそれまでは粉骨砕身の思いで協力してもらう、まず我々W団の第一目標は正義の見方を倒すこと」
『正義の見方？』
「悪の組織の敵だ、そいつを倒すことで我等W団は先に進むのだ、協力してくれるね」
どうやっても私はこの世界からは出れない、外の世界の力を借りるしかない、でもこの人達なら、私の願いを叶えてくれるかもしれない。
『……分かりました、私デジは我等W団の組織に入り、粉骨砕身の思いで世界征服の協力をします』
カーテンが開けられ日差しが部屋に入ってきた。
「よろしく、デジ」
一瞬だったが、はじめて目が見えたときと声が重なり合い、消えていた父の顔がうっすらと見えたようだったが、また消えてしまった。
『お父さん…私は必ず探し出して、今度は私がお父さんの支えになります』
我等W団新メンバーデジ加入（仮）
『それでは、他の方にも挨拶をしたいのですが』

「あ…そ…それがね」
「この組織、君合わせて8人だけなんだ」
『……8？その女の子を入れてですか？』
「サリィは人質だから違うよ」
「ここにいる四人と一匹、そして水犬の元の蛍姫に情報屋のハトの二人と君」
『それで8ですか……』
「いや…確かに8人しかいないけどこれからもっと仲間が増える予定……」
総統がなにやら今後の予定的なものを話しているが、デジは話を聴こうとはせづに小文字で。
『お父さん、あなたを探し出すには膨大な時間がかかりそうです』
と、願いが叶う日がいつになるのか、そして世界征服はいつの話になるのかを考えていた。
「話聞いてる？」
……次の日の朝
いつもは総統が起きて朝食の準備をするのだが、目覚ましのメロディーがいつもとは違った。
『ちゃんちゃちゃちゃんちゃららんちゃんちゃんちゃちゃん、さあ今日も元気にラジオ体操よ～い、1・2・3・4…』
寝室から総統が出てきて新聞を取りに歩いていると、ラジオ体操にかぶせるようにデジが今日の天気を知らせてきた。
『総統おは5ようござい6ます7、今日の天気は8快晴で肩を湿度温度ともに伸ばして去年の平均を背伸びの下回るらしいです運動』
「ややっこしい、凄くややっこしいラジオ体操止めてから天気は聞くから、あと目覚まし時計にラジオ体操て誰が決めたの？」
『エンクランスさんです』
「総統、朝から元気ですね、どうしたんですか？」
「原因の張本人がコーヒー片手にクロワッサン食べてる」
『エンクランスさんおはようございます』

エンクランスが総統が起きたとき作って置いたコーヒーを飲みながら食卓のクロワッサン買い置きを食べていた。
「おはよう、明日は聴いてるだけで熱くなれる曲で」
『キッローの曲でいいですか？あのボクサーの』
「いいね、キッローは有名だからいいんじゃないかな」
「朝から外で走ってこいって言ってるの？その曲聴きながら」
「おはようございます総統、なにやってるんです？」
そんな茶番をしていたらアライドが起きてきた、それに続くように続々と食卓に集まった。
「まだ食事の用意すんでないのに」
すぐに朝食準備にかかる総統だが。
「総統、昨日の新聞どこにおきました？」
「総統、襖の付け替えどうします？」
「総統、爪きりどこでした？」
「総統、イチゴジャムどこでした？」
などなどで、支度ができないと思いきや。
『昨日の新聞はテーブルの脚の調整に使われています、襖は今日の午後に業者が取りに来ます、爪きりは引き出しの一番したの黄色い箱の中、イチゴジャムは切れてます』
「イチゴジャム切れてるの、じゃあブドウにしとこ」
総統の代わりにデジが全てやってくれた、そして、それぞれの仕事があるので、次々とアパートから出て行った。
「助かったよ、毎日こんなんだから、ワシも仕事あるし」
身支度をする総統、もう残っているのは総統だけ。
「それじゃあ行ってくるよ」
『総統、帰ってきてください』
「まるでこれから戦いに行くみたい、大丈夫だよ、みんな戻ってくるから、どんなに離れても、我等W団の絆は仲間以上じゃ、たとえそれが生き物でなくてもね、それじゃあ行ってくるよ」
『総統……』

「あと、これは秘かな決めごとなんだけど、みんな出て行くとき声に出さなくてもいいから、行ってきます、て言うことにしてここに必ず戻ってくる約束をするようにしている、みんなはワシが聴いてるんだが、いつもワシが最後じゃから聴いてくれる人がいなかった」
総統は玄関の扉を開き、閉じる前にこういった。
「でも今は違う、行ってくるね、デジ」
扉は閉じ鍵をかけられ、一人だけ残っているデジ、でも今は前ほど自身の電源を切ることに抵抗はなかった。
『行ってらっしゃい、皆さん、総統、W団』
電源が切れて誰もいなくなった部屋、でもそれは今だけの話、夜になれば悪の組織が動き出す、世界征服を企むためにこの部屋に集まる、それまでは静かに待とう。
冷蔵庫に貼られていたカレンダーが落ち、今日の日付に新メンバーお祝いと書かれていたのはここだけの話。

念伍寺（前書き）

今回の主役は水犬です。

念伍寺

さて皆様はいつも水犬がただただ散歩して出番を少なくしているもとい、人数が増えるとそれぞれの動作を描かなければいけないので、散歩という動作で数あわせしているだけかと思っているでしょう、それは大きな間違い、アラネが銑三と出会っているように水犬も総統達とは別に誰かと会っているのでした、今回はそんな水犬に注目していきましょう。

「行ってきます！」

W団メンバーがいつもどうりそれぞれの1日が始まった。

注意、ここから水犬が普通に喋りますが、実際は犬の鳴き声です、ですが、アラネは水犬の言葉を理解できるので、普通に会話します、もちろん懐かしの蛍姫も理解できます。

「水犬、途中まで一緒に行こう！」

「いつものマンション前？」

「だってそこしかないでしょ？」

アラネと水犬はハト以来道を歩かず屋根の上を走って移動している。

「なんでそっちは蜘蛛糸使えないのにそんなに上手く屋根を走れるの？」

「犬をなめたら駄目だよアラネちゃん、ハハハ…」

調子に乗った水犬は前を見ずに道路越しの屋根に飛び移ろうとしたら見事、新しく立てられたら標識に激突。

「また私の勝ちね」

「うう…鼻が……僕のかわいい鼻が…」

「なんか時間かかりそうだからここでお別れね、じゃあね……」

アラネは水犬を残して工場に向かった。

「これでよし……今日も…か……」

前脚で鼻をなおしたがアラネは既に見えなくなっていた。

「いっつもこんな感じ、どうして僕は負け続けるんだろう……」

四季蜘蛛、正義、アラネに負け続ける水犬は少し自信の弱さを苦に思い始めていた。
歩いていると、捨てられた空き缶を見つけては。
「僕だって……、強いはずなんだ……」
踏み潰して、口にくわえてゴミ箱に投げ捨てている。
それでも気分は晴れない、そんなある時。
「ここは何処だ？」
いつもの公園内を気分を変えて、舗装されていない道を歩いていると、入り口と思われる段差の大きな門に左右には地蔵が置かれていた。
「寺？」
開かれ続けている門をくぐり抜けると石がまだらに置かれた道が目の前に一直線に伸びていた。
水犬はそのまま奥に脚を踏み入れているが、薄々とあることが確かになってきた。
「……普段使われていない道……なのに綺麗に掃かれている、でも何で両端はこんなに濡れてるのかな？雨も降ってないのに……誰かいる！？」
石の道を歩いていると今度は堅く閉じられた門が。
「行き止まり？」
試しに門を軽く引っ掻いてみると、微かに動いたので、数本後ろに下がってから。
「よ～し、体当たり！」
勢いに任して門に体当たり、すると閉ざされた門をこえた水犬は寺に入っていた、その古ぼけ誰も来なくなった忘れられた寺に。
「やっぱりお寺だったんだ…」
「誰だ！」
砂利が敷き詰められた先の仏壇に藁の傘帽子を被った僧のような男が座禅中だった。
「……野良犬か」

日が昇っているが、辺りの樹木で薄暗く、寺じたいそこまで清掃されていない。
チラッと水犬をみた僧はそのまま瞑想に入ろうとしたが。
「野良は野良でも物の怪の類であったか」
僧は立ち上がり井戸から汲み上げた水を柄杓ですくい上げ、ゆっくりと水犬に向けた。
「ここは神聖なる仏の眠る場所、水の物の怪が立ち寄るとは……」
水犬は身の危険を察してきた道を全速力で逃げ出した、僧は柄杓に汲んだ水を水犬に向けて撒くと。
「身の程をわきまえろ！！」
撒かれた水が水犬に向かって飛んできた、水が門をくぐり抜けると扉は閉じられ、一本の道を落ちていた枯れ葉が向かってきた水で道から端に弾かれながら一直線に飛んでくる。
水犬が始めに入ってきた門を間一髪くぐり抜けると、シャボン玉のように門の手前ではじけた。
「掃かれてたんじゃない、あの水で弾かれてたんだ、だから端が濡れてたのか」
関わるべきではない、水犬の勘がそう察している、なのに脚が尻尾が爪が牙が沸騰しているかのように震えている。
僧は柄杓を元の場所に戻し、座禅を組もうとしたら。
「ん……どうやらただの水の物の怪ではないようだな」
いつの間にか扉を開けていた、闘うために戻ってきた。
「いいだろ水の物の怪よ、久しぶりにお経でも読んで成仏させてやろう」
水犬はお得意の突進で僧の体に噛みつこうとしたが、僧の脇に携えられた木刀が僧の一言と共に目に見えない早さで腰から抜かれ水犬は叩き飛ばされた。
「喝！！」
水犬の顔が縦に切れ、吹き飛びながら。
「喝って…お経じゃねえ」

そのまま砂利の上に倒れた。
「成仏せい、水の物の怪よ」
木刀を納めると、水犬は叩かれた顔を治しながら既に立ち上がっていた。
「しぶとい物の怪よ……よかろう、これも修行、千差万別の雑念を切り捨て、成仏させるのが己のさだめ……」
「度重なる敗戦を重ねてきた僕が強くなるために、ここで逃げるわけにはいかない……」
「仏の道は厳しい道よ」
「勝つんだ、この似非僧に」
これが水犬と似非僧の出会いであり。
「成仏せい！物の怪！！」
「初の勝ち星を上げるんだ！！」
水犬が大きく成長するその忘れ去られた寺と一人の男の名は。
念を手足頭に集め人の邪念を感じ取り断ち切る、念伍寺の念伍流酔（ねんいつりゅうすい）
「喝！！」

念伍寺（後書き）

これからは週一でなく二週に一回投稿にしたいと思います。

水滴（前書き）

水犬と念伍の戦い、どっちがかつのか。

水滴

夕暮れ、念伍寺には一人の僧と近くの井戸で汲まれた水と砂利が入った木製のバケツが一個、砂利の上で座禅を組みその目の前に置かれていた。

「……気分はどうだ？水の物の怪よ」

「……」

完敗、なにも出来なかった、一撃もかすりもしないまま斬られ斬られ、体が元に戻らないぐらい立ち上がり攻め続けたのに、勝手に喧嘩を売り、喧嘩を売った相手に情けを受けている。

「……ウゥ」

僕はどうしてこんなに弱いのだろう、四季蜘蛛の一撃で倒れ、正義が変身した後は一方的な闘い、そして今はそれ以上の敗戦。

日が暮れ僧が寺に入ろうと背を向けた隙に、元に戻した体でバケツから飛び出し振り向かずに、逃げるようにその場から去った。

その場に残ったバケツには一滴の水も残ってはいなかった。

僧はバケツを拾い上げ、入っていた砂利を捨て、既に閉じられた門の向こう側を泣きながら走り去る物の怪に話しかけるように。

「水の物の怪よ…次にこの寺にくるときは、門をゆっくりと開けて入ってこい、その時またこの神木で造った木刀でその邪念を叩き斬ってやる、待っているぞ」

と、久方ぶりの来訪者をまた座禅を組みながら待つのだった。

翌日……

相変わらず天気は良好だが、念伍寺は薄暗く一人の来訪者もない、ただ……。

閉ざされた門の向こう側から確かに足音が念伍寺に向かってきている、その聞き覚えのある足音は閉じられた門で止まり、扉を数回引っかいた後、ゆっくりと念伍寺に入ってきた。

「待っていたぞ」

僧はバケツの水を柄杓で撒いていたが、水のまだ入っているバケツと柄杓を投げ捨て、腰に携えた木刀に手をかけた。
「水の物の怪よ！」
そこには、昨日叩き伏せたあの水の物の怪こと水犬が立っていた、昨日あれほど切り捨てた水の物の怪がまた現れた。
「よいのか、手加減は一切しないぞ」
水犬は一度唸ると相変わらずの突進で僧に立ち向かった。
「今度こそ、成仏せい！喝！！」
その日からその寺では似非僧と水の物の怪との奇妙な交流が始まった。
朝に訪れる水犬、それを昼間で成仏させようと闘う念伍、夕暮れ時にはボロボロの体を井戸から汲んできた水で潤して、何も言わずに帰る、そんな日が毎日のように続きそれに合わせていた。
そんなある雨の降る日……
念伍と水犬は雨にうたれながらいつものように対峙していた。
「喝！！」
念伍の得意の居合い切りを顎から切り上げられた水犬、いつもどうり音を立てて倒れた。
念伍は雨水で一杯になったバケツに水犬を入れ雨が当たらない寺の廊下に持って座り、隣に置いた。
「なぜ己の体がボロボロになるまで闘い続ける」
バケツの中をのぞき込んでみるが、波紋も塵ひとつも浮かんではいなかった。
「そこまでして、何の目的もなく、ただ戦いに飢えている猛獣なのか？」
「……」
「噂で聞いている水の化け物とは大違いだな」
この言葉に反応したのかバケツの水面に波が立つ。
「その水の化け物は己の体が崩れ落ちようとも、己の主人の夢を果たすために闘い続けたらしい、町内の回覧板で書いてあった」

中之島の町内イベントに常に書かれている
水犬は治した顔を水面から出して、あたりを見渡した、曇った空がいつまでも続いている、薄暗くなった空に厚い雲、自分にかかっている雲はいつになったら晴れるのだろうか、軒下に置いてある石に雨水が一定に落ちる、それを目で追っている水犬に念伍は一つの言葉を放った。
「雨垂れ石を穿つ」
すると、念伍が立ち上がり寺の中から一つの石像を取り出してきた、その石像は不格好でとても人に見せたら。
「何この石？」
と、言われてもおかしくない石像を取り出してきた。
「これは、拙僧が一つの道具を使い作った像だ」
『像？なんだかクネクネしてて、手らしきものが六本あるこれが？』
水犬は自分の知識をありったけ費やして考えたが、バケツの中に顔が沈んでいった。
「これは、一滴の水で作ったんだ、いや…一滴ではないな…この雨が作ったと言えるかな」
水犬にはさっぱりだった、なんで固い石が水なんかに負けるのか。
「先程まで見ていた軒下の石をみてみろ、一定の場所に落ちた水滴の場所だけ石が削れているだろ」
水犬は顔を出して覗き込んだ、たしかに水滴の落ちた場所だけ石が削れていた。
「拙僧も詳しいことは知らないが、どんなに小さな力でも一生懸命頑張れば固い石でさえ水滴に負けるのだ、そしてこれが水の物の怪、貴様自身の努力だ」
念伍のもっていた木刀の刃の部分が連日の対峙ですっかりボロボロになっていた。
「貴様の突撃ですっかり削れてしまった、武士の魂は刀のように戦いで己の刃が折られればそれは負けだ」
念伍の話を聴いている間に雨が上がりすっかり夕暮れ時。

「水の物の怪よ、拙僧はどこかでこの刃を折るはずだった、しかし折れずしてこう生きながらえている」
念伍は木刀を掲げながら門の先を見つめていた。
「この木刀は拙僧の雑念の塊なのだ、自らの道を曇らせ惑わせるでも捨てられない悔いの一刀、この木刀が折れれば踏ん切りがつき、新たな道に進もうと思っている」
雨はすっかりやんで、水犬は振り向かないで走って帰って行った。
その日から水犬は少しの間寺に行かずにアパートの風呂場で蛇口から垂れる水滴を見つめたり、キッチンの蛇口を見つめたり、パソコンの動画でみたり。
『水犬さん……どうしたんですか？何か調べ物ですか？』
デジの質問にも何も答えないで、ただジッと見ているだけの水犬。
そんな水犬にデジがとある川の映像を流した。
『水犬さん知ってますか？河川の浸食作用と言う奴です、浸食にもいろいろありますがコレは水流が岩石や地層を削る洗掘というものです』
水流が岩石や地層を削る、水滴が石を削る、スケールが変わっただけで水が石に勝っているが、何か足りない。
『僕が突撃で念伍の木刀をボロボロにしたのは確かだけど…あれじゃああと何日で折れるか…程遠いよ』
そうして、夕飯まで時間が残っていたので公園を散歩することに、ついでに落ちてるゴミを拾いながら歩いていると、潰してない空き缶を思いっきり踏んだら一カ所小さな穴が空いた。
『この部分…薄くなってる』
その時、水犬は閃き穴のあいた空き缶を放り投げて、その穴のあいた場所めがけて爪を突き立てた。
『コレなら…コレなら勝てるかもしれない』
水犬はゴミ箱にゴミを捨ててからアパートに帰った。
水犬は悩み事がついに晴れ、捨てられた空き缶には水犬の脚が入るぐらいの穴が空いていた。

水滴（後書き）

二週間といったのに三週間後になっていました、すいません。

念伍の悔い（前書き）

念伍と水犬の戦いが始まる前日の夜

念伍の悔い

船の汽笛、波の音、怯える声、流れる液体、魂が手元から地面に落ち、怒り…焦り…愕然とする仲間達、助けようとした手が、預けたはずの命が…、こんな形で戻ってきた。
「この命…仲間のために……」
あの時の誓いの言葉が今では呪いの言葉。
「この刀でどんな窮地でも救います」
折れずに残った木刀は思念の固まりに。
「これにて……は解散とし、一市民として生活するように」
もう自分の倒れる場所はなくなり。
「ありがとよ、これで俺達もただの一市民として生活できる、もっとおまえが強ければ上に昇れたのによ」
怒りの言葉を返せない自分、それを言い過ぎだとかばってくれる友、だが。
「おお！でたなこのお人好し、だったら今度はお前と戦ってやろうか？おおと、もう俺達は一市民だった、誰かさんが守りきれなかったから……」
木刀を握り締めて我慢していたが、かばっていた友がその大きな拳で一発殴っていた。
「もういいだろ……それ以上は…」
地面に倒れた友はやり場のない怒りを拳にのせて何度も何度もコンクリートの地面を殴った。
「ああぁ！どうして！どうしてこうなったんだ！」
友は立ち上がり近くにあった木の枝で壁を叩き、投げてはまた拾っては叩きを繰り返し、少しは落ちついたのか自分の持ってきたアタッシュケースを持ち上げると、こっちに向けて投げた、しかしあっさりとキャッチされてようやく止まった。
「……もう、そのケースを使う機会もなくなった、滑稽だな、お前

の木刀と一緒だ、そうだろ……念伍！！」
寺の中で寝ていた念伍は飛び起きた。
「……ハァ、またあの時の…」
滑稽だな、お前の木刀と一緒だ。
あの時の言葉がまだ頭に残っている。
「そうだな、一緒…だったな……」
寺から出ると空が少し明るくなっていた。
押し付けがましい願い毎であの水の物の怪を傷つけている。
「しかし、もう少しだ」
水の物の怪のおかげですっかりボロボロになった木刀を見つめる念伍。
「コレが折れたとき、拙僧は新たな道と刀を手に取り歩むことが出来るのだ」
そして、その時が今こようとしている。
念伍はただ待ち続ける、門が開くその時を。

アパート近くのゴミ捨て場、ゴミの回収は今日の夜だが朝から騒がしかったその訳は。
『トウッ』
水犬がゴミ箱を荒らして缶を見つけては高く放り投げて、壁に向かって走り、壁に飛び込んでからの壁を使ったジャンプ、放り投げた缶に爪をたてた前脚で缶を切り裂こうとしていた、そのたびに叩きつけられる缶の音が寝ていた総統を起こして。
「水犬！！何やってるの、ご近所に迷惑でしょ」
と言われ、すぐにアパート内に連れて行かれた。
その日の朝食後……
「水犬、行くよ」
アラネとの屋根競争、いつものように五分五分の走りだったが。
「これじゃあきりがない……そうだ！あの道を使おう」
アラネは進行方向を大きく変え、それに水犬もついて行った。

「あれ…ついてきちゃった？なら今日もあたしの勝ちね」
ある程度走った先に大きな二車線道路が、アラネはいつものように二車線の中央に植えられている木に糸を巻いて難無く向こう側え飛び移った。
飛び移ったアラネは足を止めて水犬に勝利宣言をしようと向こう側にいるであろう水犬に話しかけた。
「残念ね、今日もあたしの勝ち…」
ところが水犬は向こう側にいるどころかアラネを抜き去っていた。
「え…嘘…どうやってここまで、あの幅は水犬の脚力だけじゃ飛び越えれないしそれにあたしと同じぐらいの時間でたどり着いたの！？…待ちなさい、水犬！教えなさいどうやってこっち側にきたのかを…聞こえてる」
アラネの声が聞こえるが頭の中には先程の技を念伍寺のどこで出来るかのシミュレーションをしていた。
『あの技をするには壁と相手の距離が短くも長くもない距離、でも念伍は常に庭の真ん中に立ってるから、どうしようか…』
水犬はアラネとの競争を忘れ、そのまま念伍寺に向かってしまった。置いてかれたアラネは最近の水犬を心配していた、あの闘争心、妙な執着、朝の水犬らしくない行動。
「何かあったのかな……」
アラネは足を止めて水犬の走っていった方向を心配そうに見た。
競争をほっぽりだした水犬は念伍寺の門の前に到着した。
『今までの僕はがむしゃらに攻撃してたけど今日からは違う』
門を開けると念伍は待ちわびた顔で戦闘態勢に入っていた。
「なにも語らない、なにも教えない、なにも拒みはしない、五つの念を体に巡らせ、今こそ悪霊対峙と参ろうか」
両者一歩も動かずに眼で火花を散らしている、風も鳥の鳴き声も聞こえない止まっているように思えてしまうほど静かで真剣な睨み合い。
水犬と念伍が睨み合っていると、風も吹いていないのに一本の木の

枝が揺れ動いた、その拍子に葉っぱが落ちて、砂利の上に落ちた、それを合図に水犬が突っ込む。
「まだそんな無鉄砲な突撃を繰り返すのか、それでは拙僧に勝てんぞ」
念伍の間合いに入った水犬を居合い切りで切り捨てようとした念伍だったが、水犬は間合いに入ったと同時に真横に移動、木刀を抜いた念伍にすかさずわき腹を狙い特攻、間一髪でわき腹を防いだ念伍は立て直しをするためにいつもの場所から寺の端に移動した。
「フェイントを入れるとは、いつも無鉄砲な突撃だと思い込んでいた拙僧の過ちだな、考えたな水の物の怪」
その後も突撃とフェイントを入り混ぜた水犬お得意のスピード戦法で念伍を攻めるが、フェイント対策に突撃してきたら一歩後ろに下がり間合いから遠くなった水犬が横にずれるかそのまま飛び込んでくるのかのパターンの見極める時間を稼ぐために一歩後ろに下がることにした念伍、この念伍の行動で優勢になっていた水犬だったが次第に行動が遅くなっていく。
「どうした、フェイントの動作にキレがなくなってきたぞ」
その言葉に反応した水犬は姿勢を低くして念伍に急接近、居合いの態勢に入った念伍、好機と思った水犬はギリギリまで走ってから切り替えようと考え、間合いの手前で切り替えようとした、その時。水犬の爪の先にあった念伍の間合いが爪先を越えて、水犬の全身を捕らえた。
「こう言えば必ず入れてくるとふんでいた、フェイントのせいでスピードを殺してしまった今のお主は……」
念伍の渾身の居合い切りが炸裂、水犬の胴体が真っ二つになる勢いで辺りに体の水が飛び散る。
「止まった的でしかない」
よろよろと歩く水犬、倒れないように必死に立っているが、顔が上がらない、声が唸ることが出来ない。
念伍は水犬の行動を予想して一歩後ろに下がらずに前に出てきた、

その結果前に出た分間合いが詰まり水犬はきられた。
切られた部分から水が垂れる、倒れたくない思いが強く残った水犬は立ったまま目を閉じてしまった。

正体（前書き）

念伍ＶＳ水犬の決着と別れ

正体

「なかなかよい戦いだった、まさか端に追い込まれるとは」
念伍の後ろは寺の角、なんやかんやで後がなかった。
「この戦いの中で一度も後ろに回り込む動作はなかった、気がつけば寺の端にそして角に追い込まれていた、まるで川に追い込まれ……違うな、削られると言った感じか」
念伍は壁から離れて、気力で立っている水犬に近づいてゆく、すると、どこからか小石が寺の外から木々の間をすり抜けて、水犬の頭に当たった。
水犬は閉じていた目を開けて、念伍の方を向いた。
『……今だ！』
水犬は突如念伍に向かって走り出した、念伍はまだ壁から少ししか離れていなかったが。
「今の体力で真正面から突撃かそれともフェイントか…この場でも充分に対応できる」
速度を上げる水犬、目を凝らして動きを読む念伍。
『ココだ！！』
水犬は足をひねった。
「フェイントか…ならば」
念伍は一歩前に出て木刀を抜き、動きのとまるであろう水犬の胴体を狙った。
「水の物の怪よ今日も拙僧の勝ちだ……」
念伍の木刀は縦に切り上げられ、水犬の体を真っ二つにするはずだった、ところが。
水犬は念伍の木刀をすり抜けて、懐に飛び込んでむと思いきや、そのまま念伍の横を通り過ぎた。
「フェイントでも突撃でもないだと……なら何なんだその行動は……」

そう言いながら振り向いた念伍の目の前には水犬の牙が手の届くとこまで近づいていた、突然の攻撃に木刀で防ごうとしたが、間に合わずに水犬の脚が肩を捕らえ、そのまま念伍は背中から砂利の上に倒された。
倒された念伍は水犬が顔に噛みつこうとしてきたが木刀で水犬の口を閉じなさせないようになんとか挟んでいた、しかし、ボロボロになった木刀に今の水犬の牙を防ぐ強度はなくなっていた、木刀はミシミシとおとをたて、ついには砕けてしまい、念伍の顔面に牙が当たった所で止まった。
ゆっくりと水犬は念伍の顔から牙を離し、倒れた念伍の体の上から降りた。
水犬は今の出来事に頭が追い付いていなかった、眼を閉じて、頭に何か当たって、気がついたら念伍が倒れてて、木刀が…木刀が折れてて、でも、とにかく体が飛び跳ねるくらい、尻尾が引きちぎれるほどに嬉しい。
「……ついにか」
水犬は念伍のことを忘れて走り回っては跳んで、転がって、疲れてはまた走り回っていた。
念伍は折れた木刀を見てから、水犬の通り過ぎたほうをみたら。
「なるほど、壁を蹴って跳んできたのか」
念伍が背にしていた角の壁二カ所に水犬の脚らしき跡が残っていた。
水犬は横を通り過ぎた後すぐに壁に飛び付き、角を利用してブーメランのように素早く速度を落とさずに回り跳び込み念伍を砂利の上に倒し、その勢いで木刀を折った。
ようやく興奮状態から正常に戻った水犬はいつもより静かに座っている念伍に近寄った。
近寄った水犬は折れた木刀を見ては念伍を見て、念伍を見ては木刀を見てを繰り返した。
「……やっと、やっと折れたのか、水の物の怪よ、よくやってくれた、この木刀はお主の勝利の跡であり、これで昔の雑念を折って拙

僧は新しい道に歩めることが出来る、ありがとう」
念伍は水犬に礼をしてから寺の仏壇に折れた木刀を置いて、座禅を組んだ。
「水の物の怪よ、今日はこれで終わりだもう帰ってくれないか」
水犬は井戸から水を汲み上げてバケツに移し替え、それらの用意をし終え入る気満々で片足つけたところで止まった。
「それと拙僧が教えられることも今のお主にはもうない、故にもうココにはくるな」
水犬はなぜそんなことを言うのか分からなかった、木刀？それとも勝ったから？どっちとも？けれどもこの寺に来るのは念伍を強者だから倒すだけではなく、今ではアラネ以外の新しい友達だと思っていた。
なのにどうして？もう会いたくないの？
突然の別れ話に集団猛烈抗議のように吠える水犬。
「言ったはずだ水の物の怪、拙僧は新しい道を歩と、その第一歩としてこの寺から出ることにしていた」
念伍は振り返りもせずにタンタンと喋る。
「何も言わずに去るつもりだった……しかしあの時、誰も来ないこの寺の石を踏み、閉ざされていた門を開けた、一度追い返したにも関わらずあろうことに勝負を持ち込んだ、その無邪気な眼と強くなりたいという心に触れた拙僧は…どこかで捨ててしまった物を再び呼び起こすことができた」
吠えるのを止めて、しっかりと念伍の最後の言葉を聞く。
「もう一度言う、ありがとう…そして、さよならだ」
水犬は何も言わずに地面を見ながら門の前まで歩いて、最後にもう一度念伍を見たが、灯りのない薄暗い寺の中で念伍は仏壇の前で座禅を組んでいた。
水犬は門を音を立てないように少しだけ開け、後ろ脚から寺から出て、最後まで念伍は振り返りることなく門は閉ざされた。
「水犬よ…拙僧以外に良い友がいて羨ましいぐらいだ」

水犬は石畳の一枚一枚を数えながら抜けて開けっ放しの門を通り過ぎると、木の枝から聞き慣れた声がした。
水犬は成長したがまだまだ弱い、あの一閃を当てられた水犬を勝利に導いたのはどこからか飛んできた小石、あれは誰かが水犬を起こすために投げた願いの小石。
「拙僧のようになくしたりしてはいかんぞ」
念伍は戦いのさなかに誰かがジッと水犬を見ている事に気づいていた。
聞き慣れた声の主は水犬の目の前に降りてきた。
「水犬こんなとこで何してるの？」
『アラネちゃん！どうしてこんなとこに！？工場はどうしたの？』
「えっと…工場は…そう、今日は休みなのよ、暇だったからそこら辺歩いてたら偶然会っただけよ、いやー偶然ってすごいね水犬」
偶然でこんなヘンテコな場所にこれるはずない、アラネの嘘はまだ続いていたが。
『そうだね、偶然ってすごいね』
っと、気づいていない振りをした。
水犬はアラネと一緒にまだ昼過ぎの念伍寺からアパートに帰ろうと歩み出した。
その帰りしに落ちていたゴミをアラネが拾い上げ、ゴミ箱に投げ捨てていた。
『だって、僕が苦戦してたときに小石が飛んできたのもきっと……』
「あれは偶然じゃないわよ、ちゃんと狙って……」
『えっ！狙った！？何を』
「あ……違う違う、あたしは…そうゴミよ、ゴミを狙ってあのゴミ箱の穴に入れたのよ、そんな事より今から競走よ」
『どうして急に』
「今朝のリベンジ、負けっぱなしは嫌なの、３２１ドン」
アラネは水犬を置いて走り出した。
『えっ…もう始まったの！？せこいよ急に始めるなんて』

「せこくていいのよ、だってあたし達悪の組織でしょ」
『そんな小さなせこさを持った悪の組織はどうかと思う』
その後、水犬とアラネは走りながらせこいこの小ささを言い争いながらアパートに帰って行った。
その日の真夜中……
念伍寺に続く石畳を誰かが歩いていた、水犬の四足歩行とは違う、一歩一歩が重く石畳を踏んで吸い殻を落としながら口から煙を吐いている。
そんな物の怪が真夜中の閉じられている門を開けて寺の中に入ってきた。
「サムイサムイ…まだ夜は冷えるな、いつもいる場所が熱すぎるだけか？」
物の怪は月明かりと口元の小さな火を頼りに辺りを見渡して、寺の奥にいる念伍を見つけた。
「いたいた、念伍～そこで何して…」
物の怪は廊下から本堂に入ったその時、足元で木が折れたような音がした。
「ん？何か踏んだ」
それは念伍が愛用していた木刀が真っ二つに更に片方は半分になっていた。
物の怪は木刀を持ち上げると足を器用にバタバタさせて慌てた。
「ねねね念伍ちゃん、わ…ワシ大変なことしでかしてしもた、ワシは念伍ちゃんの大切な木刀折ってしもた、どう謝ったらいいんや？」
念伍は座禅を解かずに慌てている物の怪に言い放った。
「まずは足を止めて正座して下さい、あなたの体重で床が抜けます」
「ううん、そうする」
物の怪は顔を縦に振りただちに足を止めて正座をした。
「念伍ちゃん？ワシは…」
念伍は立ち上がると何かを手に持ち、物の怪の横を通り過ぎて本道から外に出た。

「その木刀は今朝の闘いで折れた物」
「今朝折れた…よかった、ワシが初ではないのか……今朝折れただと！」
物の怪は鬼の形相で念伍に近づいてきた。
「誰だ！そいつは！念伍ちゃんが大切に使ってきた思い出の木刀を誰が折ったんだ！念伍ちゃん安心しろそいつはワシとアイツと協力して見つけ出して、燃料にしてくれる」
「おちついてくれ、そいつとは正々堂々と戦った途中で折れたんだ」
「そうなのか……」
「だからそんなに熱くならなくていい、せっかくの葉巻が燃えてしまう」
物の怪はくわえていた葉巻を手に取り、吸い込んでいた煙をまるで燃えている家の煙のように吐き出した。
「ちょっと手遅れだった、半分燃えてしまっている」
物の怪は葉巻の火を消して胸ポケットにしまった。
「しかし念伍ちゃん、あれはワシらが一緒にいたころから持っていた貴重な思い出のはず……」
「しかし時には重荷にもなるんだ」
物の怪は念伍が本道から持っていた物に目を向けた。
「それは何だ？」
念伍の手には折れた木刀より少し長くなった木刀が握られていた。
「新しい道を歩むための護身用さ」
「念伍、それじゃあ……」
念伍は閉じられた門の前に立ち、木刀を構えた。
「水犬よ、礼を言う、拙僧はいまから新たな道を歩」
すると、木製の門が斜めにずれ動き、閉じることが出来ない念伍寺の最初の門のように開きっぱなしになった。
「案内してくれ、ナンバーズのアジトに拙僧も今から世界征服の組織の一人Ｎｏ．５になる」
「なるほど、だからワシを呼んだのか…いいのか？念伍」

「拙僧達は古い付き合いじゃないか、昔の拙僧は消えた、今からは己の野望のために拙僧達の夢のために戦う、だからこそ捨ててきた物もあるだろ……銑三」
念伍と銑三は石畳の道を歩きだした
「そうだな、ワシらは自分の夢のために捨てた物も少なくはないな」
「あの二人が今の拙僧達を見たらなんと言うだろう」
銑三は笑いながら。
「良くは言わんだろうな、一人はそれで消えたのだから……いや、消えたではなくけしたの間違いか」
「違いない、どうやら拙僧達はすでに悪の組織らしくなっているようだ」
その日の夜、念伍寺から二人の不気味な笑い声とともに念伍寺はその日以降誰も近寄らなくなった。
ナンバーズメンバーＮｏ．５念伍流酔、新たな道を歩き出す、それは友と共に己の野望のために悪の組織に入り世界を征服する道だった。

公園の木（前書き）

今回短めになってます、後活動に書いてるのに投稿遅くなってすみませんそれでは本編どうぞ。

公園の木

今回の主役はアライド、いつもは総統もしくはエンクランスの近くで雑魚戦闘員として活躍……しているが、そんな彼が公園で水犬とアラネ、サリィと遊び終えて、一人でぶらぶらしているところからこのお話は始まった。
アライドはアラネのように能力はなく、水犬のように肉体的力はない、まさに今の戦闘員の立ち位置がピッタリのアライドだが。
「W団のなかで正義と戦ってないの僕だけなんだよね」
総統は一度もアライドを戦闘に出したことはなかった。
「戦闘員なのに戦わない……自分はW団に必要なのだろうか……」
そんな不安を抱えながら歩いていると、公園内の綺麗に舗装された道の左右に植えられている花を手入れしている女性が一人、小さなリボン二つついた帽子を被らないで近くの木にひっかけて、手を土まみれにして黙々と作業していた。
アライドはどこか不思議な雰囲気を感じたが、邪魔したらあれなのでそのまま通り過ぎることにした。
ひとしきり歩き回ったらもう夕暮れ。
「アライド、総統さんがそろそろ帰ってくるから私アパートに帰るね」
サリィが一足先に帰って行った、水犬もそれに続きアラネは工場に向かって消えていった。
「一人ココにいたって仕方ないし、帰ろっと」
しかし、アライドはあの花壇の女性も帰っているのか気になり、帰り道の途中でとおるからついでに見に行った、すると……
「あれ…あの人帽子を忘れて帰ったのかな?」
昼間に見かけた女性はいなかったが、木にひっかけていた帽子は残っていた。
「どうしよ、このまま置いといたほうがいいのかな…」

アライドの考えた結論は。
「明日も来るし、いちよう持って帰っとこう」
アライドは帽子を木から取り、手がかりのようなものがないか帽子の裏を見てみたら名前が書かれていた。『野花　緒伊江』
「……なんて読むんだ？」
そして、時間は夜の８時、場所はW団の基地にしているお借りしているアパート。
「のはなおいえさんだと思うよ、でも聞いたことないな」
「総統さんが知らない人か、それは珍しい、町内の人はたいてい覚えてるんですよね総統……あれ？いつの間にかライフが減ってる」
『余所見はだめですエンクランスさん』
「まあ、たいていねたいてい」
食事が終わり自由時間、それぞれ好きなことをしているが、大半はデジの置かれている居間に集まっている。
「中之島さんに聞けばすぐなんじゃない？あの人のお父さん町内会のトップなんですよね？」
「天満さんのこと？たしかにそうだけど…どうするアライド君」
「大丈夫ですよ、そんなに大きな話にする事ではないですし、明日いなかったらそん時はお願いします」
「だあ！また負けた…」
『フフフ、私に勝てると思ったのですか？昔とは違うのだよ、昔とは』
「デジ口調変わってない？」
『あまいあまい、クチョウナンテイツでも変えれるっすよよよよよ』
「あれ…デジ？大丈夫か？おーい」
「総統、デジが口調の変えすぎで何やら奇怪音になってます」
「デジ！！自分を取り戻せ！帰ってこい！カムバック口調」
『ガーピーピピ…はい？どうしました皆さん？』
翌日……
アライドは帽子を持って公園の花壇に向かった、花壇に到着したア

ライドは昨日の女性が作業していた場所に別の誰かが何かを探していた。
「いったいどこで落としたんだ…」
もしかするとこの人は昨日の人の落とし物を捜しているのでは…。
「すみません…もしかしてこれをお探しですか？」
「君は…ちょっと失礼」
男は皮の手袋をつけていて、アライドの持っていた帽子を手にとって名前が書いてある場所をすぐに確認した。
「これだ、これを探していたんだ、よかったよかった」
男はもう離さないような強さで帽子を抱きしめた、顔は被っている帽子と分厚そうな服で見えない、むしろ皮膚が見えないぐらい服で覆い隠している。
「それでは僕はこれで…」
アライドが逃げるようにその場から去ろうとしたら。
「君、ちょっと待ってくれ」皮手袋の男がアライドを呼び止めようとした。
その時のアライドの心情。
「呼び止められた……どうしよう、このままにげようかな…明らか怪しいもの、全身服で見えないし、かかわったらどうなるか見える…軽く昔話で一時間くらい立ち話を強要されるに違いない……あれ？でもこれおばちゃんがする事だよね、でも総統もにたようなことしてるし……」
「君、ちょっといいかな？」
「はい！」
アライドはいい声で返事をしてしまった。
「君はこの帽子をどこで拾ったんだい？」
アライドは嘘をつく理由もなかったので正直に答えた。
「そうか……」
皮手袋の男はため息混じりの呼吸で帽子が引っかけられていた木に近寄った。

「この木は彼女と私にとって付き合いの長い木なんだ」
「やっぱりこうなるのね」
「彼女は花が好きでね、いや…花だけでなく植物全般が大好きなんだ、この木は私達が若かった頃に苗木から植えて成長した木なんだよ」
「若い頃ね…」
植物の成長や寿命を知らないアライドでも、その木は軽く数十年成長していそうな木だった。
「それじゃあその彼女とは小さい頃からのお友達だったんですか？」
「いや…彼女とあったのは婚約者選びの時…」
男はふと年季の入った時計を胸ポケットから取り出すと焦った様子で話しかけてきた。
「そうだ君、ちょっと手伝いを頼めないだろうか」
「手伝い？」
「簡単な手伝いだ、礼はタップリするだから付いてきてくれないかい？」
「こういったらなんですが怪しいおじさんについて行くほど僕は馬鹿じゃないですよ」
しかし、総統がいつもいっていた事を思い出す。
定例会議の時…
「いつもいっていると思うが、困っている人がいれば助けてあげるように……」
「でもここはキッチリと人助けをしましょう」
「助かるよ、それじゃあ付いてきてくれ、場所は近いから」
男は四歩、歩いたとたん思い出したようにアライドに自己紹介をした。
「そうそう、私の名前は野花大杉だ、ひらがなで書くと言葉になるから大杉で頼むよ」
こうしてアライドは大杉という男について行くことになった。

アライド入団（前書き）

アライドはお手伝いで大杉さんについて行く事に。

アライド入団

「すまないね、この年になると筋力が衰えて高い荷物をおろすことさえ難になってしまった」
今アライドがいるのは大杉さんの家の物置部屋、物置部屋といっても軽く今のアパートをしのぐ広さだ、そこでアライドは埃をかぶった荷物の出し入れをしていた。
アライドは約３０分前に怪しい服装の大杉さんと出会い、いつもの公園から徒歩五分で自宅に到着した、外観はレンガと木造の住宅、この住宅を端から端まで大きな柵があり大人二人分ほどあるそしてその柵にはキレイに草が絡み付いて柵の隙間を埋めていた、この草は柵だけではなく家からのびていてまるでプラントハウス（植物園）、そしてかなり年季が入っていそうな花屋だった、しかし大杉さんいわくすでに看板は下ろして別の仕事をしているとのこと、その別の仕事というのが、柵から見えない敷地の半分が霊園になっていた。
「つまり共同墓地のお掃除？」
「そんなとこかな」
「それで一人ではとれないしどこに置いたかわからなくなった道具を今探してハックション…しているとこなんですね」
その後、大杉さんは服を脱いでくるといい部屋から出ていった。
アライドはそのまま荷物の出し入れを続行した。
「それにしてもたくさんあるな、どうすればココまで山になるんだ？ちりも積もればとはいうけど」
部屋の奥は曲がっていて今整理している部屋の二倍の長さがあった。
その光景を見たときアライドの眉がクイッと動き言葉を失い、すぐに手前から手を出すことにした。
「……まさかこれ全部とかじゃないよね」
部屋の明かりは豆電球、窓は棚と箱によって見事にふさがれている。

「あら、どなた？」
部屋に誰かが入ってきた。
「どうもです、大杉さんから手伝ってくれないかと言われて……」
部屋に入ってきたのは昨日の花壇の女性でどこかいい香りがする。
「物置部屋に夫がいると思って持ってきたんですが……そうだ、紅茶飲みます？」
紅茶の香りだった。
「緒伊江どうしてこんなところに」
「あなた、いつものお茶の時間ですよ」
「ああ…そうか、また後で飲むよ、いつもの部屋に置いといてくれ」
女性は持っていた紅茶とともに行ってしまった。
「アライド君、もう少し整理したらお茶にしようか」
大杉さんの服装は一変したとはいえないが、少し薄着になり、顔も見えるようになった。
「先ほどの方が……」
「ん？私の妻の緒伊江がどうしたかい？」
「きれいな方だと……」
「なるほど、若さだね…ちなみに言っておくが私達は夫婦で……七十を過ぎているぞ」
七十過ぎの言葉にアライドはビックリした、大杉さんはまだ五十代かと思ったが、緒伊江さんの年は想定外だった。
ある程度荷物を取り出すと場所を変えてお茶をいただいた。
「ここは？」
「私の部屋だ、少し土臭いと思うが」
大杉さんの部屋はいたるところに植木鉢があり吊り下げられていたり、机に置かれていたり、引き出しや棚の中など思いもしない場所に置いてある、そしてそのほとんどに植物の類が分けられて植えられている。
「すごい量…全然名前わかんないけど……そのドアはなんですか？」
アライドは外に出る扉とその近くにある扉を聞いた。

「それは墓地に繋がっている、もう片方は……」
少し考える素振りをして、置いてあった紅茶を飲んでから。
「私と妻の秘密の部屋かな」
そう言うと大杉さんは軽く笑った。
その後……
「今日はありがとう、おかげで片付いたよ」
時間は夕暮れ時、2人して時間を忘れて片付けをしていたらすっかり日が暮れ始めて帰るのが遅くなっては危ないから大杉さんはアライドに今日の手伝いのお礼をしている。
「でも、まだ目標に届いてませんよ？」
「いいんだ、後は自分でするよ、今日はこんな爺さんの手伝いをしてくれてありがとう」
アライドがアパートに帰るため歩くと大杉さんはアライドが自宅から見えなくなるまで玄関先で立っていた。
翌日……
花野宅に怪しい陰が一つ、インターフォンを鳴らそうと頑張っていた。
そんな壊れたインターフォンの音がちょくちょく鳴るので、大杉さんが自宅から出て見ると。
「君は昨日の……」
「どうもです、今日も手伝いにきました」
こうしてアライドは毎週短い時間だが花野宅の部屋の片づけを手伝うことにした、部屋の片づけついでに古い道具や本が次々と出てきては昔の話をお茶の時に聞く、そして時間が来るとアライドは帰る、初めは部屋の片づけだけだったが、部屋に散らかっている土を掃除したり墓地の草を刈ったりと、誰かから教わった家事能力を使い、大半きれいになった頃。
「アライド君、キミは悪の組織に身を置いていると言ってたね」
アライドはいつもの紅茶を飲みながら、大杉さんの話を聞いている。
「はい、今はW団の基地で寝泊まりしてます」

「そうか……アライド君少し聞きにくいことなんだが、ずっと不思議に思っていた」
大杉さんは一息入れてアライドに聞いた。
「キミの親は……誰なんだい？」
数秒間、２人の動きが止まった。
今までこんなに静まり返った時間はなかった、そんな雰囲気で話を続けたのはアライドだった。
「いないんです……」
「そうか…すまないね…聞く話ではなかった…」
「いいんです、普通に考えたらおかしな話ですよ」
大杉さんは少し間をおいて聞いた。
「事故とか…病とかかい…」
アライドは昔の思い出を、総統に出会った経緯を話した。
「僕は捨てられたんです親に…、まだ僕が小さかった頃、両親の関係はギクシャクで僕の事を見てはくれませんでした、そんなある日ついに親は離婚、残ってしまった僕は母親に押しつけられるように渡され、それ以降の世話はお爺ちゃんと二人で生活しました、お爺ちゃんはあの二人とは違って僕を温かく迎えてくれて、とても幸せでした、初めて家族というのがどんなものかも実感していた数年後……お爺ちゃんは僕を残して逝ってしまいました、もともとそんなに若くもなくむしろよく長生きしていました、そしてお通夜の後、母親の家に訪ねると……、母親の姿はなく家具すらない、僕の目から消えるように姿を眩ませました、どこも行くあてもない僕は一人公園を彷徨するようになったある日……」
１年前アライド１３歳、夜の雨降る公園……
木下で寄せ集めたダンボール箱を使って雨宿りしているアライド、当時のアライドは雨宿りがそのまま自分の寝床になっていた、公園に数日住んでいるせいで周りの人から野良が公園に住んでいると言われる始末。
「なにが野良だ……好きでなったわけじゃない」

そんなアライドの宿に二人の男が近づいてきた。
「なんだ、野良というから調べてみたらまだ子供じゃないか」
「そのようですね、もう少し調べておく必要がありました」
二人の男は更に近づいてくる。
「こっちに来るな！あんたらいったい何のようだ？」
「いや、ただその素敵な場所で雨宿りしようかと」
「このままでは風邪を引いてしまう、いいかな？」
アライドは少し悩んだ後、場所を譲るよう移動した。
「そんな移動しなくていいよワシ等はその大きな木下で雨宿りしたいだけなんだから」
「それと君と少しお話もしたい」
その後はぎこちない雰囲気はあったが、少しずつ時間を忘れて久しぶり人と長い間話をした。
「…そうか、そんな事が」
アライドはどうしてこんな所にいて一人なのかをすべて話した。
「今も恨んでいるのかい？」
「恨んでいるけど…もうどうでもいい、あんたらと喋ってたらアホらしいなったよ」
「そうかい、それなら良かった」
雨はさらに強まり雷も鳴り響くしまつ。
「おっちゃんももう帰ったら？家あるんやろ？」
雨宿りに使っていたダンボールはもう使い物にならないぐらいに濡れていた。
「そうだね、そうするよ」
男は立ち上がり、アライドを残して歩き出した。
その時、雷が落ちて一瞬明るくなり片方の男が着ていたマントにWの文字が。
「あのマーク…たしかココ最近正義の見方と戦ってる悪の組織が使ってるマーク……、おっちゃんちょっと待って」
アライドはダンボールを投げ飛ばして総統とエンクランスに走り寄

った。
「あんたら悪の組織なんか？」
「まあ一様悪の組織をやってるよ」
「なんか嘘っぽいな、じゃあなんでこんな野良に近寄ってきたん？」
「町の人から頼まれて捜査してた、そしてあわよくば仲間にしようかと」
「仲間？」
「そう、悪の組織の仲間にいれて一緒に世界征服をする、みんなが幸せになるみんなが普通に生活する世にするために」
「世界征服…話を聞いたら世界平和にも聞こえる」
「最終目標はそこだね、そのために仲間を集めてるとこ」
「……みんなが幸せ…その組織に子供は不要ですか？」
「不要なんて、ワシ等はこの志に賛同してくれるなら誰でも受け入れるよ」
誰でも受け入れてもらえる、こんな姿をした子供でも受け入れてもらえる。
アライドに考える必要はなかった。
「だったらその組織に入れさせてください、雑魚戦闘員でもなんでもかまわない」
総統とエンクランスは頷いて、手を伸ばした。
「ようこそ、悪の組織W団え」
その後、今住んでいるアパートに到着。
「それで他にどんな方がいるんですか？」
「君合わせて三人目」
「……え、たった三人！？」
「これでも進展してるんだよ、ねぇエンクランス」
タオルで頭を拭きながらエンクランスが答える。
「なかなか集まらなくてね、二人活動開始してもうすぐで二ヶ月もたっている」
「世界征服までほどとういい」

「それで、君の名前はどうする？」
「名前？名前なら昔の…」
総統は紙とボールペンを取り出して文字を書いている。
「君は今悪の組織に入ったんだ、昔の名前を捨てていまから新しく生きていくんだ」
文字を書いては消して書いては消して数分後。
「これから君はアライド君だ」
「なぜにアライド？由来は？」
「特にない、呼びやすそうやなんか悪そうな名前だとは思わないかい？」
「無理があると思います」
こうして昔の自分は捨ててアライドという名で悪の組織の戦闘員として働いて数ヶ月後に総統がサリィを連れてきた。
……
時間は戻って夕暮れ、アライドの話を聞き終えてサヨナラを終えた大杉さん。
「アライド君にそんな過去があったとは、きっとその総統はアライド君の人生を大きく変えて今の優しさが生きているんだ、そして昔のお爺ちゃんのこともあり私にとても親切なんだ」
大杉さんは自室にもどって、アライドに秘密にしている部屋に入った。
「だが、あのままアライド君を訳の分からない悪の組織にいさせるのは危険すぎる、もし怪我でもしたら、それに……アライド君だったら彼女と私の子にするのにピッタリの子だ」
大杉さんは電気をつけると真っ赤に光る裸電球が部屋を赤に染めてあちこちにあるガラスの器が反射している、そして部屋の奥に隠して置いてある白黒の写真を手に取った。
「そうだろ……これで君が望んだ家族に近づく…」
手に着けた皮手袋を外しその年老いた手で写真に写っている女性をなでる。

「幸せな家族に……」

W団か家族か（前書き）

正義の見方と戦闘前日、いつもどうりの作戦会議の結果いつもどうりにメンバーはアラネと水犬の2人だけ、そこにアライドが声を荒げた

W団か家族か

「どうしてなんですか！！」
明日は正義の見方と戦う日それなのにまたアライドは戦力外。
「アライド君、君が戦うのはまだ早い」
「早いって何がですか、アラネちゃんは僕より年下なのに主戦力として戦ってるじゃないですかそれのどこが早いって言うんですか？」
今朝の順番決めからリビングでアライドが珍しく猛反発、他のメンバーは隣の部屋から覗いている。
「どうしたんだろうねアライド」
会議が終わった後アライドが立ち上がって総統に話があると言い、総統は隣の部屋に他のメンバーを移動させた。
「アライド君はよく総統のそばで行動してるけど、いつも自分が前に出されたことがない、まだ水犬が仲間になる前にも三人で戦いにでたことがあった、だが参謀長の私も出さずに総統だけいつものようにやられて帰ってくるのが日常だった」
オレンジマーマレードを食パンに塗り少し心配そうに見ながら食事をしているエンクランス。
「でも今は違う、主戦力の構図が出来てきている今、戦闘員であるアライドがなぜ前に出してもらえないのか」
リビングから少し引っ張って部屋移動をしたデジが使用しおえたデータを袋に詰めてゴミ箱に捨てている。
『まるでスポーツやバンドのメンバー選びでどうして一番最初に入っている自分が選ばれない…そんな感じでしょうか？』
今度は蜂蜜を塗った食パンを食べているアラネ。
「そうなんじゃない、順番がどうあろうと決めるのはアライドじゃない、総統が最終的に決めた結果」
使用した食器は汚れが薄い場合、水犬に渡されて水犬が体を使って洗い流している。

『でも総統さんはどうしてアライド君を出さないんでしょう？』
そんな隣の部屋の雰囲気とは一変のリビング。
「アライド君、キミはまだ戦うのは早いんだ、年齢とかそういう問題ではない」
「なら力ですか、たしかにあの二人に比べたら一番弱いかもしれません、でも……」
アライドが総統にいろいろと言葉の弾を撃つ、その弾が総統のある部分に当たった。
「アライド君いま何といった？」
「でも僕はココの戦闘員として…」
「そこじゃない、その前の一言だ」
アライドは気づいていないが隣の部屋は総統の感情の変化に気が付いた。
「あれ……何か怒ってない？」
「怒ってるといっても見た事ないし」
アライドは自分が放った言葉を思い出して。
「僕が一番弱いかもしれない…ですか？」
「そうだ、君はどうしてそう思ったんだい？」
手元に置いてあるお茶を飲んで一息つける総統。
「それはあの二人に比べたら力もないし、だから一番弱いのは仕方ないけれど……」
アライドの声が大きくなる。
「だからこそ僕が最初にでて少しでも正義の見方に傷をつけたいのに、前にも出してもらえないほど戦力外だと、僕はいったいこの組織に何のために入っているんですか？」
一通り言い終わり椅子に座るアライド、これほど組織内で揺れたことは今までなかった。
「アライド君、キミがどんな気持ちでこの組織にいるのかを今ワシは再認識した」
「総統それじゃあ…」

「だがワシはこのメンバーを変えるつもりはない」
いやな雰囲気がただよう。
「どうして…」
「ワシはこの組織内で順位を決めたことはない、もちろんそれは力の差とかでワシなりに正義の見方を倒す方法を考えてこのメンバーを選んでいる」
「それじゃあ僕は何なんですか？ただの戦闘員以下ということ……」
アライドが言い終える前に総統が今まで見せたことのない表情で立ち上がり割り込んできた。
「アライド！！それ以上なにも言うな、ワシは別にキミが不必要だと言ったか？違うだろ、それがなんだ戦闘員として戦いたい、正義の見方に傷を負わせたい？キミが思っている以上に正義の見方は強い、それを自分が戦えばみんなと同じ位置にたてる組織に貢献できるみたいな事を、今のキミでは正義の見方に一撃も当てることが出来ないままやられるのが良いとこだ、少し昔の水犬が良い例だ」
隣の部屋で何かが倒れる音がした。
「それをキミは…ワシは勝ち目が一切ない戦いをさせ仲間が傷つくようなことをしたくはない、矛盾していると思うが、キミにはまだ早い、ワシの今の気持ちだ」
総統は荒れた息をなおしながら椅子に深く腰を下ろした。
「そうですか……」
アライドはなにも言わずにアパートを出て行った。
「総統……」
隣の部屋で様子をうかがっていたエンクランス。
「水犬？大丈夫だよ昔に比べたらだいぶ良くなってるから」
倒れた水犬を励ましているアラネとサリィ。
「……」
分かってもらうしかない、アライド君もいつの日かW団として戦える日までいまは耐えてもらうしかない。
そう考えながらアライド抜きで明日の戦いの準備をすることになっ

た。

……

アライドはアパートから飛び出すように出て行ったが、行くところは二つしかなかった、公園ともう一つは。

「あれ？誰かいる」

大杉さんの家につくと玄関に大杉さんと若い女性が立っていた。

「先生、何度も申しましたが、あれを渡してくれればもうココにはきません」

「何が申しましたがだ、私とお前は見た目はこうでも歳の差は開いてないんだぞ、私のもとで働いてたときはもっと老けてたけどな」

「先生、女というものは常に美しさを求めるものです、昔は昔、今は今です」

「だったらさばを読んで３０歳なんて言わずに実年齢を言ったらどうなんだ？浅子」

「浅子？誰ですかそれ今の私は芳花」

「またその名前に戻したのか」

「今に分かるは私が名前を戻した理由がね」

芳花と名を変えた女はラベンダーの香りを振りまきながら玄関先に止めて置いた車で待機していたガードと共に颯爽と行ってしまった。

「もう来るな、緒伊江～除草剤持ってきて、塩の代わりに撒いてやる」

そうして大杉さんは撒いてはいけないところは慎重に撒いて、車のあったところには撒き散らした。

「大杉さん？」

「だー枯れろ、枯れた花みたいに体中しわしわになれ……アライド君、いつから見てた？」

「緒伊江さんが除草剤持ってきたところからです」

大杉さんはすぐに除草剤を片付けて、倉庫の掃除を二人で始めた。

「先ほどの方はいったい何者なんです？」

部屋の掃除は最終段階に近づいて、古くなった本が出てきている。

「あれは古溝浅子だった女だ、いまでは昔の名前に戻って…忘れてしもた、とにかくあいつは私と研究を共にした唯一の助手だった」
アライドは話を聞きながら部屋の一番奥までついに到達し棚の上から手を伸ばしていた。
「何の研究をしてたんですか？」
「……それは秘密だ」
そんな話をしていたらきつく入れられていた本があったので、目に当たった緑の本を手に取り丁寧に取り出した。
「なんだろこれ？タイトルも何もかかれていない」
裏返してみると緒伊江さんの名前が。
「日記か何かかなきっと……ん？」
アライドは緒伊江さんの名前の下に日付が書いてあるのを見つけて暗いから明るいところに移動して読んでみようと思ったら。
「アライド君、お茶にしよう」
「はい、分かりました」
アライドは元の場所に本を戻していつもの部屋に移動した。
「あれ？砂糖はどこに置いた？」
大杉さんが砂糖を取りにあの秘密の部屋に入って行った、その間アライドは総統の事を思い出していた。
「総統…組織……ハァ……」
あんなことを言って出て行ってしまった、どういって帰ろう…
「アライド君…アライド君……」
「総統！？」
W団の事を考えすぎて、大杉さんの呼ぶ声が総統が呼んでいるように聞こえた。
「アライド君どうしたんだい？」
「大杉さん…」
「何かあったのかい？いつもはW団の話をしてくれるのに、今日は一言も話そうとはしない」
「実は……」

アライドは今朝おきた出来事を大杉さんに話した。
「なるほどそんなことが」
話し終えた頃には夕方になりいつもならアライドはアパートに帰る時間、でもアライドは帰るかどうか悩んでいる時に大杉さんがこんな事を言い出した。
「アライド君、今夜はここに泊まっていきなさい」
「え？でも…」
「この家に二人は大き過ぎるんだ、人一人泊める部屋はすぐに用意できる、食事も今から用意すれば十分間に合う、どうだい？それにキミに話をしたい」
アライドはこうして1日泊めてもらうことになった。
だが、急な泊まりのはずなのに妙に段取りが素早かった、部屋は倉庫部屋の隣だが部屋はきれいに掃除され人が寝泊まりしても十分なほどに快適な空間になっていた、そして食事の場所はいつもお茶をいただいてる場所だったが、泊まる部屋を見た後に戻ってきたら机の上はきれいに拭かれて対象面に椅子が並べられていた。
そして、食事をいただいている最中に大杉さんが話を始めた。
「どうだい？少し味が薄いかもしれないかな？」
「美味しいですよ」
「それは良かった、緒伊江も喜ぶよ」
緒伊江さんは食事を持ってきた後どこに行ってしまったのか、いつもお茶の時はいない。
「食事の最中すまないが、話をして良いかな」
「どうしたんですか？急に、話なら何でも聞きますよ」
大杉さんは箸を置いた。
「これはキミと私達にとって大きく人生が変わる話だ」
「大杉さん？そんなに重たい話なんですか？」
深く息を吸い込んでから大杉さんはアライドに話した。
「アライド君、今の悪の組織をやめて、私達の養子になってくれないか？」

アライド抜きの戦闘（前書き）

大杉さんのまさかの質問にアライドはどう答えるのか

アライド抜きの戦闘

「これはキミと私達にとって大きく人生が変わる話だ」
この話からまさかこんな事になるなんてアライドは思ってもなかった。
「僕がW団を抜けて大杉さんの養子に？」
「だから言っただろ大きく人生が変わると」
アライドも箸を置いて今の話を思い出す。
「僕がW団を抜けて大杉さんの養子になる……」
考え込んでいるアライドに大杉さんが話しかける。
「今すぐに返答をしなくていい、そのW団もキミをここまで育てた親みたいなものだ、しかし話を聞くと世界征服や正義の見方だとか生死をかけた戦いをしている上に、蜘蛛女や水の犬や鳥人、さらには完全自立電脳…なんとかや人ではない者と一緒に闘っていると聞けば、アライド君キミはただの人でまだ子供だそんな人外の人たちのところで暮らさなくてもいい、なぜなら私達は普通の人間だ、キミのようないい子は私達が引き取り、悪の組織とか言う危険な組織とは縁を切りなさい、心配しなくても私達がキミの住む場所になる」
確かにそうかもしれない自分はただの人で何の力もない、けど……。
「どうして僕を養子に？」
「そういうと思っていた、理由はキミがいい子とか優しいとかもあるが、緒伊江のためでもあるんだ」
「緒伊江さん？」
「私達は見てのとうり若くはない、研究ばかりで緒伊江に何もしてあげれなかった、気がつくと若かった体は衰え子供も出来ずに私達二人だけになってしまっていた、緒伊江は子供を欲しがっていた優しくていつも元気な子を、倉庫部屋で掃除しているキミを緒伊江はいつも何かを願うように見ていた、叶うはずのない願い事をするように、キミが帰ると緒伊江はいつも悲しい目をして、部屋に戻ると」

「あなた？あの子はまたこの家にきてくれるかしら？」
「と私に聞いてくるんだ……」
大杉さんの話が終わり静かになった部屋に緒伊江さんが入ってきた。
「ご飯は終わりましたか？」
「ああ、まだ少し待ってくれ」
「アライド君は？」
「僕もすぐに終わります」
その後、食事は終わり大杉さんが用意した部屋にアライドは移動して、電気をつけずに用意されていたベットに座った。
「この部屋はいつから用意されていた部屋なんだろう」
窓から外を見ると、分厚い雲が月を遮っていた。
「そういえば明日は雨か……総統は明日が雨なのを知ってる上で戦うっていってたな」
今朝の会議で雨の日に戦うことを総統はみんなに話していた。
「次こそは正義の見方に勝つ！行くぞ」
「我等W団！！」
ここの養子になればW団に戻れない。
「緒伊江のためでもあるんだ…」
大杉さんはW団を良くは思ってない、そこでW団に戻った僕を前のように接してくれるのだろうか？
「キミの名前はアライドだ」
W団
「まだ返答をしなくていい、よく考えてから返答してくれ」
大杉さん
「僕はどっちを選ぶんだろう」
アライドは考えながらベットに横たわりそのまま寝てしまった。
……翌日
天気は雨、そんな雨降る公園に傘をささずにたっている五人の影。
「サリィちゃんはどうした」
「サリィちゃんは風邪を引いたら困るから家で待機してる」

「総統、人質の意味は？」
正義の見方ＶＳＷ団の戦いが始まろうとしていた。
「いつもの戦闘員はどうした？見当たらないようだが」
「正義の見方、今日は良くしゃべる、もうすぐ倒されるから最後の遺言をしているのか？ならば存分にするがいい一言一言精細に覚えておいてやるわ…ハックション」
アラネと水犬は前に使ったローブを着ているが総統とエンクランスはいつもの服だけなので。
「やっぱり早く始めよっか、水犬よ貴様の体にこの雨はなんの負担にならない、今こそ正義の見方を噛み倒すのだ」
ローブを脱ぎ捨て水犬登場。
水犬は念五との戦いで技を体得しているが。
『壁になる物がない…』
あの技は物を利用した技で何もない場所だと発揮できないのだ。
「寒いからすぐに終わらせる」
正義の見方が変身して水犬に近寄る、両者程良く近づいて、水犬は正義に向かって走り出した。
その後、健闘した水犬だったがいつもどうり負けて、その後にでたアラネも軽くあしらわれた。
W団の敗戦記録はまだまだ続く。
一方アライドのほうは…
「アライド君少し留守番をしてくれないか？」
大杉さんは緒伊江さんと一緒に雨の中外出した、理由は特に聞かなかったが、待ってる間何もしないのもあれだったので倉庫の掃除を始めることにした、あめのせいで普段からじめじめしている部屋が更に悪化していた。
「これはカビとかが喜びそうな湿度だな」
そんなことを思いながら本に手を伸ばした。
「そういえば、この前変な日記を見つけたの忘れてた」
アライドはこの前見つけた緒伊江さんの日記を改めて確かめた、す

ると…。
「ん？なんだコレは…」
中身は普通の日記で大杉さんと緒伊江さんの日常生活が書いてあるだけだった、だが、それにしても古すぎる、生活や物事のおきた時期さらには昔このあたりに建てられた建物の場所。
「少し前にハトさんの家宝を探してるときに見せてもらった地図にピッタシじゃないか」
さらに日記に書かれていた日付を見てアライドは大杉さんに出会ったあの日を思い出した。
「おかしい、この日記もそうだけど、もしこれが嘘だとしてもあの木はどう説明するんだ？」
アライドは他に日記はないか探し回ったら他にもいろいろとでてきた。
そこに興味深い内容が。
「コレは今から確かめる事が出来る」
アライドはすぐに大杉さんの部屋から行ける墓地に傘をさして踏み込んだ。
大杉さんの墓地はなかなか広く山にも少し入るぐらい、そこにいろんな種類の草や木々が生えている、雨のせいであたりは夜のように暗く、アライドは大杉さんに言われて塀側を清掃していたが、その方向とは逆の山側を歩いてみた。
「あれ？墓地の端まで来たけどなんもない」
道らしき道を歩いたアライドだったが、日記に書かれていた人とは違う墓があった。
「深く考え過ぎかな総統達といたときこんな奇妙な出来事に出会ってばっかりだったから…あれ……」
よく見ると墓に書いてある人の名前と行きたかった場所と反対だと気づく。
「なんだ、反対だった……あれ？…反対……ここの反対側は道がないのに、日記には書いてある」

アライドは日記に書かれていた墓から真っ直ぐ来た道を戻りここの墓地一番上まで上ってきた階段を下りずに道なき道を歩いた、大杉さんはいつも皮手袋を外さなかった、外出するときは家にいる以上に服を着込む、まるで素肌を見せないように、緒伊江さんもそう、ちょこちょこアライドを見に来ていたがいつもすぐどこかえいってしまう。

アライドは大杉さんにとある違和感をいつも抱いていた、その違和感が的中するときがきた。

ある程度歩いてみると木々が倒されて少しだけ開けた場所に出てきた、雨か汗か分からない顔を拭い、アライドは二つの墓を見つけた、他とは場所が離れ他とは扱いが別誰にもみられない誰にも見つかってはいけない、この場所だけにくる専用の階段が備えられて、あの秘密の部屋に繋がっていた。

「そういうことだったんですね大杉さん……」

秘密の部屋に入ろうとしたがもうその必要はなかった。

「知らないままが良かったかもしれない、でもこれはきっちりさせとかないと」

アライドは大杉さんが帰って来る前に他に重要な物がないかを隅々まで探し続けた。

解決（前書き）

大杉さんの隠していた謎をアライドが遂に突き止めた。

解決

雨は朝から止むこともなく降り続いている、悪の組織W団に入る前はいつも雨をしのげる場所を探してはいつもの場所に戻ってきている。
雨降り続く夜、アライドは一年前の自分に戻っていた、どこにも行くところなく何もない場所。
「今更ノコノコと帰れないな……」
アライドは大杉さんの話を自分の意志で断り、雨の中を濡れながら歩いていた。
遡ること数時間前……
「どう言うことだいアライド君、私が人ではないといいたいのかい？」
大杉さんが帰ってきてすぐに話を持ちかけたアライド、その手には緒伊江さんの日記と思われる物、場所は大杉さんの作業場といえるあの秘密の部屋の隣。
「そうです、始めて緒伊江さんに会ったとき不思議な方だなと思いそれ以上は何も感じませんでしたが、合うたんびにどこか違和感を感じていました」
「違和感？」
「そうです、まるで何かに取り付かれているようなそんな違和感です」
頭を掻く仕草をしてアライドの言っている意味を理解しようとする大杉さん。
「アライド君、私はキミの言っている意味が分からないんだが…」
「そうですね、遠回しに言うのはやめます、スッパリ言いましょう」
アライドは緒伊江さんの日記を取り出した、すると大杉さんのほんわかした顔が真剣な顔に変化した。
「まさかそれは…」

「そうです、おそらく緒伊江さんの日記だと思ったんですが、どうやらそうらしいですね」
今の場に緒伊江さんはいない、いつものように二人だけ。
「アライド君、それをどこで見つけた」
「あの倉庫の一番奥の本棚にありました、実は昨日見つけていたんですが今朝これを読んで緒伊江さんの違和感の謎が深まったんです」
アライドは緒伊江さんの日記を開いて日付を指差した。
「これがもし緒伊江さんの日記ならこの元年と書かれた部分は昭和か大正…はさすがにありえませんよね？」
「それはそうだ大正になったら１９２６、今が２０１１年ならつまり８５歳だ」
アライドはさらに続ける。
「でも日記の内容は昭和と大正どっちにも当てはまらない内容だったんです、特にここの部分」
『……政府が……から江戸に……した……』
「言葉が古くってなんて読むのか分からなかったんですが、これ……東京奠都のことですよね？」
大杉さんの顔が少しだけゆがんだ。
「まさか…もしそれが東京奠都だとしたらその日記は……１８６９年に書かれたというのかい」
アライドは頷く。
「つまりここの元年とだけ書かれた部分は昭和と大正ではなく、明治元年と僕は気づいたんです」
もし明治元年に書かれた日記なら緒伊江さんの年齢は軽く１４０歳は越える。
「……たしかにその日記は明治元年から書かれた古い日記だ、しかしそれは私の叔母にあたる人の日記、名前が偶然一緒で緒伊江とは関係ない」
大杉さんはそう言うと軽くお茶を飲んだ。
「そうですか、なら大杉さん僕と会ったときのこと覚えてますか？」

「アライド君と会ったとき…覚えているよ、あの公園の木に緒伊江が帽子を忘れて私が探しているときにキミが持ってきてくれたあの時だろ？」
「そうです、あの時言いましたよね、……この木は私達が若かった頃に苗木から植えて成長した木なんだよって」
「それがなんだい？」
「あの木…ケヤキって言うんですよね？」
またしても大杉さんの顔がゆがんだ。
「アライド君、まさか調べたのかい？」
アライドは近くに置いておいた図鑑を手に取って、目印のついたページを開いて見せた。
「調べました、このとうり」
さらにアライドは大杉さんを攻め立てる。
「しかも日記を読んでみたら面白いことが、あの公園はケヤキの並木を基盤に作られた公園らしいですね、ということはあの公園が出来る前に大杉さんが苗木から植えたという事になる、さらにこの町は公共の場所は昔から変わってないらしくて、以前に見せてもらった地図と大杉さんの植えたと言った木の場所がピッタリ公園内に当てはまりました、もちろんあの並木道です」
大杉さんの口が開いたまま息だけが通過している。
「これをどう言い訳するんですか？」
「それは……」
大杉さんはまだ認めようとはしなかった、アライドは声がでなくなった大杉さんを見て最後のカードを出すことにした。
「教えてください大杉さん、どうしてそこまでして隠し続けようとするんです？僕はもう見つけてしまったんです」
大杉さんは椅子に座り、アライドを背にして窓から見える墓地を眺めた。
「あのお墓……お二人の墓ですよね？」
アライドが見つけた墓石には野花緒伊江と野花大杉と彫られた石が

仲良く二つ並ぶように置かれていた、だだ……、野花大杉の墓石だけ倒され、さらに棺桶の形に穴が掘られていた、誰かが落ちないように鉄の棒が敷かれて。
大杉さんはアライドの前ではいつも帽子をかぶっていたが、その帽子をとった。
「そこまで知ってしまったのか…」
すると大杉さんは帽子で隠していた紐を解き始めた、まるでレスラーの覆面を脱ぐように、暗くてよく見えないが、紐を解き終えた大杉さんは顔に着ていた覆面を取り、皮手袋を脱いで、椅子に座ったままアライドの方に向きを変えて、机の小さな豆電球を点けた。
「アライド君これが私の素顔だ」
そこには今まで自分が５０歳の時の覆面を脱ぎ捨て、およそ１５０年生き続けた男が姿を現した。
「大杉さん……それが本当の顔なんですね」
大杉さんの顔と手は何があったのか緑の肥大化している斑点が浮き出ている。
「なんだ、もう少し驚いた表情がみれると思ったんだが」
笑いだした大杉さん、するとそこに緒伊江さんが入ってきた。
「お茶を持ってきました」
「そこに置いといてくれ」
緒伊江さんは平然と何もおきていないかのように部屋を出ていった、そこでようやく気づいた。
「そうか、やっと違和感が分かったぞ、緒伊江さんには表情というものが全くない、まるで…」
「死体もしくは感情のない機械に話しかけるよう…かな？」
紅茶を手に取り、いつもの砂糖を入れて飲んでいる。
「あなたはどうしてそんな体になってしまったんですか？」
紅茶を味わいながら、ではなくまるで苦い薬を飲み込むように紅茶を飲み干して、机の引き出しから謎の液体が入っている小さなガラス瓶を取り出した。

「不思議な色をしているだろ、これは奇跡の薬だ、人の命を長らえてくれる生命の薬、私が独自に作り出したその名も、ＯＩＥサンプルだ」

昔の話（前書き）

大杉さんの回想

昔の話

「O・I・Eサンプル？」
「そうだ、私はこの薬のおかげで蘇ったのだ、あの山にある墓の中から」
あれはまだ私が若かった頃、日本は大きく変わろうとしていた、政治経済から商業はたまた宗教までも変わり遅れていた日本はよりよい国家、近代国家に変わろうとしていた、今で言う明治維新という奴だ、そのころの私たちは新たな学問研究探求に日夜大忙し、周りの国に追いつくことばかり考えていた、故に緒伊江のことをすっかり忘れてしまっていた、時はあっという間に過ぎ去る、今の私ならその意味がよく分かる、あのころの緒伊江は今のあの木偶人形とは比べものにならないくらい明るく美しかった、だが緒伊江が体調を崩したとき私はただの風邪だと思い目もくれずに今のサンプルを作りだそうとしていた、誰もが願う永遠の命、その代償は完成してもしなくても取り返しのつかないところまで進行していた、緒伊江は死病にかかっていたんだ、わかりやすく言うと伝染病だ天然痘やコレラとか、とにかく両方とも今では予防法方はあるが昔はそんなのはなかった、ただ祈るしかなかったんだ、結果は見るも無惨なことに、私は悔やんだ、悔やみ悔やみ悔やんだ、そして私は自分にはこのサンプルがある、これを使えば緒伊江は蘇る、これを完成させれば緒伊江は蘇る、しかし私自身も死期が近づいていた。
「だから自分の体で試した、本当にそのO・I・Eサンプルが効くかどうかを？」
「そのとうりだ、しかしこの薬には大きなリスクを伴った」
ここで一度話を止め、大杉さんは部屋の中央にあるテーブルの下から木の幹を取り出した。
「アライド君、木はどうやって生きているか考えたことはあるかい？」

突然の質問に頭が回らない。
「人間と同じ？光合成してエネルギーをつくったり、根っこで水分を吸収したり…」
「それじゃあ、木の細胞は生きてるかな？」
「それは生きてるでしょ、死んでたら生きてられないですし」
予想道理の回答に笑う大杉さん。
「ハハハ……そうか生きているか、知ってたかい木材成分の約８０％は死細胞、つまり死んでいる細胞なんだ」
「死んでいる細胞？」
「そう、しかし木は生きている、それは樹体保持という驚異的強度のおかげなんだ、ちなみに生きている細胞は形成層という皮の内側にある層が殆ど、そこで私は考えた、これを人に当てはめたらどうなるか、その結論が」
テーブル下から取り出した木の幹にサンプルの入った瓶の蓋をとり、その液体を幹にかけた。
「自らが木になるという結論に至った」
つまり、人間として必要な部分は生かし不要な部分は死細胞にさせる、しかしただの死細胞ではない、木の幹のように最低限の強度を持った死細胞にする必要があった、それにはまずどうしたらいいか考えた、そしてＯ・Ｉ・Ｅサンプルが完成した、私は当時の助手に私が帰らぬ人になった場合を頼み、緒伊江が眠るあの墓の前でサンプルを飲み、自分の墓の中え入って行った。
「結果は見ての通り大成功！！とはいかなかった…」
墓からでた私はいろいろと試した。
呼吸はしているか？脈は？目は見えているか？
呼吸はしていない、脈もないが目は見えているつまり脳と脊髄は死んでいない、だが…急に頭がぐらりと回ったかと思うほど揺れたり、手が思うように動かない、家に戻ってようやく気がついた、確かにいい感じに死細胞は固まっていたが中途半端に生きている細胞が残ってしまっていた。

「それがこの緑の斑点だ、実験は成功したが私はこの醜い姿となって蘇ってしまった、しかもこの斑点は私に残されたこの世界で生きるために必要な残り２０％に含まれる部分だった、これでは緒伊江も同じ思いをさせてしまう、だが私は大きな間違いに気がついた」
私はサンプルを飲み死んだが緒伊江は病で死んでしまっている、ということは緒伊江にはその２０％の部分すらないということに自らの体を使ってようやく気がついた、とんだ笑い話だ、私の人生は忘れ物だらけ、実験にかまけて緒伊江を失い失ったらサンプルで緒伊江を救おうとして、今度は自らの体さえこのＯ・Ｉ・Ｅサンプルを飲み続けなければならない体になっていた、そんな時に見つけたのが緒伊江の日記だった。
まだ大杉さんが一人の時、サンプルがまだ体になじまずに杖なしでは歩けない状態で、あの倉庫部屋であるものを探していた、自らの体が見事復活したときにすぐにサンプルを作れるように倉庫部屋に隠していたのだ。
「ハァハァ…頭が…どこに置いた…ウウゥ」
すぐに飲まなければ本当に逝ってしまうが、目的のものがなかなか見つからない、そんな大杉さんに古くなった本棚の一列が折れて、本が大杉さんの目の前に落ちてきた。
「危なかった、今の私は小さな傷でも致命傷になりかねない……こ…これは」
それが緒伊江さんの日記だった、そして大杉さんは閃いた。
「そうだ…これさえあれば０ではない、私とこの日記で０から緒伊江を蘇らせたらいいんだ」
こうして大杉さんはサンプルと日記で生前の緒伊江を現代に蘇らせようとした。
「順調だった何もかも、緒伊江は日記に書いてあったとうりに生活させそれに答えてくれた、だが……人は何かしらの欲がある、しかしあの緒伊江には欲というものがなかった…ほんの少し前までは」
外の雨は強まる一方、大杉さんは疲れをなくした体でサンプルを取

り出した机から緒伊江の日記を数冊取り出した。
「大杉さん、分からないことが一つあるんです、どうして僕を養子に？」
「それだよ、緒伊江は自分が生きている…いや、その生き続けるという欲さえあるかどうか怪しい中で、キミにだけ緒伊江は興味というものを示したんだ」
キミ達W団は毎週あの公園で戦っている、そんな正義と悪の戦いに緒伊江が興味を持つとは思えなかったが、試しに見に行ってみたんだ、結果はいつものようになんの表情も動きもなく木偶人形のように立っていた、だが！！
私が帰ろうとしたら緒伊江は私の手を強く握りしめ何かを指差したんだ、その先にアライド君、キミがいたんだ。
「その後も緒伊江は毎週キミだけを見にはたまた一人であの公園を歩いていた、実際に今日の昼過ぎの戦いを見に行ったが、なんの反応もなかった」
「だから僕に留守番を頼んだんですね、W団を見に行ったから」
「緒伊江が帽子を落として帰ってきた時は不安になったが、そのおかげでキミをこの家に呼ぶことが出来た、それに倉庫の中にまだ日記があるかもしれない、しかし私一人では危険すぎた、そこで手伝ってもらうことを口実にキミはこの家に何度も来てくれた、そして昨日の出来事でキミを養子にすれば、緒伊江が望んでいた家族が私が望んでいた緒伊江が完成する」
大杉さんはついに隠していた真相をアライドにすべて話し終えた。
「アライド君、私は無理やりこの空想の家族に組み込むつもりはない、これはキミ自身で決めてもらいたい、悪の組織か家族かどちらかを」
アライドは少し考えたが、返事は決まっていた。
「大杉さん、僕はW団に戻ります」
大杉さんはなんともいえない表情でありながらどこかで分かっていたという感じで立ち上がり、秘密の部屋に入ろうとした。

「そうか、残念だが諦めよう、食事の時に話した緒伊江の一言は私の作り話だ、うまくいけば何も知らずに養子に出来ると思っていたんだが、まさか日記一冊だけでばれてしまうとは」
部屋に入った大杉さんの後を追いかけてアライドも部屋に入った、部屋の中は赤く照らされ何が入っているか分からない瓶が多数に足元は植物が生い茂っていた。
「いつでもここから出て行ってくれてもかまわないよ、私は再び緒伊江を蘇らせることにする」
部屋の奥には生前緒伊江さんが身に付けていたり使用していただろう鏡や服、そして色あせた二人寄り添っている絵。
「そうさせてもらいます、でも一つだけ良いですか？」
「まだ私にいいたりないことがあるのかい？」
アライドは大杉さんに見せてなかった緒伊江さんの最後の日記を自分がいつも飲んでいた席に置いて。
「緒伊江さんは今のままで十分だと思いますよ」
「アライド君、それはどういう……」
大杉さんは緒伊江の部屋から出て、アライドを追いかけたが、既に家を出て行った後だった。
大杉さんはアライドが残した日記を読み始めて、ようやく自分の過ちに気がついた。
「アライド君……私は…もう……」

野花の日記（前書き）

緒伊江の遺した日記に書かれた文とは……

野花の日記

緒伊江さんの最後の日記

『あなた、私の身体はもう長くはありません、それでも私に目もくれないで働くあなたを恨んだことは一片もありません、ただ私が亡くなった後のあなたが心配なのです、あなたはよく周りを見失う癖がありこの前も仕事終わりに隣の部屋でずっと私のために寝ないで祈ってくれましたよね？そんなあなたを残して逝ってしまう私をお許し下さい、もし薬が出来たら私ではなくあなた御自身のためにお使い下さい、最後に私が死ぬ時はどうかお側にいて下さい、愛していました。

野花緒伊江』

アライドはいつもの公園の木下で、最後に書かれていた緒伊江さんの日記を思い出しながら雨宿りをしていた。

「もしかすると大杉さんは緒伊江さんを亡くしてしまったのは自分のせいだと思い込んで、その元であのサンプルで緒伊江さんを蘇らせて謝りたかったんじゃないかな？あくまで自分の考えだけど」

アライドはW団のアパートに帰る理由を考えてはいるが、何も思いつかない。

辺りは雨と夜で真っ暗闇、誰もいないと思っていた公園内を誰かがアライドに向かって歩いてきた。

「こんな所に子供一人危ないよ、何かあったの？」

話しかけてきた男は傘をさしているのに服は雨で濡れていた。

「昨日の会議でもめて今日の戦いに参加しなかった、それで帰る理由を考えてる最中」

「なるほど、それで理由は見つかったかい？」

「いいえ、見つかってません」

すると遠くから誰かを探す声が聞こえてきた。

「総統～！どこいったんですか？総統～！」

「おや…どうやら迎えが来たようだ、キミはまだ帰らないのかい？」
「帰っても何言われるか…だから帰る理由を探してるんです」
「帰る理由か…それならこれで十分じゃろ」
総統は木下で座り込んでいるアライドの前に立って、手を差し伸べた。
「帰るよアライド君、みんなが心配してる」
「……今の僕にピッタシの理由です」
アライドは総統の手を掴んで声のする方え歩き出した。
「それでアライド君…今度の戦い何じゃが…」
「総統、僕はまだ水犬やアラネちゃんのように戦う事は出来ません、だから僕は正義の見方の弱点を探すことにします」
「アライド君……」
「…あっ！！総統！」
声のしていた方からエンクランス達が走ってきた。
「やっと見つけた、どこ行ってたんですか総統？あっ！！アライドだ！」
「アライド君！出て行くときはちゃんと連絡をしないとだめじゃないか」
「アライドあんたどんだけみんなが心配してたか知ってるの」
『アライドさんよかったまた会えて』
「みなさん……」
「さて、これで集合ということで、みんな今回の戦いでずぶ濡れだし銭湯にでも行きましょうか」
「賛成！」
こうして全員一致で銭湯に行くことになった我等W団。
「あれ？でも水犬入れるのかな……」
『なっ！』
「水犬は後でやかん風呂ですよ」
『それならよかった』
「なに？新しいお風呂場？」

「アパートのキッチンが水犬のお風呂場、分かるでしょ？」
「ああ、なるほど」
アライドは総統の隣を歩きながら、大杉さん達が植えたであろうケヤキの木を見ながら。
「大杉さん…僕に家族かW団を選ばせようとしたときすでに答えは決まってました、そう答えは」
僕の家族はW団なんです。

伝説の生き物（前書き）

こんかいはハトさんの出番ですが、始めに過去話から。

伝説の生き物

とある雪山の山岳部……
吹雪の中、必死に下山する男が一人、息切れをおこしながら雪崩から逃げるために走っていた、しかし男は雪崩に巻き込まれてしまった。
雪崩はおさまったが、雪が体に覆い被さり身動きがとれない。
寒さで意識が遠のく、こんな辺鄙(へんぴ)な場所では誰も助けに来てくれない、このまま行方不明となって体も野犬にバラバラにされるのか。
長年かけて伝説や噂で集めた情報を頼りに特定した場所がこの雪山なの…に……。
男はついに眼を閉じて眠ってしまった。
しかし、男は身体が寒くなるにつれておかしな夢を見始めた、真っ暗な何かの中で一人だけ自分が立っていると思った、すると後ろから数人の人が自分の側を通り過ぎて行く、みな服装がバラバラで登山服や潜水服、はたまた何かのパイロットがどこかを目指して歩いている。
ここが死後の世界なのか……こんな真っ暗闇の中を見つけてもらうまで歩き続けるのか……。
自分の手で顔を拭くと、手の感覚が顔を拭いたという実感がない、あるのは青白くなる手と血の気の失せた顔だけ。
誰か…助けてくれ……
いつのまにか足を動かし周りの人と同じように歩き出していた。
すると……
数歩だけ前に歩き出した途端に何かが背中を掴んだ。
男の体は捕まれたままどんどん上え飛んでいった。
上え向かって行くにつれて体がどこか暖かくなり、青白かった手に色が、血の気の失せた顔に血液が巡り始める、服についていた氷がとれていく。

誰かが助けてくれたのか…これで安らかに眠れる……。
男は夢から覚め意識を取り戻した。
「夢……だったのか…」
男はどこかの洞窟の中で目を覚ました、方位磁石を探したが登山用のリュックがどこにもない、男は雪が止んでいることを確認して洞窟から出て、リュックを探しだした。
「いったいここはどこだ」
男は雪崩に襲われた、しかしこうして生きているという事は誰かが助けてくれたはず。
「誰かいないのかー！」
しかし、何の返事もない、そのかわりに男は積もった雪の足場に穴を見つけた、穴は洞窟からそんなに離れてはいない。
すぐに洞窟から下の方にできている雪の穴に近寄った。
「なんだ、この穴は……あれは！」
穴の中に自分の名前が彫られたアイスバイルを見つけた。
「ここにオレは埋もれてたんだ」
更に穴の周りを調べると……
「あった、リュックだこれで何とかなるかもしれない」
男は装備を整え再び下山を試みた。
「しかし、誰が助けてくれたんだ？」
男は山を再び下りようと数歩、歩き出したその時。
「誰かに睨まれている」
男は睨んでいる本体を見つけようと辺りを見渡した。
月の光だけが唯一の光の中で、目を覚ました洞窟から何かが出てきた。
それは文献や伝説に描かれていたとうりの姿をしてこちらを見ている、そしてその大きな翼をひろげ分厚い雲のなかえと、消えるように去っていった。
男は走って追いかけていた、追いつくなんて思ってもいない、ただ自分が捜していた生き物が実在していた、夢じゃない、確かにこの

目で見た、あの眼、あの翼あの胴体。
興奮が治まるまで走り続けた転けても立ち上がり追いかけた、しかし……。
大きな山の裂け目があらわれ追いかけることが出来なくなった。
「ここまでか……でもいたんだ、この目ではっきりとみた」
トカゲに似た或いは蛇に似たその生き物の多くは翼をもち飛ぶことができる、国によっては自然や不死そして強さの象徴。
「いたんだ……ドラゴンは実在していたんだ！！」
その後、男は下山に成功、この話を村で話したが、誰も相手にしてはくれなかった、男は再び山に登り小屋を造ることにした。
「実在していることは分かった、なら次はその存在している証拠を掴んでやる」
それから月日と場所は変わり……

謎の卵（前書き）

過去から日時時間などなどが一気に飛んで、W団のアパートがある町で行われているフリーマーケット。

謎の卵

「お嬢ちゃん、ちょっとちょっと、こっちにおいで、いい掘り出し物があるよ」
ここはフリーマーケット、町の人たちが集まり売買が行われている。
「この石が掘り出し物？」
その一カ所で怪しい男が怪しい石を売っていた。
「そうだよ、これがどうして球体状なのか気にならないかい？」
「別に」
サリィは笑顔で返答した。
「お嬢ちゃんこの石は未知なるパワーを秘めているんだ、そうスペースパワー…これは宇宙から落ちてきた隕石なんだ」
どう見ても少し大きな石にしか見えない、どことなく何かに似ているような気はするが。
「なーんか怪しい」
「お嬢ちゃんこの石は俺がとある山を登っていたときだ、辺りは暗くなり狼の鳴き声が聞こえたり、とにかくもうテントを張って休もうとしたんだ、すると空からいきなりこの石が落ちてきたんだ、分かるかいどういうことか」
「どういうこと？」
「つまり山を登っていたということはただでさえ高いとこにいたことになる、そんな高い場所にこんな石が降ってくるかい？普通ならありえない、おかしい、でも降ってきたのは事実、じゃあどこから～？」
怪しい男はサリィが答えるのを待つように最後をのばした。
「宇宙から？」
怪しい男は手を鳴らして続ける。
「そう！お嬢ちゃん頭良いね、つまりこの石は宇宙の隕石でこの丸いのは大気圏突入の時に丸くなったんだ」

「…でもこんな卵みたいになるの？」
再び手を鳴らす。
「そこ！いいとこに気がつくね、お嬢ちゃんちょっと耳かして」
「やだ、おじさん怪しいもん、それに臭いが…」
「お嬢ちゃん頭良いけど平気でおじさんの痛いとこつくね、おじさん怪しくないよ…ちょっとおっさん臭いだけ」
しかたなく怪しい男は近くのポスターを丸めて筒を作り小さな声ではなした。
「これは宇宙生命、つまり未確認生命体の卵かもしれないんだ」
「未確認生命体？おじさん怪しいのは見た目と臭いだけにして」
「おじさんの怪しいポイント増えてる、でももしかしたら世紀の大発見になる品物なんだよ、それを今なら１０万円にて販売中」
「おじさんそれじゃあ価格も怪しすぎ、それにこんな子供が大金持ってると思うの？」
男はサリィを値踏みするようにジロジロ見てから。
「おっかしいな、どこかのお嬢様かと思ったんだが、しかたない…」
男は紙にボールペンで数字を書いて。
「今ならこの価格、１万円でどう？」
するとサリィはボールペンを取り上げて、紙に書かれた数字を書き直した。
「これぐらいでしょ、６，０００円」
男は負けずにボールペンを取り上げて、書き直した。
「７，５００円…６，０００円…５，０００円…３，５００円…２，０００円…」男
「５，０００円…４，０００円…２，０００円…１，０００円…フランスパンイッポン…」サリィ
「よし、フランスパンで売ってやろう」
交渉成立。
「……あれ？どうしてこうなった？」
こうして運送込みで近くのパン屋で購入したナン五つ、フランスパ

ンは残念ながら売り切れていておまけにクロワッサアもいただいて、時刻夜の7時にその石が食卓に置かれている。
「で、これなんなの？」
「ただの石もしくは卵です」
「宇宙の？サリィちゃん、さすがにそれはないよ、だってそんなＳＦチックな物体この周りでおきた？」
『総統、私はそのＳＦに入ると思うんですが』
「デジはギリギリセーフ、人によってラインが違うんだよ、わしのなかではセーフ」
『セーフかアウトは私の中では判別できますが、この石、どのデータと照合しても合いません、私の大先生世界の知恵のＭｉｋｉｐｅｂｉａでも分かりません』
「そうか…世界の知恵でもっても分からないなら仕方ないね、でもそこら辺に置いとくのもあれだから……そうだ！寝床のふすまにでも入れとこう、アラネちゃん？」
寝床のふすまからぬるりと出てくるアラネ。
「嫌ですよ、あそこはあたしの第二位の寝床なんですよ」
「それは冬場だけでしょ？夏になったらまた外で寝るんだからその間…ね？」
少し考えた末、夏は寝床を正体不明に貸すことに。
こうしてＷ団のふすまにしまわれた石、時期はデジが仲間になった数日後、あれから忘れられた石がＷ団にもたらすのは…悪夢なのか祝福なのか…それは次の話。

クリスマスイヴ（前書き）

リアルタイムで数ヶ月、クリスマスイヴである今宵、素敵な出来事が起きる。

クリスマスイヴ

リアルタイムで数カ月、一人一人がいろんな事がありながら日が流れ、今宵はクリスマスイヴ

街はクリスマスムード一色、総統が働いている郵便局も平鳥さんが頑張って書いたサンタクロースの絵が所狭しと貼られている、なぜかヤドリギの葉の束の下でキスをしている男女の絵があり、それを見ながらうなだれている平鳥さんを時折見かけるが……。

深く考えず、気にしないことにした。

むろん我等がW団もその雰囲気におおいに乗っかろうと借りているアパートで、いろんな飾り付けをした。

とにかく雰囲気が大事だということで、デジの生活しているデスクトップハウスは煙突のある家に雪が降っていて、サンタとトナカイの影が空を飛んでいる外仕様、もちろんデジはサンタコスチューム。

本人曰く『私は別にサンタコスチュームに不満はありませんよ……ただ……、なぜ私の部屋であるデスクトップを外仕様にして、私は見た目外に放りっぱなしのマッチ売りの少女風なんですけど』

そこんとこも深く考えず、気にしないことにした。

『また一週間かけて呪いますよ?』

さて、クリスマスイヴであるW団の食卓にはいろいろと奮発して揃えた品々に、料理番組で見ながら作った七面鳥の丸焼き。

メンバー総員大はしゃぎの中、重要な品が抜けていた。
「……総統、ケーキはどうしたんですか？」
数時間……
「総統さんお休みなさい」
「はい、お休みなさい」
サリィちゃんが誰よりも先にベッドで寝ようとしている時、
「しかし、七面鳥の丸焼きがあって、ケーキが無いのはちょっと惜しかったな」
「まぁまぁ、そんなこと言わない、無くても十二分に楽しかったじゃないかアライド君」
アライドとエンクランスが洗面所で歯を磨きながら話をしている。
「そうよ、それに私は初めてのクリスマスイヴなんだから、ほら…歯ブラシ取ってくれる」
アライドはアラネの歯ブラシを渡したら、アラネは歯を磨きながらデジのパソコンが置いてある机に椅子を運んで、正面に座った。
「どうだった？私もよく知らないけど、クリスマスイヴって七面鳥の丸焼きを美味しい料理を食べる日なんでしょ？」
『？…何か誤解をしているようですね、そもそもクリスマスはイエス＝キリストを祝う日でイヴはその前日なんです』

「へー……キリストって誰？」

デジはアラネに大まかな説明をしている最中に、総統は台所で、なにやら紙を広げて確認をしている。

「……よし、品はちゃんと買ったし後はみんなが寝るのを待つだけ…ん？」

『……と言うことで、あらかた説明しましたが、分かりました？』

「……まぁまぁ？」

『それでいいと思います、あとクリスマスイヴには楽しいイベントがあるんです』

「楽しいイベント？枕投げとか？」

『それはあなたがたが普段やってることです、アラネさんサンタクロースを知っていますか？』

「サンタクロース？あの赤い服に白い髭を生やしたおじさんの事？」

『はい、そのサンタクロースさんは、クリスマス前日に今年いい子にしていた子供にプレゼントを持ってきてくれるんです』

「プレゼントを？」

デジがサンタの説明を始めようとしたら、そこに総統が割って入

ってきた。

「アラネちゃん、話が膨らんでいるとこ悪いんだけど、その話の続きは明日の朝に」

アラネが洗面所に入ると入れ替わりにアライドとエンクランスが食卓に戻ってきた。

「それでは部屋一室借りて寝ます」

「僕ももう寝ますね」

「はい、ワシも少ししたら寝るから」

アライドは食卓の隣にある寝室に、エンクランスは玄関近くの物置部屋に入っていった。

「じゃあ私も寝ますね」

続いてアラネも寝室の襖の中に入っていった。

「さて、みんなは寝たかな？」

それぞれの布団にちゃんとその人物がいるのかを確認。

「よし、みんないる……あれ？誰か忘れてる気が」

『総統さん何してるんですか？』

水犬が水筒から顔を出して総統を見つめていた。

「ああ、水犬ね」

総統は水犬か水筒の中にいるのを確認した上で蓋をきっちりと閉めた。

「これでよし……着替えるか」

総統は台所の戸棚に隠しておいたサンタクロースの衣装を取り出して、こっそりと着替えた。

「町内会の人達と協力してサンタ役を決めて、お父さんの変わりにプレゼントを置きに行く、その協力としてケーキを貰うついでにこの衣装のままみんなにプレゼントを置いていく、完璧な作戦だ」

総統はこっそりと玄関から外にでて、みんなが完全に寝るまで待つ間に、サンタ役としてプレゼントを届けに走り回った。

……真夜中

…カチカチ……ガチャン……

総統はサンタ役としての仕事を終えて、今度はW団のサンタとして、玄関からこっそりと潜入。

「完璧な作戦、それではチャチャっと気づかれないようにプレゼントとケーキを置いて、ワシも寝ようとしようか」

総統はニヤニヤしながら玄関から入り、洗面所を通り過ぎようとした……が

「総統なにしてるんですか？」

まさかのトイレから出てきたエンクランス、総統はエンクランスに声をかけられた瞬間に鋭い視線を送り、内心驚きつつプレゼント類をゆっくりと廊下に置いて、物置部屋の扉を開けて、物置部屋に総統はエンクランスを一本背負いで放り投げ、すぐに総統も部屋に入り扉を閉めた、その間音は一切出してはいない。

音が出たとすれば、投げられたエンクランスが布団の上に着地した音とエンクランスの息を吐いたような。

「グハ」

だけだった。

総統はすぐにエンクランスに事情を話した。

「なるほど、総統はなかなか活きなことしますね」

「だから静かにして、……よしいくか」

扉を開けて物音がしないかを確認して、プレゼントを持ち上げて、こっそりと移動した……二人で。

「なんでついてくるの？」

「えっ！？私が先に様子をみた方が安全だと思うんですが？」

「それもそうだね、じゃあ先に」

エンクランスが先に進み食卓に置いてあるパソコンと水犬の水筒

を確認して、エンクランスは総統を呼んだ。

「ほぼ大丈夫です、何も音がありません」

「よし、まずはデジだね」

総統は台所でこっそり確認したメモを取り出した。

デジの欲しいものヘッドホン付きマイク

「なんか実用的ですね」

「こういう周辺機器はワシには分からんが、試しに繋いでみようか」

総統はプレゼントのヘッドホン付きマイクをパソコンに差して耳に付けてみた。

「総統……パソコンがついていない今は何も音がないのでわ？」

しかし、総統は何か音が聞こえたのか必死にヘッドホンを耳に押さえている。

「総統？」

「なんかね…デジの声が聞こえるんだけど」

「ヘッドホンの音量上げてみます？」

『……そうだ、……から入ろう』

『クリスマスイヴ、私は外に放り出された、雇われ家政婦であっ

た私は雪積もる中、体をふるわせながらどうにか暖まる場所を探し回った、しかし、どこに行っても話を聞いてくれずに町の明かりは刻一刻と消え。
私は最後まで諦めずに歩き回ったが、町の明かりがすべて消えていた。
もう扉を叩いても誰も出てくれないと思った私は、鍵のかかった煙突付きの家の玄関前で体丸めて暖をとろうとした。
しかし、雪は無情にも積もり続け、更に風は強く私の身体から体温を奪い続ける。
凍える手で、放り出された際に一緒に投げられたマッチ棒を、一寸の希望と共に火をつけた。
マッチの火は小さかったが、確かに私の手を暖めてくれている。
マッチの火は数秒で消えてしまったけれど、すぐにもう一つ二つと消える度に新たなマッチに火をつけ続けた。
何も考えないでマッチに火をつけていたら、最後の一つになってしまう。
最後の一つを使うか使わないで待つかを考えていたその時、どこからか鈴の音が聞こえ始め、少しの間その鈴の音を聞いていた。
ある程度鈴の音を聞いていたら、音は次第に小さく小さく、私は慌ててその鈴の音の正体を知りたくなり、自分の暖をとるのに使わずにマッチの小さな灯りで探し始めた。
だが、ほんの数秒だけでは見つけることは出来ずに火は消えてしまいう。
最後の一つを使ってしまい、何も見つけることが出来なかった私は再び玄関前に座り俯く。
私はこのまま寝てしまったらどうなるのだろうか、と考えていたら、消えてしまった鈴の音が今度は次第に近づいてくるように大きくなり。
私はその鈴の音の正体を見ることができた。
数体のトナカイの首に数色もの鈴、そのトナカイはソリを引っ張っ

ていて、そのソリには真っ赤な服を着たサンタクロースが乗っていた。
サンタは私のマッチの火の光をみて、この家に飛んできてくれたのだ。
サンタはすぐに屋根の煙突から空き家の中に入っていった。
そうだ！！
私はすぐに立ち上がり、自分の服に付いていた雪を払い。
そうだ、煙突から入ろう。
こうして私はサンタさんのおかげで、外で凍える事なく、クリスマスを迎えることが出来た……
出演者デジ
脚本　デジ
……』

「……もしかして、デスクトップの絵でお話でも作ったのかな？」

「見なかった事にしよう」
総統はヘッドホンを外して、プレゼントを置いた。
「次は水犬かな」

水犬の欲しいもの、一リットル水筒

「どうやら普段の水筒では狭いらしい、お風呂と人で言うと、体育座りで足がのばせない感じらしい」

「それじゃあリラックスできないね、いちよう水筒は水犬の布団みたいなものだから、早速入れ替えてあげようか」

総統は水筒の蓋を開けて、一リットル水筒に入れ替えようとした

ら。

「あれ？……水筒の中が空っぽだ」

「……えっ？じゃあ本人はどこに？」

総統とエンクランスが台所で水犬を探し始めたら、その本人がちょうど真後ろに。

『総統？なにしてるんギャッ』

水犬が一声軽く鳴いている途中で、すぐにエンクランスが水犬を抱えて、総統が水筒を構えて。

「てい！！」

『ワァァァア』

エンクランスはすぐに水犬を総統の持った水筒に放り投げ、見事一リットル水筒の中に水犬は滑り込むように入っていき、蓋を閉めてすぐにエンクランスの物置部屋に一時退却した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1977j/

我等W団

2011年12月24日23時51分発行